かはるべければ、こゝろよりおこりて死ぬるひとのことを、よく〳〵御はからひさふらふべし、信願坊がまふすやうは、凡夫のならひなればわるきこそ本なればとて、おもうまじきことをこのみ、身にもすまじきことをし、口にもいふまじきことをまふすべきやうにまふされさふらふこそ、信願坊がまふしやうとはこゝろえずさふらう、往生にさはりなければとて、ひがごとをこのむべしとはまふしたることさふらはず。かへす〴〵こゝろえずおぼえさふらふ。詮するところ、ひがごとまふさんひとは、その身ひとりこそ、ともかくもなりさふらはめ、すべてよろづの念佛者のさまたげとなるべしとはおぼえずさふらふ。また、念佛をとゞめんひとは、そのひとばかりこそ、いかにもなりさふらはめ、よろづの念佛するひとのとがとなるべしとはおぼえずさふらふ。五濁増時多疑謗、道俗相嫌不用聞、見有修行起瞋毒、方便破壞競生怨と、まのあたり、善導の御をしへさふらふぞかし。釋迦如來は、名無眼人、名無耳人ととかせたまひてさふらふぞかし。かやうなるひとにて念佛をもとゞめ、念佛者をもにくみなんどすることにてもさふらふらん。それはかのひとをにくまずして、念佛をひと〳〵まふして、たすけんとおもひあはせたまへとこそおぼえさふらへ、あなかしこ〳〵。

九月二日

慈信坊御返事

親鸞

入信坊眞淨坊法信坊にもこのふみをよみきかせたまふべし、かへす〴〵不便のことにてさふらふ。性信坊には、春のぼりてさふらひしに、よく〳〵まふしてさふらふ。くげどのにもよく〳〵よろこびまふしたまふべし。このひと〴〵の、ひがごとをまふしあふてさふらへばとて、道理をばうしなはれさふらはじとこそおぼえさふらへ。世間のことにもさることのさふらふぞかし。領家地頭名主の、ひがごとすればとて、百姓をまどはすことはさふらはぬぞかし。佛法をばやぶるひとなし。佛法者のやぶるにたとへたるには、師子の身中のむしの、しゝをくらふがごとしとさふらへば、念佛者をば、佛法者のやぶりさまたげさふらふなり、よく〳〵こゝろえたまふべし。なを〳〵、御ふみにはまふしつくすべくもさふらはず。

九月廿七日の御文くわしくみさふらひぬ。さては御こゝろざしの錢伍貫文十一月九日にたまはりてさふらふ。さては、ゐなかのひとゞ、みな年來念佛せしはいたづらごとにてありけりとて、かたゞひとゞ、やう〳〵にまふすなることこそ、かへすゞ不便のことにきこへさふらへ。やう〳〵、ふみどもをかきてもてるを、いかにみなしてさふらふやらん、かへすゞおぼつかなくさふらふ。慈信坊のくだりて、わがきゝたる法文こそまことにてはあれ、ひごろの念佛はみないたづらごとなりとさふらへばとて、おほふの中太郎のかたのひとは九十なん人とかや、みな慈信坊のかたへとて、中太郎入道をすてたるとかやきゝさふらふ。いかなるやうにてさやうにはさふらふぞ、詮ずるところ信心のさだまらざりけるときゝさふらふ。いかやうなることにて、さほどにおほくのひとゞの、たちろぎさふらふらん、不便のやうときゝさふらふ。また、かやうのきこへなんどさふらへば、そらごともおほくさふらふべし。また、親鸞偏頗あるものときゝさふらへば、ちからをつくして、唯信鈔、後世物語、自力他力の文のこゝろども、二河の譬喩なんどかきて、かたゞへ、ひとゞに、くだしてさふらふも、みなそらごとになりてさふらふときこへさふらふは、いかやうにすゝめられたるやらん、不可思議のことゝきゝさふらふこそ不便にさふらへ。よく〳〵きかせたまふべし、あなかしこ〳〵。

十一月九日　　親鸞

慈信御坊

眞佛坊性信坊入信坊このひとゞのことうけたまはりさふらふ。かへすゞなげきおぼえさふらへども、ちからをよばずさふらふ。また餘のひとゞの、おなじこゝろならずさふらふらんも、ちからをよばずさふらふ。ひとゞのおなじこゝろならずさふらへば、とかくまふすにをよばず。いまはひとのうへもまふすべきにあらずさふらふ。よく〳〵こゝろえたまふべし。

親鸞

慈信御坊

さては念佛のあひだのことによりて、ところせきやうにうけたまはりさふらふ。

かへすがへすこゝろぐるしくさふらふ。詮ずるところ、そのところの縁そつきさせたまひさふらふらん、念佛をさへらるなんどまふさんことに、ともかくもなげきおぼしめすべからずさふらふ。念佛とゞめんひとこそいかにもなりさふらはめ、まふしたまふひとはなにかくるしくさふらふべき。餘のひとびとを緣として、念佛をひろめんとはからひあはせたまふこと、ゆめ〳〵あるべからずさふらふ。そのところに念佛のひろまりさふらはんことも、佛天の御はからひにてさふらふべし。慈信坊がやう〳〵にまふしさふらふなるによりて、ひとびとも、御こゝろどものやう〳〵にならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへすがへす不便のことにさふらふ。ともかくも佛天の御はからひにまかせまいらせたまふべし。そのところの緣つきておはしましさふらはゞ、いづれのところにても、うつらせたまひさふらふておはしますやうに、御はからひさふらふべし。慈信坊がまふしさふらふことをたのみおぼしめして、これよりは、餘の人を强緣として念佛ひろめよとまふすこと、ゆめ〳〵まふしたることさふらはず、きはまれるひがごとにてさふらふ。この世のならひにて、念佛をさまたげんことは、かねて佛のときをかせたまひてさふらへば、をどろきおぼしめすべからず。やう〳〵に慈信坊がまふすことを、これよりまふしさらふと御こゝろえさふらふ。ゆめ〳〵あるべからずさふらふ。法門のやうも、あらぬさまにまふしなしてさふらふなり、御耳にきゝいれらるべからずさふらふ。きはまれるひがごとどものきこえさふらふ、あさましくさふらふ。入信坊なんどもれもわづらふべくてぞ、さてもさふらふらん、不便にさふらふ。當時そと〳〵の、慈信坊にすかされて、信心みなうかれあふておはしましさふらふなることと、かへすがへすあはれにかなしふおぼえさふらふ。これも、ひとびとをすかしまふしたるやうにきこへさふらふこと、かへすがへすあさましくおぼえさふらふ。それも日ごろ、ひとびとの信のさだまらずさふらひけることのあらはれてきこへさふらふ。かへすがへす不便にさふらひけり。慈信坊がまふすことによりて、ひとびとの日ごろの信のたぢろぎあふておはしましさふらふも、詮ずるところは、ひとびとの信心のまことならぬことのあらはれてさふらふ。よきことにてさふらふ。それを、ひとびとはこれよりまふしたるやうに、おぼしめしあふてさふらふこそあさましく

さふらへ。日ごろやう〳〵の御ふみどもを、かきもちておはしましあふてさふらふかひもなく、おぼえさふらふ。唯信鈔やう〳〵の御文どもは、いまは詮なくなりてさふらふとおぼえさふらふ。よく〳〵、かきもたせたまひてさふらふ法門は、みな詮なくなりてさふらふなり。慈信坊にみなしたがひて、めでたき御文どもは、すてさせたまひあふてさふらふときこへさふらふこそ、詮なくあはれにおぼへさふらへ。よく〳〵唯信鈔後世物語なんどを御覧あるべくさふらふ。年ごろ、信ありとおほせられあふてさふらひけるひと〴〵はみなそらごとにてさふらひけりときこへさふらふ。あさましくさふらふ、〳〵。なにごとも〳〵、また〳〵まふしさふらふべし。

正月九日

眞淨御坊

親鸞

くだらせたまひてのち、なにごとかさふらふらん。この源藤四郎殿におもはざるにあひまいらせてさふらふ、便のうれしさにまふしさふらふ。そののちなにごとかさふらふ。念佛のうたへのこと、しづまりてさふらふよし、かたく〳〵よりうけたまはりさふらへば、うれしふこそさふらへ。いまはよく〳〵念佛もひろまりさふらはんずらんとよろこびいりてさふらふ。これにつけても御身のれうは、いまさだまらせたまひたり。念佛を御こゝろにいれてつねにまふして、念佛そしらんひと〴〵、この世、のちの世までのことを、いのりあはせたまふべくさふらふ。御身どものれうは、御念佛はいまはなにかはせさせたまふべき。たゞ、ひがふたる世のひと〴〵をいのり、彌陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはゞ、佛の御恩を報じまいらせたまふになりさふらふべし。よく〳〵御こゝろにいれてまふしあはせたまふべくさふらふ。聖人の廿五日の御念佛も、詮ずるところは、かやうの邪見のものをたすけんれうにこそ、まふしあはせたまへとまふすことにてさふらへば、よく〳〵念佛そしらんひとを、たすかれとおぼしめして、念佛しあはせたまふべくさふらふ。またなにごともたび〳〵便にはまふしさふらひき。源藤四郎殿の便にうれしうて、まふしさふらふ。あなかしこ〳〵。

入西御坊のかたへもまふしたうさうらへども、おなじことなれば、このやうをつ

たへたまふべくさふらふ。あなかしこ〳〵。

親鸞

性信御坊へ

ひと〴〵のおほせられてさふらふ、十二光佛の御ことのやう、かきしるしてくだしまいらせさふらふ。くはしくかきまいらせさふらふべきやうもさふらはず、をろをろかきしるしてさふらふ。詮ずるところは、無碍光佛とまふしまいらせさふらふことを、本とせさせたまふべくさふらふ。無碍光佛は、よろづのものゝあさましきわるきことにはさはりなく、たすけたまはんれうに、無碍光佛とまふすとしらせたまふべくさふらふ。あなかしこ〳〵。

親鸞

十月廿一日

唯信御坊御返事

諸佛稱名の願とまふし、諸佛咨嗟の願とまふしさふらふなるは、十方衆生をすゝめんためときこへたり。また十方衆生の疑心をとゞめんれうときこへてさふらふ。彌陀經の十方諸佛の證誠のやうにてきこへたり。詮ずるところは方便の御誓願と信じまいらせさふらふ。念佛往生の願は如來の往相廻向の正業正因なりとみえてさふらふ。まことの信心あるひとは、等正覺の彌勒とひとしければ、如來とひとしとも、諸佛のほめさせたまひたりとこそきこへてさふらふ。また彌陀の本願を信じさふらひぬるうへには、義なきを義とすとこそ、大師聖人のおほせにてさふらへ。かやうに義のさふらふらんかぎりは、他力にはあらず自力なりときこへてさふらふ。また他力とまふすは佛智不思議にてさふらふなるときに、煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりをえさふらふなることをば、佛と佛のみ御はからひなり。さらに行者のはからひにあらずさふらふ。しかれば義なきを義とすとさふらふなり。義とまふすことは、自力のひとのはからひをまふすなり。他力には、しかれば義なきを義とすとさふらふなり。このひと〴〵のおほせのやうは、これにはつや〳〵としらぬことにてさふらへば、とかくまふすべきにあらずさふらふ。また來の字は、衆生利益のためには、きたるとまふす。方便なり。さとりをひらきては、かへるとまふす。

ときにしたがひて、きたるともかへるともまふすとみへてさふらふ。なにごともなにごとも、またたゞまふすべくさふらふ。

二月九日　　親鸞

慶西御坊御返事

御消息集終

歎異鈔

竊廻愚案。粗尋古今、歎異先師口傳之眞信、忍有後學相續之疑惑。幸不依有緣知識者、爭得入易行一門哉。全以自見之覺悟、莫亂他力宗旨。仍故親鸞聖人御物語之趣、所留耳底、聊註之、偏爲散同心行者之不審也、云云。

一。彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと。云云。（第一節）

一。各々十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをこひきかんがためなり。しかるに、

念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしおはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゝしき學生だち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひとゞゝにもあひたてまつりて、往生の要よくゝきかるべきなり。親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかうぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念佛は、まことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說敎、虛言なるべからず、佛說まことにおはしまさば、善導の御釋虛言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。詮ずるところ愚身が信心におきては、かくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと、云云。（第二節）

一、善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひと、つねにいはく、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この條、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして惡人は、とおほせさふらひき。（第三節）

一、慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐることときはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふがごとく、衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし、不便とお

もふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念佛まうすのみぞ、するゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべきと。云云。（第四節）

一。親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること、いまださふらはず。そのゆへは、一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれも〳〵この順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにて、はげむ善にてもさふらはゞこそ。念佛を廻向して、父母をもたすけさらふはめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと。云云。（第五節）

一。專修念佛のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ爭論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ。ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒凉のことなり。つくべき緣あればともなひ、はなるべき緣あれば、はなるゝことのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可說なり。如來よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや。かへすゞがへすあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしりまた師の恩をもしるべきなりと。云々。（第六節）

一。念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし。罪惡も、業報も、感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへに無碍の一道なりと。云云。（第七節）

一。念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をはなれたるゆへに行者のためには非行非善なりと。云々。（第八節）

一。念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜のこゝろ、おろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞も、この不審ありつるに唯圓房おなじこゝろにてありけり。まく〳〵案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに

佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも、煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまゝで流轉せる、苦惱の舊里はすてがたく、未だうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりおしくおもへども、娑婆の緣つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ淨土へまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらひなましと。云々。（第九節）

一。念佛には、無義をもて義とす、不可稱不可說不可思議のゆへにと、おほせさふらひき。そも〳〵、かの御在生のむかし、おなじこゝろざしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を當來の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひと〴〵にともなひて、念佛まうさるゝ老若、そのかずをしらずおはしますなかに、聖人のおほせにあらざる異義どもを、近來はおほくおほせられあうてさふらふよし、つたへうけたまはる、いはれなき條々の仔細のこと。（第十節）

一。一文不通のともがらの念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛まうすか、また、名號不思議を信ずるかと、いひおどろかして、ふたつの不思議の仔細をも分明にいひひらかずして、ひとのこゝろをまどはすこと、この條かへす〴〵もこゝろをとゞめて、おもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、たもちやすく、となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものを、むかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて、念佛まうさるゝも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して眞實報土に往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議、ひとつにしてさらにことなることなきなり。つぎにみづからのはからひをさしはさみて、善惡ふたつにつきて、往生のたすけさはり、二樣におもふは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこゝろに往生の業を

はげみて、まうすところの念佛をも、自行になすなり。このひとは名號の不思議をもまた信せざるなり。信せざれども邊地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆへにつゐに報土に生ずるは、名號不思議のちからなり。これすなはち誓願不思議のゆへなればたゞひとつなるべし。（第十一節）

一、經釋をよみ學せざるともがら、往生不定のよしのこと、この條すこぶる不足言の義といひつべし。他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ、念佛をまうさば、佛になる、そのほか、なにの學問かは往生の要なるべきや。まことにこのことはりにまよひはんべらんひとは、いかにもいかにも學問して、本願のむねをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども聖敎の本意をこゝろえざる條、もとも不便のことなり。一文不通にして、經釋のゆくちもしらざらんひとの、となへやすからんための名號にておはしますゆへに、易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり。難行となづく。あやまて學問して、名聞利養のおもひに住するひと順次の往生いかゞあらんずらんといふ證文もさふらふぞかし。當時專修念佛のひとゝ、聖道門のひとゝ、諍論をくはだてゝ、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりたりといふほどに、法敵もいできたり、謗法もおこるなり。これしかしながら、みづからわが法を破謗するにあらずや。たとひ諸門こぞりて、念佛は、かひなき人のためなり、その宗あさしいやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく、下根の凡夫、一文不通のものゝ、信ずればたすかるよし、うけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやしくともわれらがためには最上の法にてましまし、たとひ自餘の敎法はすぐれたりとも、みづからがためには、器量およばざればつとめがたし、われもひとも生死をはなれんことこそ諸佛の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずは、たれのひとかありてあだをすべきや。かつは諍論のところには、もろ〳〵の煩惱おこる、智者遠離すべきよしの、證文さふらふにこそ。故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、佛ときをかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる、またひとありて、そしるにて、佛說まことなりけりとしられさふらふ、しかれば往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり、あやまてそしるひとのさふらはざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんともおぼえさふらひぬべけれ、かくまうせばとて、かならずひとにそしられんとにはあらず、佛のかねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひを

あらせじと、ときをかせたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。いまの世には、學問してひとのそしりをやめん、ひとへに論議問答をむねとせんと、かまへられさふらふにや。學問せば、いよいよ如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんどとあやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをもとききかせらられさふらはゞこそ、學生の甲斐にてもさふらはめ。たま〳〵なにごゝろもなく、本願に相應して念佛するひとをも、學問してこそなんどと、いひおどさるゝこと、法の魔障なり、佛の怨敵なり。みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて他をまよはさんとす。つゝしんでおそるべし、先師の御こゝろにそむくことを。かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることを。（第十二節）

一、彌陀の本願不思議におはしませばとて、惡をおそれざるは、また本願ぼこりとて、往生かなふべからずといふこと、この條本願をうたがふ善惡の宿業をこゝろえざるなり。よきこゝろのおこるも、善業のもよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも、惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、兎毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき唯圓房は、わがいふことをば信ずるかとおほせさふらひしあひだ、さんさふらふと、まうされさふらひしかば、さらばわがいはんこと、たがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領狀まうされてさふらひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき。おほせにはさふらへども、一人もこの身の器量にては、ころしつべしともおぼへずさふらふと、まうされてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことを、たがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし。なにごとも、こゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことを、しらざることをおほせのさふらひしなり。そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりた

るものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて惡をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やう〳〵にあしざまなることのきこえさうらひしとき、御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとこそあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく惡は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。されば とて身にそなへざらん惡業は、よもつくられさふらはじものを。また、うみかはに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりて、いのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畑をつくりてすぐるひとも、たゞおなじことなり。さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうにおもひ、あるひは道場にはりぶみをして、なんなんのことしたらんものをば、道場へいるべからずなんどいふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめしてうちには、虛假をいだけるものか。願にほこりて。つくらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。さればよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信鈔にも彌陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれがたしとおもふべきとさふらふぞかし。本願にほこるこゝろのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらふ。おほよそ惡業煩惱を斷じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を斷じなば、すなはち佛なり、佛のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましまさん。本願ぼこりといましめらるゝひと〳〵も、煩惱不淨具足せられてこそさふらふげなれば、それは願にほこるゝにあらずや。いかなる惡を本願ぼこりといふ、いかなる惡かほこらぬにてさふらふべきぞや。かへりてこゝろをさなきことか。（第十三節）

一。一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと、この條は十惡五逆の罪人、日ごろ念佛をまうさずして、命終のとき、はじめて善知識のおしへにて、一念まうせば、八十億劫の罪を滅し、十念まふせば、十八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十惡五逆の輕重をしらせんがために、一念十念といへるが滅罪の利益

なり。いまだわれらが信ずるところにおよばず。そのゆへは彌陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起する時、金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すればもろ〳〵の煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましまさずば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解脫すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念佛は、みなことごとく如來大悲の恩を報じ、德を謝すとおもふべきなり。念佛まうさんごとに、つみをほろぼさんと信ぜんは、すでにわれとつみをけして、往生せんとはげむにてこそさふらふなれ。もししからば、一生のあひだ、おもひとおもふこと、みな生死のきづなにあらざることなければ、いのちつきんまで念佛退轉せずして往生すべし。たゞし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、また病惱苦痛をせしめて、正念に住せずしてをはらんに念佛まうすことかたし。そのあひだそのつみをば、いかゞして滅すべきや。つみきえざれば往生はかなふべからざるか。攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをはる共、すみやかに往生をとぐべし。また念佛のまうされんも、たゞいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがひて、いよ〳〵彌陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそさふらはめ。つみを滅せんとおもはんは自力のこゝろにして、臨終正念をいのるひとの本意なれば、他方の信心なきにてさふらふなり。（第十四節）

一。煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと、この條もてのほかのことにさふらふ。即身成佛は、眞言秘敎の本意、三密行業の證果なり。六根清淨は、また法華一乘の所說四安樂行の威德なり。これみな難行上根のつとめ、觀念成就のさとりなり。來生の開覺は、他力淨土の宗旨信心決定の道なるがゆへなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり。おほよそ今生において、煩惱惡障を斷せんこと、きはめてありがたきあひだ、眞言法華を行ずる淨侶なをもて順次生のさとりをいのる。いかにいはんや、戒行慧解、ともになしといへども、彌陀の願船に乘じて生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黑雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無碍の光明に一味にして一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにてはさふらへ。この身をもてさとりをひらくとさふらふなるひとは、釋尊のごとく種々の應化の身をも現じ、三十二相、八十隨

形好をも具足して、説法利益さふらふにや。これをこそ今生にさとりをひらく本とはまうしさふらへ。和讃に金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてけるとさふらへば、信心のさだまる時に、ひとたび攝取してすてたまはざれば、六道に輪廻すべからず。しかればながく生死をばへだてさふらふぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらふをや。淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくと、ならひさふらふぞとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。（第十五節）

一、信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと、この條、斷惡修善のこゝちか。一向專修のひとにおいて、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。その廻心とは、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては、往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ。一切のことに、あしたゆふべに、廻心して往生をとげさふらふべくば、ひとのいのちは、いづるいき、いるいきをまたずして、をはることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば攝取不捨の誓願はむなしくならせおはしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといひて、こころにはさこを惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすが、よからんものをこそ、たすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらすることゝろかけて、邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず、わろからんにつけても、いよ〳〵願力をあふぎまいらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろもいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生には、かしこきおもひを具せずして、たゞほれ〴〵と、彌陀の御恩の深重なることつねにおもひいだしまいらすべし。しかれば、念佛もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの、別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらふよしうけたま

はる、あさましくさふらふ。（第十六節）

一、邊地の往生をとぐるひと、つゐには地獄におつべしといふこと、この條いづれの證文にみえさふらふぞや。學生たるひとのなかにいひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。經論聖教をばいかやうにみなされてさふらふやらん、信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、邊地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそうけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、つゐにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如來に虛妄をまうしつけまいらせてさふらふなれ。（第十七節）

一、佛法の方に施入物の多少にしたがひて、大小佛になるべしといふこと、この條不可說なり云々、比興のことなり、まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからずさふらふ。かの安養淨土の教主の御身量をとかれてさふらふも、それは方便法身のかたちなり。法性のさとりをひらいて、長短方圓のかたちにもあらず、青黃赤白黑のいろをもはなれなば、なにをもてか大小をさだむべきや。念佛まうすに化佛をみたてまつるといふことのさふらふなるこそ、大念には大佛をみ、小念には小佛をみるといへるか。もしこのことはりなんどに、はしひきかけられさふらふやらん。かつはまた檀波羅蜜の行ともいひつべし。いかにたからものを佛前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなばその詮なし。一紙半錢も佛法のかたにいれずとも、他力にこゝろをなげて、信心ふかくば、それこそ願の本意にてさふらはめ。すべて佛法にことをよせて、世間の慾心もあるゆへに、同朋をいひおどさるるにや。（第十八節）

一、右條々は、みなもて信心のことなるゝより、ことおこりさふらふか。故聖人の御もとのがたりに、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおほかりけるなかに、おなじ御信心のひとも、すくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして御相論のことさふらひけり。そのゆへは、善信が信心も聖人の御信心もひとつなりとおほせのさふらひければ、勢觀房念佛房なんどまうす御同朋達もてのほかにあらそひたまひて、いかでか聖人の御信心に、善信房の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、聖人の御智慧才覺ひろくおはしますに、ひとつならんとまうさばこそ、ひが

ごとならめ、往生の信心においては、またくことなることなし、たゞひとつなりと御返答ありけれども、なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、詮ずるところ聖人の御まへにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をまうしあげければ、法然聖人のおほせには、源空が信心も如來よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も、如來よりたまはらせたまひたる信心なり、さればたゞひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは源空がまいらんずる淨土へはよもまいらせたまひさぶらはじとおほせさふらひしかば、當時の一向專修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともさふらふらんとおぼえさふらふ。いづれも〳〵くりごとにてさふらへども、かきつけさふらふなり。露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、あひともなはしめたまふひと〴〵御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをも、まうしきかせまいらせさふらへども、閉眼のゝちはさこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくの義どもおほせられあひさふらふひと〴〵にも、いひまよはされなんどせらるゝことのさふらはんときは故聖人の御こゝろにあひかなひて、御もちゐさふらふ、御聖教どもを、よく〳〵御覽さふらふべし。おほよそ聖教には、眞實權假ともにあひまじはりさふらふなり。權をすてゝ實をとり假をさしおきて眞をもちゐるこそ、聖人の御本意にてはさふらへ。かまへて〳〵、聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ。大切の證文ども、少々ぬきいでまいらせさふらふて、目やすにして、この書にそへまいらせてさふらふなり。聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懷さふらひしことを、いままた案ずるに、善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみつねに流轉して出離の緣あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。されば、かたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩の、たかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひともよしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには、善惡のふたつ、總

じてもて、存知せざるなり、そのゆへは、如來の御こゝろに、よしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさふらひしかまことに、われもひとも、そらごとをのみまうしあひさふらふなかに、ひとつのいたはしきことのさふらふなり。そのゆへは念佛まうすについて、信心のおもむきをもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論のたゝかひかたんがために、またくおほせにてなきことをも、おほせとのみまうすこと、あさましくなげき存じさふらふなり。このむねをよく〳〵おもひとき、こゝろえらるべきことにさふらふ。これさらにわたくしのことばにあらずといへども、經釋のゆくちをもしらず、法文の淺深をこゝろえわけたることもさふらはねばさだめておかしきことにてこそさふらはめども、故親鸞聖人のおほせごとさふらひしおもむきを、百分が一、かたはしばかりをもおもひいでまいらせて、かきつけさふらふなり。かなしきかなや、さいはひに念佛しながら、直に報土にむまれずして邊地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なく〳〵筆をそめて、これをしるす。なづけて、歎異鈔といふべし。外見あるべからず。

（第十九節）

右斯聖教者爲二當流大事聖教一也。於二無宿善機一無二左右一不レ可レ許レ之者也。

釋　蓮　如　御判

歎異鈔　終

口傳鈔上

本願寺聖人如信上人に對しまし〳〵て、おり〳〵の御物語の條々。

一、あるときのおほせにのたまはく、黑谷聖人源空淨土眞宗御興行さかりなりしとき、かみ一人よりはじめて、偏執のやから一天にみてり。これによりて、かの立宗の義を破せられんがために、禁中時代不審もし土御門院の御宇敕にして七日の御逆修をはじめをこなはるゝついでに、安居院の法印聖覺を唱導として、聖道門の諸宗のほかに別して淨土宗あるべからざるよし、これをまうしみだらるべきよし敕請あり。しかりといへども、敕喚に應じながら、師範空聖人の本懷さえぎりて覺悟のあひだ、まうしみだらるゝにをよばず、あまさへ聖道のほかに淨土の一宗興じて、凡夫直入の大益あるべきよしを、ついでをもてことにまうしたてられけり。こゝに公廷にして、その沙汰あるよし聖人源空きこしめすについて、もしこのときまふしやぶられなば、淨土の宗義なんぞ立せんや、よりて安居院の坊へおほせつかはされんとす。たれひとたるべきぞやのよし、その仁を內々えらばる。ときに善信御房その仁たるべきよし聖人さしまうさる。同朋のなかにまたもともしかるべきよしまうさしめたまふ。もともしかるべしとて、西意善綽御房をさしそへらる。兩人安居院の坊にいたりて案內せらる。おりふし沐浴と云云。御つかひたれひとぞやとはる。善信の御房入來ありと云云、そのときおほきにおどろきて、このひとの御使たること遲遲なり、おぼろけのことにあらじとて、いそぎ溫室よりいでゝ對面。かみくだんの子細をつぶさに聖人源空のおほせとて演說。法印まふされていはく、このこと年來の御宿念たり、聖覺いかでか疎簡を存せん、たとひ敕定たりといふとも、師範の命をやぶるべからず、よりておほせをかうふらざるさきに、聖道淨土の二門を混亂せず、あまさへ淨土の宗義をまうしたてはんべりき、これしかしながら王命よりも師孝ををもくするがゆへなり、御心やすかるべきよしまふさしめたまふべしと云云。このあひだの一座の委曲つぶさにするにいとまあらず。すなはち上人善信御歸參ありて、公廷一座の唱導として法印重說のむねを聖人源空の御前にて一言もおとしまささず分明にま

た一座宣説しまふさる。そのときさしそへらるゝ善綽の御房に對して、もし紕繆ありやと聖人源空おほせらるゝところに、善綽御房まふされていはく、西意二座の説法聽聞つかふまつりをはりぬ、言語のをよぶところにあらずと云云。三百八十餘人の御門侶のなかに、その上足といひそのの器用といひ、すでに清撰にあたりて使節をつとめましますところに、西意また證明の發言にをよぶ。おそらくば多寶證明の往事にあひおなじきものをや。このこと大師聖人の御ときに隨分の面目たりき。説導も涯分いにしへにはつべからずといへども人師戒師停止すべきよし聖人の御前にして誓言發願をはりき。これによりて檀越をへつらはずその請におもむかずと云云。そのころ七條の源三中務亟が遺孫、次郎入道淨信、土木の大功ををへて一宇の伽藍を造立して、供養のために唱導におもむきましますべきよし、屈請しまふすといへども、上人善信つゐにもて固辭しおほせられて、かみくだんのおもむきをかたりおほせらる。そのとき上人善信權者にましますといへども、濁亂の凡夫に同じて不淨説法のとがをもきこことをしめしましますものなり。(一)

一。光明名號の因緣といふ事。

十方衆生のなかに、淨土教を信受する機あり、信受せざる機あり、いかんとならば、大經のなかにとくがごとく、過去の宿善あつきものは、今生にこの教にあふてまさに信樂す、宿福なきものは、この教にあふといへども、念持せざればまたあはざるがごとし。欲知過去因の文のごとく、今生のありさまにて宿善の有無あきらかにしりぬべし。しかるに宿善開發する機のしるしには、善知識にあふて開悟せらるゝとき一念疑惑を生せざるなり。その疑惑を生せざることは、光明の緣にあふゆへなり。もし光明の緣もよほさずば、報土往生の眞因たる名號の因をうべからず。いふこゝろは、十方世界を照曜する無碍光遍照の明朗なるにてらされて、無明沈沒の煩惑漸々にとらけて涅槃の眞因たる信心の根芽わづかにきざすとき、報土得生の定聚のくらゐに住す。すなはちこのくらゐを光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨ととけり。また光明寺の御釋には、以光明名號攝化十方但使信心求念ともの たまへり。しかれば往生の信心のさだまることはわれらが智分にあらず。光明の緣にもよほしそだてられて名號信知の報土の因をうとしるべしとなり。これを他力といふなり。(二)

一。無碍の光曜によりて無明の闇夜はるゝ事。

本願寺の上人親鸞あるとき門弟にしめしてのたまはく、つねにひとのしるところ

夜あけて日輪はいづや日輪いでゝ夜あくや、兩篇なんだちいかんがしると云云。うちまかせてひとみなおもへらく夜あけてのち日いづとこたへまふす。上人のたまはく、しからざるなりと。日いでゝまさに夜あくるものなり。そのゆへは日輪まさに須彌の半腹を行度するとき、他州のひかりちかづくについて、この南州あきらかになれば、日いでゝ夜はあくといふなり。これ、たとへなり。無碍光の日輪照觸せざるときは、永々昏闇の無明の夜あけず。しかるにいま宿善ときいたりて、不斷難思の日輪貪瞋の半腹に行度するとき、無明やうやくやみはれて信心たちまちにあきらかなり。しかりといへども、貪瞋の雲霧かりにおほふによりて、炎王清淨等の日光あらはれず。これによりて煩惱障眼雖不能見とも釋し、已能雖破無明闇とものたまへり。日輪の他力いたらざるほどは、われと無明を破すといふことあるべからず。無明を破せずばまた出離その期あるべからず。他力をもて無明を破するがゆへに、日いでゝのち夜あくといふなり。これさきの光明名號の義にこゝろおなじといへども、自力他力を分別せられんために、法譬を合しておほせごとありきと云云。（三）

一。善惡二業の事。

上人親鸞おほせにのたまはく、某はまたく善もほしからず、また惡もをそれなし。善のほしからざるゆへは、彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆへに。惡のをそれなきといふは、彌陀の本願をさまたぐる惡なきがゆへに。しかるに世のひとみなおもへらく、善根を具足せずんば、たとひ念佛すといふとも、往生すべからずと。またたとひ念佛すといふとも、惡業深重ならば往生すべからずと。このおもひともにはなはだしかるべからず。もし惡業をこゝろにまかせてとゞめ、善根をおもひのまゝにそなへて、生死を出離し淨土に往生すべくは、あながちに本願を信知せずともなにの不足かあらん。そのことゝいづれもこゝろにまかせざるによりて、惡業をばをそれながらすなはちをこし、善根をばあらませどもうることあたはざる凡夫なり。かゝるあさましき三毒具足の惡機として、それと出離にみちたえたる機を攝取したまはんための五劫思惟の本願なるがゆへに、たゞあふぎて佛智を信受するにしかず。しかるに善機の念佛するをば決定往生とおもひ、惡人の念佛するをば往生不定とうたがふ。本願の規模こゝに失し、自身の惡機たることをしらざるになる。おほよそ凡夫引接の無緣の慈悲をもて、修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ、五乘ひとしくいることは、諸佛いまだをこさゞる超世不思議の願なれ

ば、たとひ讀誦大乘解第一義の善機たりといふとも、をのれが生得の善ばかりをもてその土に往生することかなふべからず。また惡業はもと、もろ〳〵の佛法にすてらるゝところなれば、惡機また惡をつのりとしてその土へのぞむべきにあらず。しかれば機にむまれつきたる善惡のふたつ、報土往生の得ともならず失ともならざる條勿論なり。さればこの善惡の機のうへにたもつところの彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは、凡夫いかでか往生の得分あるべきや。さればこそ惡もおそろしからずともいひ、善もほしからずとはいへ。こゝをもて光明寺の大師、言弘願者如大經說、一切善惡凡夫得生者、莫不皆乘阿彌陀佛、大願業力爲增上緣也とのたまへり。文のこゝろは、弘願といふは大經の說のごとし、一切善惡凡夫のむまるゝことをうるは、みな阿彌陀佛の大願業力にのりて增上緣とせざるはなしとなり。されば宿惡をもきものは、今生に善をこのみ惡をそしる。宿惡をもきものは、今生に惡をこのみ善にうとし。たゞ善惡のふたつをば過去の因にまかせ、往生の大益をば如來の他力にまかせて、かつて機のよきあしきに目をかけて往生の得否をさだむべからずとなり。これによりてあるときのおほせにのたまはく、なんだち念佛するよりなを往生にたやすきみちあり、これをさづくべしと、ひとを千人殺害したらばやすく往生すべし、をの〳〵このをしへにしたがへ、いかんと。ときにある一人まふしていはく、某にをいては、千人まではおもひよらず、一人たりといふとも殺害しつべきこゝちせずと云云。上人かさねてのたまはく、なんぢわがをしへを日比そむかざるうへは、いまをしふるところにをいてさだめてうたがひをなさざる歟。しかるに一人なりとも殺害しつべきこゝちせずといふは、過去にそのたねなきにより てなり。もし過去にそのたねあらば、たとひ殺生罪ををかすべからず、をかさばすなはち往生をとぐべからずといましむといふとも、たねにもよほされてかならず殺罪をつくるべきなり。善惡のふたつ、宿因のはからひとして現果を感するところなり。しかればまたく往生にをいては善もたすけとならず、惡もさはりとならずといふこと、これをもて準知すべし。(四)

一。自力の修善はたくはへがたく、他力の佛智は護念の益をもてたくはへらるゝ事。

たとひ萬行諸善の法則を修したくはふといふとも、進道の資糧となるべからずゆへは、六賊知聞して侵奪するがゆへに、念佛にをいては、すでに行者の善にあらず行者の行にあらずとら釋せらるれば、凡夫自力の善にあらず、またく彌陀の佛智な

るがゆへに、諸佛護念の益によりて六賊これをかすにあたはざるがゆへに、出離の資糧となり報土の正因となるなり。しるべし。(五)

一。弟子同行をあらそひ、本尊聖敎をうばひとることしかるべからざるよしの事。

常陸國新堤の信樂房、聖人親鸞の御前にて、法文の義理ゆへにおほせをもちゐまふさざるによりて、突鼻にあづかりて本國に下向のきざみ、御弟子蓮位房まふされていはく、信樂房の御門弟の儀をはなれて下國のうへは、あづけわたさるゝところの本尊聖敎をめしかへさるべくやさふらふらんと。なかんづくに釋親鸞と外題のしたにあそばされたる聖敎おほし。御門下をはなれたてまつるうへは、さだめて仰崇の儀なからん歟と云々。聖人のおほせにいはく、本尊聖敎をとりかへすこと、はなはたしかるべからざることなり、そのゆへは親鸞は弟子一人ももたず、なにごとををしへて弟子といふべきぞや。みな如來の御弟子なればみなともに同行なり。念佛往生の信心をうることは、釋迦彌陀二尊の御方便として發起すとみえたれば、またく親鸞がさづけたるにあらず。當世たがひに違逆のとき、本尊聖敎をとりかへしつくるところの房號をとりかへし、信心をとりかへすなんどいふこと國中に繁昌と云云。かへすゞしかるべからず。本尊聖敎は衆生利益の方便なれば、親鸞がつぴをすて、他の門室にいるといふとも、わたくしに自專すべからず。如來の敎法は總じて流通物なればなり。しかるに親鸞か名字ののりたるを、法師にくければ袈裟さへの風情にいとひおもふによりて、たとひかの聖敎を山野にすつといふとも、そのところの有情群類、かの聖敎にすくはれて、ことゝくくその益をうべし。しかちば衆生利益の本懐そのとき滿足すべし。凡夫の執するところの財寶のごとくにとりかへすといふ義あるべからざるなり。よくゝこゝろうべしとおほせありき。(六)

一。凡夫往生の事。

おほよそ凡夫の報土にいることをば、諸宗ゆるさざるところなり。しかるに淨土眞宗にをいて、善導家の御こゝろ、安養淨土をば報佛報土とさだめ、いるところの機をばさかりに凡夫と談ず。このこと性相のみゝをおどろかすことなり。さればかの性相に封せられて、ひとのこゝろおほくまよひて、この義勢にをきてうたがひをいだく。そのうたがひのきざすところは、かならずしも彌陀超世の悲願を、さるこ

とあらじとうたがひたてまつるまではなけれども、わが身の分を卑下して、そのことはりをわきまへしりて、聖道門よりは凡夫報土にいるべからざる道理をうかべて、その比量をもていまの眞宗をうたがふまでのひとはまれなれども、聖道の性相世に流布するを、なにとなく耳にふれならひたるゆへ歟、おほくこれにふせがれて眞宗別途の他力をうたがふこと、かつは無明に癡惑せられたるゆへなり。かつは明師にあはざるがいたすところなり。そのゆへは淨土宗のころ〻もと凡夫のためにして、聖人のためにあらずと云云。しかれば貪欲もふかく瞋恚もたけく愚癡もさかりならんにつけても、今度の順次の往生は、佛語に虛妄なければいよ〳〵必定とおもふべし。あやまてわがこゝろの三毒もいたく興盛ならず、善心しきりにをこらば、往生不定のおもひもあるべし。そのゆへは凡夫のための願と佛說分明なり。しかるにわがこゝろ凡夫げもなくば、さてはわれ凡夫にあらねば、この願にもれやせんとおもふべきによりてなり。しかるにわれらがこゝろすでに貪瞋癡の三毒みなおなじく具足す。これがためとてをこさるゝ願なれば、往生その機として必定なるべしとなり。かくこゝろえつれば、こゝろのわろさにつけても機の卑劣なるにつけても、往生せずばあるべからざる道理文證勿論なり。いづかたよりか凡夫の往生もれてむなしからんや。しからばすなはち、五劫の思惟も兆載の修行も、たゞ親鸞一人がためなりとおほせごとありき。わたくしにいはく、これをもてかれを案ずるにこの條祖師聖人の御ことにかぎるべからず。末世のわれらみな凡夫たらんうへは、またもて往生おなじかるべしとしるべし。(七)

一、一切經御校合の事。

西明寺の禪門の父修理亮時氏政務をもはらにせしころ、一切經を寫せられき。これを校合のために智者學生たらん僧を屈請あるべしとて、武藤左衞門入道不知實名ならびにやどやの入道不知實名兩大名におほせつけてたづねあなぐられはるとき、ことの緣ありて聖人をたづねもとめたてまつりき。（もし當陸の國笠間郡稻田郷に御經藏のころ歟）聖人その請に應じまし〳〵て、一切經御校合ありき。その最中、副將軍連々昵近したてまつるに、あるとき盃酌のみぎりにして、種々の珍物をとゝのへて諸大名面々數獻の沙汰にをよぶ。聖人別して勇猛精進の僧の威儀をたゞしくしましますことなければ、たゞ世俗の入道俗人等におなじき御振舞なり。よて魚鳥の肉味等をもきこしめさ

るゝこと御はゝかりなし。ときに鮑を御前に進ず。これをきこしめさるゝことつねのごとし。袈裟を御著用ありながらまいるとき、西明寺の禪門ときに開壽殿とて九歳、さしよりて聖人の御耳に密談せられていはく、あの入道とも面々魚食のときは袈裟をぬぎてこれを食す。善信御房いかなれば袈裟を御著用ありながら食しましますぞや。これ不審と云云。聖人おほせられていはく、あの入道達はつねにこれをもちゐるについて、これを食するときは袈裟をぬぐべきことゝ覺悟のあひだ、ぬぎてこれを食する歟。善信はかくのごときの食物遐なれば、おぼろけていそぎたべんとするにつきて、忘却してこれをぬがずと云云。開壽殿またまふされていはく、この御答御僞言なり、さだめてふかき御所存ある歟、開壽幼稚なればとて御蔑如にこそとてのきぬ。またあるとき、さきのごとくに袈裟を御著服ありながら御魚食あり。また開壽殿さきのごとくにたづねまふさる。聖人また御忘却とこたへまします。そのとき開壽殿、さのみ御廢忘あるべからず、これしかしながら幼少の恣意深義をわきまへしるべからざるによりて、御所存をのべられざるものなり、まげてたゝ實義の述成あるべしと、再三こさかしくのぞみまふされけり。そのとき聖人のがれ

がたくして幼童に對してしめしまし〳〵ていはく、まれに人身をうけて、生命をほろぼし肉味を貪ること、はなはだしかるべからざることなり。されば如來の制誡にも、このことにさかんなり。しかれども末法濁世の今時の衆生、無戒のときなればたもつものもなく破するものもなし。これによりて剃髮染衣のそのすがた、たゝ世俗の群類にこゝろおなじきがゆへにこれらを食す。とても食するほどならば、かの生類をして解脫せしむるやうにこそありたくさふらへ。しかるにわれ名字を釋氏にかるといへども、こゝろ俗塵にそみて、智もなく德もなし。なにゝよりてかかの有情をすくふべきや。これによりて、袈裟はこれ三世の諸佛解脫幢相の靈服なり。これを著用しながらかれを食せば、袈裟の德用をもて濟生利物の願念をやはたすと存じて、これを著しながらかれを食するものなり。冥衆の照覽をあふぎて、人倫の所見をはゝかちざること、かつは無慚無愧のはなはだしきにこたり、しかれども所存かくのごとしと云云。このとき開壽どの、幼少の身として、感氣おもてにあらはれ隨喜もともふかし。一天四海をおさむべき棟梁その器用はおさなきよりやうあるものなりとおほせごとありき。

口傳鈔中

一、あるとき鸞聖人、黒谷の聖人の禪房へ御參ありけるに、修行者一人御ともの下部に案内していはく、京中に八宗兼學の名譽まします智慧第一の聖人の貴房やしらせたまへるといふ。この樣を、御ともの下部御車のうちへまふす、鸞聖人のたまはく、智慧第一の聖人の御房とたづぬるは、もし源空聖人の御こと歟、しからばわれこそ、たゞいまかの御房へ參する身にてはんべれ、いかん。修行者まふしていはく、そのことにさふらふ、源空上人の御ことをたづねまふすなりと。鸞聖人のたまはく、さらば先達すべし、この車にのらるべしと。修行者おほきに辭しまふして、そのをそれあり、かなふべからずと云云。鸞聖人のたまはく、求法のためならばあながちに隔心あるべからず、釋門のむつびなにかくるしかるべき、たゞのらるべしと。再三辭退まふすといへども、御とものものに、修行者かくるところのかご負をかくべしと御下知ありて、御車にひきのせらる。しかうしてかの御坊に御參ありて、空聖人

の御前にて鸞聖人、鎮西のものとまふして修行者一人、求法のためとて御坊をたづねまふしてはんべりつるを、路次よりあひともなひてまいりてさふらふ めさるべきをやと云云。空聖人こなたへ招請あるべしとおほせあり。よりて鸞聖人かの修行者を御引導ありて御前へめさる。そのとき空聖人、はたとかの修行者をにらみまし、すに、修行者また聖人をにらみかへしたてまつる。かくてやゝひさしく、たがひに言說なし。しばらくありて、空聖人おほせられてのたまはく、御房はいづくのひとぞ、またなにの用ありてきたれるぞやと。修行者まふしていはく、われはこれ鎮西のものなり、求法のために華洛にのぼる、よて推參つかまつるものなりと。そのとき聖人、求法とはいづれの法をもとむるぞやと。修行者まふしていはく、念佛の法をもとむと。聖人のたまはく、念佛は唐土の念佛か、日本の念佛かと。修行者しばらく停滯す。しかれどもきと案じて、唐土の念佛をもとむるなりと云云。聖人のたまはく、さては善導和尙の御弟子にこそあるなれと。そのとき修行者、ふどころよりつま硯をとりいだして、二字をかきてさゝぐ。鎮西の聖光房これなり。この聖光ひじり、鎮西にしておもへらく、みやこに世もて智慧第一と稱する聖人おは

ずなり。なにごとかははんべるべき。われすみやかに上洛してかの聖人と問答すべし。そのときもし智慧すぐれてわれにかさまば、われまさに弟子となるべし。また問答にかたば、かれを弟子とすべしと。しかるにこの慢心を、空聖人權者として御覽せられければ、いまのごとくに御問答ありけるにや。かのひじりわが弟子とすべきこと、橋をたてゝもをよびがたかりけりと、慢幢たちまちにくだけければ、師資の禮をなして、たちどころに二字をさゝげけり。兩三年ののち、あるときかご負かきおひて、聖光房、聖人の御前へまいりて、本國懸慕のこゝろざしあるにより て、鎮西下向つかまつるべし、いとまたまはるべしとまふす。すなはち御前をまかりたちて出門す。聖人のたまはく、あたら修行者がもとどりをきらでゆくはとよと。その御こゝろはるかにみゝにいりけるにや、たちかへりてまふしていはく、聖光は出家得度してとしひさし。しかるにもとゞりをきらぬよしおほせをかうふる、もとも不審。このおほせ耳にとまるによりて、みちをゆくにあたはず。ことの次第をうけたまはりわきまへんがためにかへりまいれりと云云。そのとき聖人のたまはく、法師にはみつのもとどりあり。いはゆる勝他、利養、名聞これなり。この三箇年のあひだ源空がのぶるところの法門をしるしあつめて隨身す。本國にくだりて人をかろんじしたがへんとす。これ勝他にあらずや。それにつけてよき學生といはれんとおもふ。これ名聞をねがふところなり。これによりて檀越をのぞむこと、所詮利養のためなり。このみつのもとゞりをそりすてずば、法師とはいひがたし。よてさまふしつるなりと云云。そのとき聖光房、改悔のいろをあらはして、負のそこよりおさむるところの抄物どもをとりいでゝ、みなやきすてゝ、またいとまをまふしていでぬ。しかれども、その餘殘ありけるにや、つゐにおほせをさしをきて、口傳にそむきたる諸行往生の自義を骨張して、自障障他すること、祖師の遺訓をわすれ、諸天の冥慮をはゞからざるにやとおぼゆ。かなしむべし、をそるべし、しかればかの聖光房は、最初に懸聖人の御引導によりて、黑谷の門下にのぞめるひとなり。末學これをしるべし。(九)

一。十八の願につきたる御釋の事。

彼佛今現在成佛等。この御釋に、世流布の本には在世とあり。しかるに黑谷本願寺兩師ともに、この世の字を略してひかれたり。わたくしにそのゆへを案ずるに、

略せらるゝ條もともそのゆへある歟。まづ大乘同性經にいはく、淨土中成佛、悉是報身、穢土中成佛、悉是化身といへり。この文を依憑として、大師報身報土の義を成せらるゝに、この世の字ををきてはすこぶる義理淺近なるべしとおぼしめさるゝ歟。その故は淨土中成佛の彌陀如來につきて、いま世にましますとこの文を訓せば、いまはすこし義理いはれざる歟。極樂世界とも釋せらるゝうへは、世の字いかでか報身報土の義にのくべきとおぼゆる篇もあれども、さればそれも、自宗にをいて淺近のかたを釋せらるゝときの一往の義なり。おほよそ諸宗にをいて、おほくはこの字を淺近のときもちゐつけたり。まづ倶舍論の性相品に、安立器世間風輪最居下とら判せり。器世間を建立するときこの字をもちゐる條分明なり。世親菩薩の所造もともゆへあるべきをや、勿論なり。しかるにわが眞宗にいたりては、善導和尚の御こゝろによるに、すでに報身報土の廢立をもて規模とす。しかれば觀彼世界相勝過三界道の論文をもておもふに、三界の道に勝過せる報土にして正覺を成ずる彌陀如來のことをいふとき、世間淺近の事にもちゐならひたる世の字をもて、いかでか義を成せらるべきをや。この道理によりて、いまの一字を略せらるゝかとみえたり。されば彼佛今現在成佛とつゞけてこれを訓ずるに、かの佛いまは現在して成佛したまへりと訓ずればはるかにきゝよきなり。義理といひ文點といひ、この一字もともあまれる歟。この道理をもて兩祖の御相傳を推驗して、八宗兼學の丁然聖人に、ことに三論宗いまの料簡を談話せしに、淨土眞宗にをいてこの一義相傳なしといへども、この料簡もとも同ずべしと云々。（一〇）

一、助業をなをかたはらにしまします事。

鸞聖人、東國に御經廻のとき、御風氣として三日三夜ひきかつぎて水漿不通しましますことありき。つねのときのごとく御腰膝をうたせらるゝこともなし。御煎物などいふこともなし。御看病のひとをちかくよせらるゝこともなし。三箇日とまふすとき、噫いまはさてあらんとおほせごとありて、御起居御平復もとのごとし。そのとき惠信の御房男女六人君達の御母樣たづねまふされていはく、御風氣として兩三日御寢のところに、いまはさてあらんとおほせごとあることなにごとぞやと。聖人しめしましましてのたまはく、われこの三箇年のあひだ、淨土の三部經をよむことをこたらず、おなじくは千部よまばやとおもひてこれをはじむるところに、またおもふやう、自

信敬人信難中轉更難とみえたれば、みづからも信じ、ひとををしへても信せしむるほかは、なにのつとめかあらんに、この三部經の部數をつむことわれながらこゝろえられずとおもひなりて、このことをよく〳〵案じさだめん料に、そのあひだはひきかつぎてふしぬ。つねのやまひにあらざるほどに、いまはさてあらんといひつるなりとおほせごとありき。わたくしにいはく、つら〳〵このことを案ずるに、ひとの夢想のつげのごとく、觀音の垂迹として、一向專念の一義を御弘通あること揭焉なり。（一一）

一。聖人本地觀音の事。

下野國さぬきといふところにて、惠信の御房の御夢想にいはく、堂供養するとおぼしきところあり。試樂ゆ〳〵しく嚴重にとりをこなへるみぎりなり。こゝに虛空に神社の鳥居のやうなるすがたにて木をよこたへたり。それに繪像の本尊二鋪かゝりたり。一鋪は形體ましまさず、たゞ金色の光明のみなり。いま一鋪はたゞしくその尊形あらはれまします。その形體ましまさざる本尊を、ひとありて、またひとに、あれはなに佛にてましますぞやと問。ひとこたへていはく、これこそ大勢至菩薩にてましませ、すなはち源空聖人の御ことなりと云云。また問ていはく、いま一鋪の尊形あらはれたまうをあれはまたなに佛ぞやと。ひとこたへていはく、あれは大悲觀世音菩薩にてましますなり。あれこそ善信の御房にてわたらせたまへとまうすとおぼえてゆめさめをはんぬと云云。このことを聖人にかたりまふさるゝところに、そのことなり、大勢至菩薩は智慧をつかさどりましますなり、すなはち智慧は光明とあらはるゝによりて、ひかりばかりにて、その形體はましまさざるなり。先師源空聖人、勢至菩薩の化身にましましますといふこと、世もてひとのくちにありとおほせごとありき。惣聖人の御本地の樣は、御ぬしにまふさんことわが身としては、はゞかりあれば、まふしいだすにをよばず。かの夢想ののちは、心中に渴仰のおもひふかくして、年月をおくるばかりなり。すでに御歸京ありて、御入滅のよしうけたまはるについてわがちゝはかゝる權者にまし〳〵けるとしりたてまつられんがためにしるしまふすなりとて、越後國國府よりとゞめをきまうさるゝ惠信の御房の御文、弘長三年春ころ、御むすめ覺信の御房へ進ぜらる。わたくしにいはく、源空聖人、勢至菩薩の化現として、本師彌陀の教文を和國に弘興まします。

親鸞聖人、觀世音菩薩の垂迹として、ともにおなじく無碍光如來の智炬を、本朝にかゞやかさんために、師弟となりて口決相承しましますことあきらかなり。あふぐべし、たうとむべし。（一二）

一。蓮位房聖人當麻の御門弟眞宗稽古の學者俗姓源三位粮政卿の末孫夢想の記。

建長八歲丙辰二月九日の夜寅時、釋蓮位、夢に聖德太子の勅命をかうふる。皇太子の尊容を示現して、釋の親鸞法師にむかはしめましゝて、文を頌して親鸞聖人を敬禮しまします。その告命の文にのたまはく、敬禮大慈阿彌陀佛、爲妙敎流通來生者、五濁惡時惡世界中、決定即得無上覺也といへり。この文のこゝろは、大慈阿彌陀佛を敬禮したてまつるなり、妙敎流通のために來生せるものなり。五濁惡時惡世界のなかにして、決定してすなはち無上覺をえしめたるなりといへり。蓮位こゝに皇太子を恭敬し尊重したてまつるとおぼへてゆめさめて、すなはちこの文をかきをはりぬ。わたくしにいはく、この夢想の記をひらくに、祖師聖人あるひは觀音の垂迹とあらはれ、あるひは本師彌陀の來現としめしましますことあきらかなり。彌陀觀音一體異名、ともに相違あるべからず。しかればかの御相承、その

遞義を口決の末流、他にことなるべき條、傍若無人といひつべしとしるべし。（一三）

一。體失不體失の往生の事。

聖人親鸞のたまはく、先師聖人源空の御とき、はかりなき法門諍論のことありき。善信は念佛往生の機は體失せずして往生をとぐといふ。小坂の善惠房證空は體失してこそ往生はとぐれと云々。この相論なり。こゝに同朋のなかに、勝劣を分別せんがために、あまた大師聖人源空の御前に參じてまふされていはく、善信御房と善惠御房と、法門諍論のことはんべりとて、かみくだんのおもむきを、一一にのべまふさるゝところに、大師聖人源空のおほせにのたまはく、善信房の體失せずして往生すとたてらるゝ條は、やがてさぞと御證判あり。善惠房の體失してこそ往生すれとたてらるゝもまた、やがてさぞとおほせあり。これによりて、兩方の是非わきまへがたきおひだ、そのむねを衆中よりかさねてたづねまふすところに、おほせにのたまはく、善惠房の體失して往生するよしのぶるは、諸行往生の機なればなり。善信房の體失せずして往生するよしまふさるゝは念佛往生の機なればなり。如來敎法元無二なれども、正爲衆生機不同なれば、わが根機にまかせて領解する條、宿善の

厚薄によるなり。念佛往生は佛の本願なり。諸行往生は本願にあらず。念佛往生には臨終の善惡を沙汰せず、至心信樂の歸命の一心他力よりさだまるとき、即得往生住不退轉の道理を、善知識にあふて聞持する平生のきざみに、治定するあひだ、この穢體亡失せずといへども業事成辨するは、體失せずして往生すといはるゝ歟。本願の文あきらかなり。かれをみるべし。つぎに諸行往生の機は臨終を期し來迎をまちゐずしては、胎生邊地までもむまるべからず。このゆへにこの穢體亡失するときならではその期するところなきによりて、そのむねをのぶる歟。第十九の願にみえたり。勝劣の一段にをいては、念佛往生は本願なるについて、あまねく十方衆生にわたる。諸行往生は非本願なるによりて、定散の機にかぎる。本願念佛の機の不體失往生と、非本願諸行往生の機の體失往生と、殿最懸隔にあらずや。いづれも、文釋ことばにさきだちて歴然なり。（一四）

口傳鈔下

一。眞宗所立の報身如來諸宗通途の三身を開出する事。

彌陀如來を報身如來とさだむること、自他宗をいはず古來の義勢とふりんたり。されば荆溪は、諸敎所讃多在彌陀とものべ、檀那院の覺運和尙はまた、久遠實成彌陀佛永異諸經之所說と釋せらる。しかのみならず、わが朝の先哲はしばらくさしをく、宗師異朝の善導大師の御釋にのたまはく、上從海德初最如來、乃至今時釋迦諸佛、皆乘弘誓悲智雙行とら釋せらる。しからば海德佛より本師釋尊にいたるまで、番々出世の諸佛、彌陀の弘誓に乘じて自利々他したまへるむね顯然なり。覺運和尙の釋義、釋尊も久遠正覺の彌陀ぞとあらはさるゝうへは、いまの和尙の御釋にえあはすれば、最初海德以來の佛々も、みな久遠正覺の彌陀の化身たる條道理文證必然なり。一字一言加減すべからず、ひとつ經法のごとくすべしとのべまします。光明寺のいまの御釋は、もはら佛經に準するうへは、自宗の正依經たるべし。傍依の經にまたあまたの證文あり。楞伽經にのたまはく、十方諸刹土、衆生菩薩中、所有法報身、化身及變化、皆從無量壽、極樂界中出文ととけり。また般舟經にのたまはく、三世諸佛念彌陀三昧成等正覺ともとけり。諸佛自利利他の願行、彌陀をもてあるじと

して、分身遺化の利生方便をめぐらすこといちじるし。これによりて久遠實成の彌陀をもて報身如來の本體とさだめて、これより應迹をたゝ諸佛通總の法報應等の三身は、みな彌陀の化用たりといふことをしるべきものなり。しかれば報身といふ名言は、久遠實成の彌陀に屬して、常住法身の體たるべし。通總の三身は、かれよりひらきいだすところの淺近の機におもむくところの作用なり。されば聖道難行にたへざる機を、如來出世の本意にあらざれども、易行易修なるところをとりどころとして、いまの淨土教の念佛三昧をは、衆機にわたしてすゝむるぞとみなひとおもへる歟。いまの黑谷の大勢至菩薩の化現の聖人より、代々血脈相承の正義にをいてはしかんばあらず。海德佛よりこのかた、釋尊までの說敎、出世の本意、久遠實成の彌陀のたちとより、法藏正覺の淨土敎のをこるをはじめとして、衆生濟度の方軌とさだめて、この淨土の機法とゝのほらざるほど、しばらく在世の權機に對して、方便の敎として五時の敎をときたまへりとしるべし。たとへば、月まつほどの手ずさみの風情なり。いはゆる三經の說時をいふに、大無量壽經は法の眞實なるところをときあらはして、對機はみな權機なり。觀無量壽經は機の眞實なるところをあらはせり、これすなはち實機なり。いはゆる五障の女人韋提をもて對機としてとほく末世の女人惡人にひとしむるなり。小阿彌陀經はさきの機法の眞實をあらはす二經を合說して不可以少善根福德因緣得生彼國とゝとける、無上大利の名願を、一日七日の執持名號にむすびとゝめて、こゝを證誠する諸佛の實語を顯說せり。これによりて世尊說法時將了とら釋光明しましまし、一代の說敎むしろをまきし肝要、いまの彌陀の名願をもて付屬流通の本意とする條、文にありてみつべし。いまの三經をもて、末世造惡の凡機にときかせ、聖道の諸敎をもては、その序分とする、光明寺の處々の御釋に歷然たり。こゝをもて諸佛出世の本意とし、衆生得脫の本源とする條あきらかなり。いかにいはんや、諸宗出世の本懷とゆるす法華にをいて、いまの淨土敎は同味の敎なり。法華の說時八箇年中に、王宮に五逆發現のあひだ、このときにあたりて、靈鷲山の會座を沒して王宮に降臨して他力をとかれしゆへなり。これらみな海德以來、乃至釋迦一代の出世の元意、彌陀の一敎をもて本とせらるゝ大都なり。（一五）

一、信のうへの稱名の事。

聖人親鸞の御弟子に、高田の覺信房太郎入道といふひとありき、重病をうけて、御坊中にして獲麟にのぞむとき、聖人親鸞入御ありて、危急の體を御覺せらるゝところに、呼吸のいきあらくして、すでにたへなんとするに、稱名をこたらずひまなし、そのとき聖人たづねおほせられてのたまはく、そのくるしげさに、念佛强盛の條、まづ神妙たり。たゞし所存不審、いかんと。覺信房こたへまふされていはく、まろこびすでにちかづけり、存ぜんこと一瞬にせまる、刹那のあひだたりといふとも、いきのかよはんほどは、往生の大益をえたる佛恩を報謝せずんばあるべからずと存ずるについて、かくのごとく報謝のために稱名つかまつるものなりと云云。このとき聖人親鸞年來常隨給仕のあひだの提撕、そのしるしありけりと御感のあまり、隨喜の御落涙千行萬行なり。しかれば、わたくしにこれをもてこれを案ずるに、眞宗の肝要安心の要須、これにあるもの歟。自力の稱名をはげんで、臨終のときはじめて蓮臺にあなうらをむすばんと期するともがら、前世の業因しりがたければ、いかなる死の緣かあらん。火にやけ、みづにおぼれ、刀劒にあたり、乃至寢死までも、みなこれ過去の宿因にあらずといふことなし。もしかくのごとくの死の緣身にそなへたらば、さらにのがるゝとあるべからず。もし怨敵のために害せられば、その一刹那に凡夫としておもふところ、怨結のほかなんぞ他念あらん。また寢死にをいては、本心いきのたゆるきはをしらざるうへは、臨終を期する先途すでにむなしくなりぬべし。いかんしてか念佛せん。またさきの殺害の機、怨念のほか他あるべからず。さるうへは、念佛するにいとまあるべからず。終焉を期する前途またこれもむなし。假令かくのごときの死の緣にあはん機、日ごろの所存に違せば往生すべからずとみなおもへり。たとひ本願の正機たりといふとも、これらの失難治不可得なり。いはんやもとより、自力の稱名は臨終の所期、おもひのごとくならん定、邊地の往生なり。いかにいはんや過去の業緣のがれがたきによりて、これらの障難にあはん機、涯分の所存も達せんことかたきがなかにかたし。そのうへまた、懈慢邊地の往生だにもかなうべからず。これみな本願にそむくがゆへなり。こゝをもて御釋淨土文類聚鈔にのたまはく、憶念彌陀佛本願、自然即時入必定、唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩とみえたり。たゞよく如來のみなを稱して、大悲弘誓の恩をむくひたてまつるべしと。平生に善知識のをしへをうけて、信心開發するきざみ、正定

聚のくらゐに住すとたのみなん機は、ふたゝひ臨終の時分に往益をまつべきにあらず。そののちの稱名は、佛恩報謝の他力催促の大行たるべき條、文にありて顯然なり。これによりてかの御弟子最後のきざみ御相承の眼目相違なきについて、御感涙をながさるゝものなり。しるべし。（一六）

一。凡夫として毎事勇猛のふるまひみな虛假たる事。

愛別離苦にあふて、父母妻子の別離をかなしむとき、佛法をたもち念佛する機、いふ甲斐なくなげきかなしむことしかるべからずとて、かれをはぢしめいさむること、多分先達めきたるともがらみなかくのごとし。この條、聖道の諸宗を行學する機のおもひならはしにて、淨土眞宗の機敎をしらざるものなり。まづ凡夫はことにをいてつたなくをろかなり。その奸詐なる性の實なるをうづみて、賢善なるよしをもてなすは、みな不實虛假なり。たとひ未來の生處を、彌陀の報土とおもひさだめ、ともに淨土の再會をうたがひなしと期すとも、おくれさきだつ一旦のかなしみ、まどへる凡夫としてなんぞこれなからん。なかんづく曠劫流轉の世々生々の芳契、今生をもて輪轉の結句とし、愛執愛着のかりのやど、この人界の火宅出離の奮里たるべきあひだ、依正二報ともにいかでかなごりおしからざらん。これをおもはずんば、凡衆の攝にあらざるべし。けなげならんこそ、あやまて、自力聖道の機たる歟、いまの淨土他力の機にあらざる歟ともうたがひつべけれ。をろかにつたなげにして、なげきかなしまんこと、他力往生の機に相應たるべし。うちまかせて凡夫のありさまにかはりめあるべからず。往生の一大事をば、如來にまかせたてまつり、今生の身のふるまひ、こゝろのむけやう、くちにいふこと、貪瞋癡の三毒を根として、殺生等の十惡穢身のあらんほどは、たちがたく伏しがたきによりて、これをはなることあるべからざれば、なか〳〵をろかにつたなげなる煩惱成就の凡夫にて、ただありにかざるところなきすがたにてはんべらんこそ、淨土眞宗の本願の正機たるべけれと、まさしくおほせありき。さればつねのひとは、妻子眷屬の愛執ふかきをば、臨終のきはには、ちかづけじみせじとひきさくるならひなり。それといふは、著相にひかれて惡道に墮せしめざらんがためなり。この條、自力聖道のつねのこゝろなり。他力の眞宗にはこの義あるべからず。そのゆへはいかに境界を絶離すといふとも、たもつところの他力の佛法なくば、なにをもてか生死を出離せん。たとひ

妄愛の迷心深重なりといふとも、もとよりかかる機をむねと攝持せんといでたちて、これがためにまちうけられたる本願なるによりて、至極大罪の五逆謗法等の無間の業因を、をもしとしましまさいれば、まして愛別離苦にたへざる悲歎にさへらるべからず。淨土往生の信心成就したらんにつけても、このだびが輪廻生死のはてなれば、なげきもかなしみももともふかかるべきについて、あとまくらにならびゐて、悲歎嗚咽し、ひだりみぎに群集して、戀慕涕泣すとも、さらにそれによるべからず。さなからんこそ、凡夫げもなくて、殆ど他力往生の機には不相應なるかやとも、きらはれつべけれ。さればみだからん境界をもはばかるべからず、なげきかなしまんをもいさむべからずと云云。（一七）

一。別離等の苦にあふて、悲歎せんやからをば、佛法のくすりをすすめて、そのおもひを教誘すべき事。

人間の八苦のなかに、さきにいふところの愛別離苦、これもとも切なり。まづ生死界のすみはつべからざることはりをのべて、つぎに安養界の常住なるありさまをときて、うれへなげくばかりにてうれへなげかぬ淨土をねがはずんば、未來もまたかかる悲歎にあふべし、しかし唯聞愁歎聲の六道をわかれて、入彼涅槃城の彌陀の淨土にまうでんにはと、こしらへおもむけば、闇冥の悲歎やうやくにはれて、攝取の光益になどか歸せざらん。つねにかゝるやからには、かなしみにかなしみをそふるやうにはゆめ〳〵とふらふべからず。もししからばとふらひたるにはあらで、いよ〳〵わびしめたるにてあるべし。酒はこれ忘憂の名あり、これをすゝめてわらふほどになぐさめてさるべし。さてこそとふらひたるにてあれと、おほせありきしるべし。（一八）

一。如來の本願は、もと凡夫のためにして、聖人のためにあらざる事。

本願寺の聖人、黒谷の先德より御相承として如信上人おほせられていはく、世のひとつねにおもへらく、惡人なをもて往生す、いはんや善人をやと。このこと、とをくは彌陀の本願にそむき、ちかくは釋尊出世の金言に違せり。このゆへは五劫思惟の劬勞、六度萬行の堪忍、しかしながら凡夫出要のためなり。またく聖人のためにあらず。しかれば凡夫、本願に乘じて、報土に往生すべき正機なり。凡夫もし往生かたかるべくば、願虛說なるべし、力徒然なるべし。しかるに力願あひ加して、十方衆

生のために、大饒益を成ず。これによりて正覺をとなへて、いまに十劫なり。これを證する恒沙の諸佛の證誠、あに無虛妄の說にあらずや。しかれば御釋にも、一切善惡凡夫得生者とらのたまへり。これも惡凡夫を本として、善凡夫をかたはらにかねたり。かるがゆへに傍機たる善凡夫なを往生せば、もはら正機たる惡凡夫、いかでか往生せざらん。しかれば善人なをもて往生す、いかにいはんや惡人をやといふべしと。おほせごとありき。(一九)

一、つみは五逆謗法むまるとしりて、しかも小罪もつくるべからずといふ事。

おなじき聖人のおほせとて、先師信上人のおほせにいはく、世のひとつねにおもへらく、小罪なりともつみをおそれおもひて、とゞめばやとおもはゞ、こゝろにまかせてとゞめられ、善根は修し行せんとおもはゞ、こゝろに大益をもえ、出離の方法ともなりぬべしと。この條、眞宗の肝要にそむき、先哲の口授に違せり。まづ逆罪等をつくること、またく諸宗のおきて佛法の本意にあらず。しかれども惡業の凡夫過去の業因にひかれてこれらの重罪をかす。これとゞめがたく伏しがたし。また小罪なりともをかすべからずといへば、凡夫こゝろにまかせてつみをばとゞめえつべしときこゆ。しかれどももとより罪體の凡夫、大小を論せず、三業みなつみにあらずといふことなし。しかるに小罪もをかすべからずといへば、あやまてもをかさば、往生すべからざるなりと落居する歟。この條もとも思擇すべし。これもし抑止門のこゝろ歟。抑止は釋尊の方便なり。眞宗の落居は彌陀の本願にきはまる。しかれば小罪も大罪も、つみの沙汰をしたくばとゞめてこそその詮はあれ。とゞめえつべくもなき凡慮をもちながら、かくのごとくいへば、彌陀の本願に歸託する機いかでかあらん。謗法罪はまた佛法を信ずるこゝろのなきよりをこるものなれば、もとよりそのうつはものにあらず。もし改悔せばむまるべきものなり。しかれば謗法闡提廻心皆往と釋せらるゝ、このゆへなり。(二〇)

一、一念にてたりぬとしりて、多念をはげむべしといふ事。

このこと多念も一念も、ともに本願の文なり。いはゆる上盡一形下至一念とら釋せらるゝ、これその文なり。しかれども下至一念は、本願をたもつ往生決定の時刻なり。上盡一形は往生即得のうへの佛恩報謝のつとめなり。そのこゝろ經釋顯然なるを、一念も多念も、ともに往生のための正因たるやうにこゝろえみだす條、

すこぶる經釋に違せるもの歟。さればいくたびも先達よりうけたまはりつたへしがごとくに、他力の信をば、一念に即得往生ととりさだめて、そのときいのちをはらざらん機は、いのちのあらんほどは念佛すべし。これすなはち上盡一形の釋にかなへり。しかるに世のひとつねにおもへらく、上盡一形の多念も宗の本意とおもひて、それにかなはざらん機のすてがてらの一念とこゝろうる歟。これすでに彌陀の本願に違し釋尊の言說にそむけり。そのゆへは如來の大悲短命の根機を本としたまへり。もし多念をもて本願とせば、いのち一刹那につゞまる無常迅速の機、いかでか本願に乘ずべきや。されば眞宗の肝要、一念往生をもて淵源とす。そのゆへは願成就の文には、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、願生彼國、即得往生、住不退轉ととき、おなじき經の流通には、其有得聞、彼佛名號、歡喜踊躍、乃至一念、當知此人、爲得大利、即是具足、無上功德ともゝ彌勒に付屬したまへり。しかのみならず光明寺の御釋には、爾時聞一念皆當得生彼とらみえたり。これらの文證みな無常の根機を本とするゆへに、一念をもて往生治定の時刻とさだめて、いのちのぶれば自然と多念にをよぶ道理をあかせり。されば平生のとき一念往生治定のうへの佛恩報謝の多念の稱名とならふところ文證道理顯然なり。もし多念をもて本願とたまはゞ、多念のきはまりいづれのときとさだむべきぞや。いのちをはるときなべくんば、凡夫に死の緣まち〳〵なり。火にやけても死し、水にながれても死し、乃至刀劍にあたりても死し、ねぶりのうちにも死せん。これみな先業の所感、さらにのがるべからず。しかるにもしかゝる業ありてをはらん機、多念のをはりぞと期するところたぢろかずして、そのときかさねて十念を成じ、來迎引接にあづからんこと、機としてたとへかねてあらますといふとも、願としてかならず迎接あらんこと、おほきに不定なり。されば第十九の願文にも現其人前者のうへに、假令不與とらをかれたり。假令の二字をば、たとひとよむべきなり。たとひといふは、あらましなり。非本願たる諸行を修して往生を悕求する行人をも、佛の大慈大悲御覽じはなたずして、修諸功德のなかの稱名をよんどころとして現しつべくばそのひとのまへに現せんとなり。不定のあひだ假令の二字をかる。もしさもありぬべくばといへるこゝろなり。まづ不定の失のなかに、大段自力のくはだて、本願にそむき、佛智に違すべし。自力のくはだてといふは、われとはからふところをきらふなり。つぎに

はまた、さきにいふところのあまたの業因身にそなへんことかたかるべからず。他力の佛智をこそ、諸邪業繫無能礙者とみえたれば、さまたぐるものもなけれ。われとはからふ往生をば、凡夫自力の迷心なれば、過去の業因身にそなへたらば、あに自力の往生を障碍せざらんや、されば多念の功をもて、臨終を期し來迎をたのむ自力往生のくはだてには、加樣の不可の難どもおほきなり。されば紀典のことばにも、千里は足のしたよりおこり、高山は微塵にはじまるといへり。一念は多念のはじめたり。多念は一念のつもりたり。ともにもてあひはなれずといへども、おもてとしうらとなるところを、ひとみなまぎらかすもの歟。いまのこゝろは、一念無上の佛智をもて、凡夫往生の極促とし、一形憶念の名願をもて、佛恩報盡の經營とすべしと、つたふるものなり。（二）

右此口傳鈔三帖者當流之肝要秘藏書也雖然河内國澁河郡久寶寺法圓依所望予初一丁之分染筆訖外見旁可有斟酌者也而已

時也文正貳歳二月十六日

口傳鈔終

釋蓮如在御判

執持鈔

一・本願寺聖人仰云、

來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆへに、臨終まつこと、來迎たのむこととは、諸行往生のひとにいふべし。眞實信心の行心は、攝取不捨のゆへに、正定聚に住す。正定聚に住するがゆへにかならず滅度にいたる。かるがゆへに、臨終まつこととなし來迎たのむことなし。これすなはち第十八の願のこゝろなり。臨終をまち來迎をたのむことは、諸行往生をちかひましますの第十九の願のこゝろなり。（一）

一・又のたまはく、

是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。往生淨土の爲には、たゞ信心をさきとす。其ほかをばかへりみざるなり。往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩を初として、佛智の不思議をは

からふべきにあらず。まして凡夫の淺智をや。かへすゞ〳〵如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。さればわれとして淨土へまいるべしとも、又地獄へゆくべしともさだむべからず。故聖人黒谷源空聖人の御ことなりのおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとへ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり。このたびもし善知識にあひたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし。しかるにいま聖人の御化導にあづかりて彌陀の本願をきゝ攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期することさらにわたくしのちからにあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるを、いつはりて往生淨土の業因ぞと、聖人さづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつといふともさらにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかばひとりゆくべからず、師とともにおつべし。さればたゞ地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなりと、これ自力をすてゝ他力に歸するすがたなり。（二）

一、又のたまはく、

光明寺の和尚善導の御ことの、大無量壽經の第十八の念佛往生の願のこゝろを、釋したまふに、善惡凡夫得生者、莫不皆乘阿彌陀佛、大願業力爲增上緣といへり。このこゝろは善人なればとて、をのれがなすところの善をもて、かの阿彌陀佛の報土へむまるゝことかなふべからずとなり。惡人また申すにやおよぶ。己が惡業のちから、三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや。しかれば善業も要にたゝず、惡業もまたさまたげとならず。善人の往生するも、彌陀如來の別願超世の大慈大悲にあらずばかなひがたし。惡人の往生またかけてもおもひよるべき報佛報土にあらざれども、佛智の不思議なる奇特をあらはさんがためなれば、五劫があひだこれを思惟し、永劫があひだこれを行して、かゝるあさましきものが、六趣四生よりほかは、すみかもなく、うかむべき期なきがために、とりわきむねとおこされたれば、

惡業に卑下すべからずとすゝめたまふむねなり。さればをのれをわすれて、あふぎて佛智に歸するまことなくんば、をのれがもつところの惡業なんぞ淨土の生因たらんや。すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかされ、三途八難にこそしづむべけれ。なにの要にかたゝん。しかれば善も極樂にむまるゝたねにならざれば、往生のためにはその要なし、惡もまたさきの如し。しかればたゞ機生得の善惡なり。かの土のものそみ、他力に歸せずばおもひたへたり。これによりて善惡凡夫のむまるゝは大願業力ぞと釋したまふなり。增上緣とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるにまされるものなしとなり。(三)

一、又のたまはく、

光明名號の因緣といふことあり。彌陀如來四十八願の中に、第十二の願は我ひかりきはなからんとちかひたまへり。これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり。かの願すでに成就して、あまねく無碍のひかりをもて、十方微塵世界をてらしたまひて、衆生の煩惱惡業を長時にてらしまします。さればこのひかりの緣にあふ衆生やうやく無明の昏闇うすくなりて宿善のたねきざす時、まさしく報土にむまるべき第十八の念佛往生の願因の名號をきくなり。しかれば名號執持することさらに自力にあらず。ひとへに光明にもよほさるゝによりてなり。これによりて光明の緣にきざしれて名號の因をうと云なり。かるがゆへに宗師(善導大師の御ことなり)以光明名號攝化十方但使信心求念とのたまへり。但使信心求念といふは、光明と名號と父母のごとくにて、子をそだてはごくむべしといへども、子となりていでくべきたねなきには、ちゝはゝとなづくべきものなし、子のあるとき、それがためにちゝといひ、はゝといふ號あり。それがごとくに光明をはゝにたとへ、名號をちゝにたとへて光明のはゝ名號のちゝといふことも、報土にまさしくむまるべき信心のたねなくばあるべからず。しかれば、信心をおこして往生を願求するとき、名號もとなへられ、光明もこれを攝取するなり。されば名號につきて信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取不捨のちかひ成ずべからず。彌陀如來の攝取不捨の御ちかひなくば、また行者の往生淨土のねがひなにゝよりてか成せん。されば本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願といふ、これこのいはれなり。本願寺の聖人の御釋、敎行信證にのたまはく、德號の慈父ましまさずば信生の因かけなん、光明の悲母ましまさ

ずば所生の縁そむきなん、光明名號の父母これすなはち外緣とす、眞實信の業識これすなはち內因とす、內外因緣和合して報土の眞身を得證すとみえたり。これをたとふるに、日輪須彌の半にめぐりて他州をてらすとき、このさかひ闇冥たり。他州よりこの南州にちかづくとき夜すでにあくるがごとし。しかれば日輪のいづるによりて、夜はあくるものなり。世のひとつねにおもへらく、夜のあけて日輪いづると、今いふところはしからざるなり。彌陀佛日の照鯛によりて無明長夜のやみすでにはれて、安養往生の業因たる名號の寶珠をばうるなりとしるべし。(四)

一。私にいはく、

根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり。行業をろそかなりとてうたがふべからず、經に乃至一念の文あり。佛語に虛妄なし、本願あにあやまりあらんや。名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業まさしくさだまるゆへなり。もし彌陀の名願力を稱念すとも往生なを不定ならば正定業とはなづくべからず。我すでに本願の名號を持念す、往生の業すでに成辨するとをよろこぶべし。かるがゆへに臨終にふたゝび名號をとなへずとも往生をとぐべきこと勿論なり。一切衆生のありさま過去の業因まち〳〵なり。また死の緣無量なり。やまひにをかされて死するものもあり。つるぎにあたりて死るものもあり。水にをぼれて死するものもあり。火に燒て死するものもあり。酒狂して死するたぐひあり。これみな先世の業因なり。さらにのがるべきにあらず。かくのごときの死期にいたりて一旦の妄心をおこさんほかは、いかでか凡夫のならひ、名號稱念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束もしたがはゞ往生のぞみむなしかるべし。しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるものなり。平生の時不定のおもひに住せばかなふべからず。平生のとき善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆のをはり臨終とおもふべし。そもゝ南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなれば、またこれ發願なり。このこゝろあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせば、また廻向の義なり。この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行果地の萬德ことゝく名號のなかに攝在して十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛則是其行と釋したまへり。また殺生罪をつくるとき、地獄の

定業をむすぶも、臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれて地獄にかならずおつべし。念佛もまたかくのごとし。本願を信じ名號をとなふればその時分にあたりて、かならず往生はさだまるなりとしるべし。（五）

執持鈔

嘉暦元歳丙寅九月五日拭老眼染禿筆是偏爲利益衆生也　釋宗昭　五十七

先年如此予染筆與飛彈願智坊訖而今年暦應三歳庚辰十月十五日隨身此書上洛中一日逗留十七日下國仍於燈下馳老筆留之爲利益也　宗昭　七十一

蓮如上人御一代記聞書

古寫本外題に實悟覺書天正十三年記と云

一、勸修寺村の道德、明應二年正月一日に、御前へまいりたるに、蓮如上人おほせられさふらふ。道德は、いくつになるぞ。道德、念佛まふさるべし。自力の念佛といふは、念佛おほくまふして、佛にまいらせ、このまふしたる功德にて、佛のたすけたまはんずるやうにおもふて、となふるなり。他力といふは、彌陀をたのむ一念のおこるとき、やがて御たすけにあづかるなり。そのゝち念佛まふすは、御たすけありたる、ありがたさ〳〵と、おもふこゝろをよろこびて、南無阿彌陀佛に自力をくはへざるこゝろなり。されば他力とは他の力といふこゝろなり。この一念、臨終までとほりて、往生するなりと、おほせられさふらふなり。（一）

一、仰に、南無といふは、歸命なり。歸命といふは、彌陀を一念たのみまいらするこゝろなり。また發願廻向といふは、たのむ機に、やがて大善大功德をあたへたまふなり、その體すなはち南無阿彌陀佛なりと仰候き。（二）

一、加賀の願生と、覺善と、又四郎とに對して、信心といふは、彌陀を一念御たすけさふらへとたのむとき、やがて御たすけあるすがたを、南無阿彌陀佛とまふすなり。總じて、つみはいかほどあるとも、一念の信力にて、けしうしなひたまふなり。されば無始已來、輪轉六道の妄業、一念南無阿彌陀佛と歸命する佛智無生の名願力にはろぼされて、涅槃畢竟の眞因、はじめてきざすところをさすなりといふ御こゝろをひきたまひて、仰さふらひき。さればこのこゝろを、御かけ字にあそばされて、願生にくだされけり。（三）

一、御つとめのとき、順讃御わすれあり。南殿へ御かへりありて、仰に、聖人御すゝめの和讃、あまりに〳〵殊勝にて、あげばをわすれたりと仰さふらひき。ありがたき御すゝめを信じて、往生するひとすくなしと御述懷なり。（四）

一、念稱是一といふことしらずとまふしさふらふとき仰に、おもひうちにあればいろほかにあらはるゝとあり。されば信をえたる體は、すなはち南無阿彌陀佛なりとこゝろうれば、口もこゝろもひとつなり。（五）

一、わざの御つとめにていつゝの不思議をとくなかにより、盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむと候段のこゝろを、御法嘆のとき、光明遍照十方世界の文のこゝろと、また、月かげの、いたらぬさとはなけれども、ながむるひとの、こゝろにぞすむと、あるうたをひきよせ、御法嘆候。なか〳〵ありがたさ、まふすばかりなくさふらふ。上樣、御立の御あとにて、北殿樣の仰に、夜前の御法嘆、今夜の御法嘆をを、ひきあはせて仰候、ありがたさ〳〵是非におよばずと御掟候ひて、御落涙の御ことかぎりなき御ことにさふらふ。（六）

一、三河の敎賢、伊勢の空賢とに對して、仰に、南無といふは歸命、このこゝろは御たすけさふらへと、たのむなり。この歸命のこゝろ、やがて發願廻向のこゝろを感するなりと、おほせられさふらふなり。（七）

一、他力の願行を、ひさしく身にたもちながら、よしなき自力の執心にほだされて、むなしく流轉しけるなりとさふらふを、え存せずさふらふよし、まふしあげ候ところに仰にきゝわけて、え信せぬものゝことなりと仰られさふらひき。（八）

一、彌陀の大悲の、むねのうちに、かの常沒の衆生みち〳〵たるといへることと不審

にさふらふと、福田寺まふしあげられさふらふ。仰に、佛心の蓮花は、むねにこそひらくべけれ、はらにあるべきや。彌陀の身心の功德、法界衆生の、身のうち、こゝろのそこに、いりみつともあり。しかれば、たゞ領解の心中をさしてのことなりと、仰さふらひき。ありがたきよし、さふらふなり。（九）

一、十月二十八日の逮夜に、のたまはく、正信偈和讃をよみて、佛にも、聖人にも、まいらせんとおもふが、あさましや。他宗には、つとめをして廻向するなり。御一流には、他力信心をよくしれと、おぼしめして、聖人の和讃に、そのこゝろをあそばされたり。ことに、七高僧の、御ねんごろなる御釋のこゝろを、和讃にきゝつくるやうに、あそばされて、その恩を、よく〳〵存知して、あらたうとやと、念佛するは、佛恩の御ことを、聖人の御前にて、よろこびまふすこゝろなりと、くれ〴〵仰られさふらひき。（一〇）

一、聖教をよくおぼえたりとも、他力の安心を、しかと決定なくばいたづらごとなり。彌陀をたのむところにて、往生決定と信じて、ふたごゝろなく、臨終までとほりさふらはゞ、往生すべきなり。（一一）

一、明應三年十一月、報恩講の二十四日、あかつき八時にをきて、聖人の御前、參拜まふしてさふらふに、すこしねぶりさふらふうちに、ゆめともうつゝともわかず、空善おがみまふし候やうは、御厨子のうしろより、わたをつゝみひろげたるやうなるうちよう、上樣あらはれ御出あるとおがみまふすところに、御相好、開山聖人にてぞおはします。あら不思議やとおもひ、やがて御厨子のふちを、おがみまふせば、聖人御坐なし。さては開山聖人、上樣に現じましゝて、御一流を御再興にて御坐候と、まふしいだすべきと存ずるところに、慶閑坊談嘆に、聖人の御流義、たとへば木石の緣をまちて火を生じ、瓦礫の鈡をすりて玉をなすがごとしと、御私記のうへを讃嘆あるとおぼえて、ゆめさめてさふらふ。さては開山聖人の御再誕と、それより信仰まうすことにさふらひき。（一二）

一、教化するひと、まづ信心をよく決定して、そのうへにて、聖教をよみかたらば、きくひとも、信をとるべし。（一三）

一、仰に、彌陀をたのみて、御たすけを決定して御たすけのありがたさよと、よろこぶこゝろあれば、そのうれしさに、念佛まふすばかりなり。すなはち佛恩報謝な

り。（一四）

一。大津近松殿に對しまし〳〵て、仰られ候　信心をよく決定して、ひとにもたらせよと、仰られさふらひき。（一五）

一。十二月六日に、富田殿へ御下向にて候あひだ、五日の夜は、大勢、御前へまいりさふらふに、仰に、今夜はなにごとにひとおほくきたりたるぞと、順誓まふされ候は、まことにこのあひだの御聽聞まふし、ありがたさの御禮のため、また明日御下向にて御座さふらふ、御目にかゝりまふすべしかのあひだ、歳末の御禮のためならんと、まふしあげられけり。そのとき仰に、無益の歳末の禮かな、歳末の禮には、信心をとりて禮にせよとおほせさふらひき。（一六）

一。仰に、ときく〳〵懈怠することあるとも。往生すまじきかと、うたがひなげくことあるものあるべし。しかれども、もはや彌陀如來を、ひとたびたのみまいらせて、往生決定ののちなれば、懈怠おほくなることのあさましや、かゝる懈怠おほくなるものなれども、御たすけは治定なり。ありがたや〳〵と、よろこぶこゝろを、他力大行の催促なりとまふすと、おほせられさふらふなり。（一七）

一。御たすけありたることの、ありがたさよと、念佛まふすべく候や。又、御たすけあらふずる事のありがたさよと、念佛まふすべく候やと、まふしあげさふらふとき、仰に、いづれもまし、たゞし、正定聚のかたは、御たすけありたると、よろこぶこゝろ。滅度のさとりのかたは、御たすけあらうずることの、ありがたさよと、まふすこゝろなり。いづれも、佛になることを、よろこぶこゝろ、よしと仰さふらふなり。（一八）

一。明應五年、正月二十三日に、富田殿より御上洛ありて、仰に、當年よりいよ〳〵信心なきひとには、御あひあるまじきと、かたく仰候なり。安心のとほり、いよいよ仰きかせられて、また誓願寺に能をせらられけり。二月十七日に、やがて富田殿へ御下向ありて、三月二十七日に、さかい殿より御上洛にて、二十八日に、仰られさふらふ。自信教人信のこゝろを、仰きかせられんがために、上下辛勞なれども、御出あるところは信をとりよろこぶよし、まふすほどに、うれしくて、またのぼりたりとおほせられさふらひき。（一九）

一。四月九日に、仰られ候。安心をとりて、ものをいはゞよし。用ないところをば、い

ぶまじきなり。一心のところをば、よくひとにもいへと、空善に御掟なり。（二〇）

一。同十二日に、堺殿へ御下向あり。（二一）

一。七月二十日、御上洛にて、その日、仰られ候、五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはて丶、自然の淨土にいたるなれ。この次をも、御法嘆ありて、この二首の讃のこゝろをいひて、きかせんとて、のぼりたりと仰候なり。さて自然の淨土にいたるなり、ながく生死をへだてけり。さて〳〵あら〳〵、おもしろや〳〵とくれ〴〵御掟ありけり。（二二）

一。のたまはく、南無の字は、聖人の御流義にかぎりて、あそばしけり。南無阿彌陀佛を、泥にてうつさせられて、御座敷にかけさせられて、仰られけるは、不可思議光佛、無碍光佛もこの南無阿彌陀佛をほめたまふ德號なり。しかれば、南無阿彌陀佛を本とすべしと、おほせられさふらふなり。（二三）

一。十方無量の諸佛の證誠護念のみことにて、自力の大菩提心の、かなはぬほどはしりぬべし。御讃のこゝろを、聽聞まふしたきと、願誓まふしあげられけり。仰に、諸佛の彌陀に歸せらるゝを、能としたまへり。世のなかにあさのこゝろをすてよかし、妻うしのつめは、さもあらばあれと、これは、御開山の御うたなり。されば、かたちはいらぬこと、一心を本をすべしとなり。世にも、かうべをそるといへども、こゝろをそらずといふことがあるとおほせられさふらふなり。（二四）

一。烏部野を、おもひやるこそあはれなれ、ゆかりのひとのあとゝおもへば、これも聖人の御うたなり。（二五）

一。明應五年九月二十日、御開山の御影樣、空善に御免あり。なか〳〵ありがたさ、まふすにかぎりなきことなり。（二六）

一。同十一月報恩講の二十五日に、御開山の御傳を、聖人の御前にて上樣あそばされて、いろ〳〵御法嘆さふらふ。なか〳〵ありがたさ、まふすばかりなく候。（二七）

一。明應六年、四月十六日、御上洛にて、その日、御開山聖人の御影の正本、あつがみ一枚に、御みづからの御筆にて御座候とて、上樣御手に御ひろげさふらひてみなにおがませたまへり。この正本、まことに宿善なてくは、拜見まふさぬことなりと、おほせられさふらふ。（二八）

一。のたまはく、諸佛三業莊嚴して、畢竟平等なることは、衆生虛誑の身口意を、治

せんがためとのべたまふといふは、諸佛の彌陀に歸して、衆生をたすけらるゝことよとおほせられさふらふ、（二九）

一。一念の信心をえてのちの相續といふは、さらに別のことにあらず。はじめ發起するところの安心に、相續せられて、たうとくなる一念のこゝろのとほるを、憶念の心つねにとも、佛恩報謝ともいふなり。いよ〳〵歸命の一念、發起すること、肝要なりとおほせさふらふなり。（三〇）

一。のたまはく、朝夕、正信偈和讃にて、念佛まふすは、往生のたねになるべきか、たねにはなるまじきかと、をの〳〵坊主に御たづねあり。みな、まふされけるは、往生のたねになるべしと、まふしたるひともあり、往生のたねになるまじきといふひともありけるとき、仰に、いづれもわろし。正信偈和讃は、衆生の彌陀如來を一念にたのみまいらせて、後生たすかりまうせとのことはりを、あそばされたり。よくきゝわけて、信心をとりて、ありがたや〳〵と聖人の御前にてよろこぶことなりと、くれ〳〵仰さふらふなり。（三一）

一。南無阿彌陀佛の六字を、他宗には、大善大功德にてあるあひだ、となへて、この功德を諸佛菩薩諸天にまいらせて、その功德を、わがものがほにするなり。一流には きさなし。この六字の名號、わがものにてありてこそ、となへて佛菩薩にまいらすべけれ。一念一心に後生たすけたまへとたのめば、やがて、御たすけにあづかるごとの、ありがたや〳〵とまふすばかりなりと、仰候なり。（三二）

一。三河の國より、淺井の後室、いとまごひにとてまいり候に、富田殿へ御下向のあしたのことなればことのほかに御とりみだしにて御座候に、仰に、名號をたゝへとなへて、佛にまいらするこゝろにてはゆめ〳〵なし。彌陀佛をしかと御たすけさふらへとたのみまいらすれば、やがて佛の御たすけにあづかるを、南無阿彌陀佛とまふすなり。しかれば、御たすけにあつかりたることを、ありがたさよ〳〵とこゝろにおもひまいらするを、くちにいだして南无阿彌陀佛〳〵とまふすを、佛恩を報ずると、まふすことなりと仰候ひき。（三三）

一。順誓まふしあげられ候。一念發起のところにて、つみみな消滅して、正定聚不退のくらゐにさだまると、御文にあそばされたり。しかるに、つみはいのちのあるあひだつみもあるべしとおほせさふらふ御文と、別にきこえまふしさふらふやと、ま

ふしあげさふらとき、仰に、一念のところにて つみみなきえてとあるは、一念の信力にて、往生さだまるときは、つみはさばりとならず、さればなき分なり。いのちの娑婆にあらんかぎりは、つみはつきざるなり。順誓は、はやさとりて、つみはなきかや。聖教には、一念のところにて つみきえてとあるなりと仰られ候。罪のありなしの沙汰をせんよりは、信心をとりたるか、とらざるかの沙汰を、いくたびも〳〵。よし、つみきえて御たすけあらんとも、つみ消ずして御たすけあるべしとも、彌陀の御はからひなり。我としてはからふべからず。たゞ信心肝要なりと、くれ〴〵おほせられさふらふなり。（三四）

一。眞實信心の稱名は、彌陀廻向の法なれば、不廻向となづけてぞ、自力の稱念きらはるゝといふは、彌陀のかたより、たのむこゝろも、たうとやありがたやと念佛まふすこゝろも、みなあたへたまふゆへに、とやせんかくやせんと、はからふて念佛まふすは、自力なれば、きらふなりと、おほせさふらふなり。（三五）

一。無生の生とは、極樂の生は、三界をへめぐるこゝろにてあらざれば、極樂の生は、無生の生といふなり。（三六）

一。廻向といふは、彌陀如來の、衆生を御たすけをいふなりと、おほせられさふらふなり。（三七）

一。仰に、一念發起の時、往生は決定なり。つみけして たすけたまはんとも、つみけさずして、たすけたまはんとも、彌陀如來の御はからひなり。つみの沙汰無益なり。たのむ衆生を、本とたすけたまふことなりと仰られ候なり。（八三）

一。仰に、身をすてゝ、平坐にて、みなと同坐するをば、聖人のおほせに、四海の信心のひとは、みな兄弟と、仰られたれば、われもその御ことばのごとくなり。また同座をもしてあらば、不審なることをもとへかし、信をよくとれかしと、ねがふばかりなりと、おほせられさふらふなり。（三九）

一。愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばす、眞證の證にちかづくことを たのしまずとまふす沙汰に、不審のあつかひどもにて、往生せんずるか、すまじきなんど、たがひにまふしあひけるを、ものごしにきこしめされて、愛欲も名利も、みな煩惱なり、されば、機のあつかひをするは雜修なりと、おほせさふらふなり。たゞ信ずるほかは、別のことなしと仰られ候なり。（四〇）

一。ゆふさり案内をもふさず、ひと〳〵おほくまいりたるを、美濃どの、まかりいでさふらへと、あら〳〵と御まふしのところに、仰に、さやうにいはんことばにて、一念のことを、いひてきかせてかへせかしと、東西をはしりまはりて、いひたきことなりと、おほせられ候とき、慶聞坊、なみだをながし、あやまりて候とて、讃嘆ありけり。みな〳〵落涙まふすこと、かぎりなかりけり。（四一）

一。明應六年十一月、報恩講に御上洛なく候あひだ、法慶坊、御使として、當年は、御在國にて御座さふらふあひだ、御講をなにと御沙汰あるべきやと、たづね御まふし候に、當年よりは、ゆふべの六どき、あさの六どきをかぎりに、みな退散あるべしとの、御文をつくりて、かくのごとくめさるべきよし、御掟あり。御堂の夜のとまり衆も、その日の頭人ばかりと、御掟なり。また上樣は、七日の御講のうちを、富田どのにて三日、御つとめありて、二十四日には、大坂どのへ御下向にて御勤行なり。（四二）

一。同七年の夏より、また御違例にて御座候あひだ、五月七日に、御いとまごひに聖人へ御まいりありたきと、おほせられて、御上洛にて、やがておほせに、信心なきひとにはあふまじきぞ、信をうるものには、めしてもみたくさふらふ、あふべしと仰なりと云々。（四三）

一。いまのひとは、いにしへをたづぬべし。またふるきひとは、いにしへをよくつたふべし。物語はうすものなり。しるしたるものはうせず候。（四四）

一。あかをの道宗、まふされさふらふ。一日のたしなみには、あさつとめにかゝさむとたしなめ。一月のたしなみには、ちかきところ、御開山樣の御座候ところへ、まいるべしと、たしなむべし。一年のたしなみには、御本寺へまいるべしと、たしなむべしと云々。これを圓如樣、きこしめしをよばれ、よくまふしたるとおほせられさふらふ。（四五）

一。わがこゝろにまかせずして、こゝろをせめよ。佛法は、こゝろのつまるものかとおもへば、信心に御なぐさみ候と、おほせられさふらふ。（四六）

一。法敬坊、九十まで存命さふらふ、このとしまで聽聞まふしさふらへども、これまで存知たることなし、あきたりもなきことなりと、まふされさふらふ。（四七）

一。山科にて、御法嘆の御座候とき、あまりにありがたき御掟ともなりとて、これをわすれまふしてはと存じ、御座敷をたち、御室へ六人よりて談合さふらへば、面々

にきゝかへられさふらふ。そのうちに、四人はちがひさふらふ。大事のことにて候とまふすことなり。きゝまどひあるものなり。（四八）

一。蓮如上人の御とき、こゝろざしの衆も、御前におほく候とき、このうち、信をえたるものいくたりあるべきぞ、ひとりか、ふたりか、あるべきかなと、御掟候とき、をの〳〵さもをつぶしさふらふと、まふされさふらふよしに候。（四九）

一。法慶まふされさふらふ。讃嘆のとき、なにもおなじやうにきかで、聽は、かどをきけと、まふされさふらふ。詮あるところをきけとなり。（五〇）

一。憶念稱名いさみありてとは、稱名はいさみの念佛なり。信のうへは、うれしく、いさみて、まふす念佛なり。（五一）

一。御文のこと。聖教は、よみちがへもあり、こゝろえもゆかぬところもあり。御文はよみちがへもあるまじきとおほせさふらふ。御慈悲のきはまりなり。これをきゝながらこゝろえのゆかぬは、無宿善の機なり。（五二）

一。御流の御こと、このとしまで聽聞まふしさふらひて、御ことばをうけたまはりさふらへども、たゞこゝろが、御ことばのごとくならぬと、法慶まふされ候。（五三）

一。實如上人、さい〳〵仰られ候。佛法のこと、わがこゝろにまかせず、たしなめと御掟なり。こゝろにまかせては、さてなり。すなはちこゝろにまかせず、たしなむ心は、他力なり。（五四）

一。御一流の義を、うけたまはりわけたるひとはありとも、きゝうるひとはまれなりといへり。信をうる機、まれなりといへるこゝろなり。（五五）

一。蓮如上人の御掟に、佛法のことをいふに、世間のことに、とりなすひとのみなりそれをたいくつせずして、また佛法のことに、とりなせと、おほせられ候なり。（五六）

一。聖教を、すきこしらへもちたるひとの子孫には佛法者いでくるものなり。ひとたび、佛法をたしなみさふらふひとは、大樣になれども、おどろきやすきなり。（五七）

一。たれのともがらも、われはわろきと、おもふもの、ひとりとしてあるべからず。これしかしながら、聖人の御罰をかうぶりたるすがたなり。これによりて、一人づゝも、心中をひるがへさずば、ながき世、泥梨にふかくしづむべきものなり。これと

いふも、なにごとぞなれば、眞實に、佛法のそこをしらざるゆへなり。（五八）

一、みなひとの、まことの信は、さらになし、ものしりがほのふせいにてこそ、近松殿の堺へ御下向のとき、なげしにをしてをかせられ候。あとにてこゝろをおもひいだしさふらへと御掟なり。光應寺殿の御不審なり。ものしりがほとは、われはこゝろえたりとおもふがこのこゝろなり。（五九）

一、法敬坊、安心のとほりばかり、讃嘆するひとなり。言南無者の釋をば、いつもはづさずひくひとなり。それさへさしよせてまふせと、蓮如上人、御掟候なり。（六〇）

ばすくなに、安心のとほりまふせと、御掟なり。（六〇）

一、善宗まふされ候。こゝろざしまふし候とき、わがものがほに、もちてまいるは、はづかしきよしまふされ候。なにとしたることにて候やとまふしさふらへば、これみな御用のものにてあるを、わがものゝやうにもちてまいると、まふされさふらふ。たゞ上樣のもの、とりつぎ候ことにてさふらふを、わがものがほに存ずると、まふされさふらふ。（六一）

一、津國くんげの主計とまふすひとあり。ひまなく念佛まふすあひだ、ひげをそるときさらぬことなし。わすれて念佛まふすなり。ひとのくちはたちかねば、念佛もすこしのあひだも、まふされぬかとこゝろもとなきよしにさふらふ。（六二）

一、佛法者まふされ候。わかきとき、佛法はたしなめと候。としよれば、行歩もかなはず、ねむたくもあるなり。たゞわかきとき、たしなめと候。（六三）

一、衆生を、しつらひたまふ。しつらふといふは、衆生のこゝろを、そのまゝをきてよきこゝろを、御くはへさふらひて、よくめされなし候。衆生のこゝろを、みなとりかへて、佛智ばかりにて、別に御したて候ことにては、なくさふらふ。（六四）

一、わが妻子ほど、不便なることなし。それを勸化せぬは、あさましきことなり。宿善なくば、ちからなし。わが身をひとつ、勸化せぬものがあるべきか。（六五）

一、慶聞坊のいはれ候。信はなくて、まぎれまはると、日に〳〵地獄がちかくなる。まぎれまはるあらはれは、地獄がちかくなるなり。うちみは信不信みえずさふらふ。とをくいのちをもたずして、今日ばかりとおもへと、ふるきこゝろざしのひと、まふされさふらふ。（六六）

一、一度のちかひが、一期のちかひなり。一度のたしなみが、一期のたしなみなり、

そのゆへは、そのまゝいのちをはれば、一期のちかひに、なるによりてなり。（六七）

一。今日ばかり、おもふこゝろをわするなよ、さなきはいとゞのぞみおほきに　蓮如様御歌

（六八）

一。蓮如上人仰られ候。本尊は掛やぶれ、聖教はよみやぶれと、對句に仰られ候。

（六九）

一。他流には名號よりは繪像、繪像よりは木像と云なり。當流には、木像よりはゐざう、繪像よりは名號といふなり。（七〇）

一。御本寺北殿にて、法敬坊に對して蓮如上人仰られ候。われは、何事をも、當機をかゝみおぼしめし、十あるものを一にするやうに、かろ〳〵と理のやがて叶ふ樣に御沙汰候。是を人が勘へぬと仰られ候。御文等をも、近年は御ことばすくなにあそばされ候。今は、ものを聞うちにも退屈し、物を聞おとす間、肝要のことをやがてしり候やうに、あそばされ候の由仰られ候。（七一）

一。法印兼緣、幼少の時二役にて、あまた小名號を申入候時、信心やある、をの〳〵と仰られ候。信心は體名號にて候。仰、今思合候との義に候。（七二）

一、蓮如上人仰られ候。堺の日向屋は三十萬貫を持たれども、死にたるが、佛にはなり候まじ。大和の了妙は、帷一つをもきかねども、此度佛になるべきよと、仰られさふらふ由に候。（七三）

一、蓮如上人へ、久寶寺の法性申され候は、一念に、後生御たすけ候へと、彌陀をたのみ奉り候ばかりにて、往生一定と存候、かやうにて、御入候かと申され候へば、或人わきより、それはいつもの事にて候、別のこと不審なることなど申され候はでと、申され候へば、蓮如上人仰られ候。それぞとよ、わろきとは。めづらしき事を、聞たくおもひ、しりたく思ふなり。信のうへにては、いくたびも心中のおもむき、かやうに申さるべきことなるよし、仰られ候。（七四）

一。蓮如上人仰られ候。一向に不信の由、申さるゝ人はよく候。ことばにては、安心のとほり申候て、口には同ごとくにて、まぎれて空くなるべきことを、悲く覺え候由、仰られ候なり。（七五）

一。聖人の御一流は、阿彌陀如來の御掟なり。されば、御文には、阿彌陀如來の仰られけるやうはと、あそばされ候。（七六）

一、蓮如上人、法敬に對せられ、仰られ候。今此彌陀をたのめといふことを御教へ候人をしりたるかと、仰られ候。順誓、存せずと申され候。今、御をしへ候人を云べし。鍛冶番匠などに、物ををしふるに、物を出すものなり。一大事のことなり。何ぞものをまいらせよ、いふべきと仰られ候時、順誓、なか〳〵何たるもの成とも、進上いたすべきと、申され候。蓮如上人、仰られ候。此事ををしふる人は、阿彌陀如來にて候。阿彌陀如來の、我をたのめとの、御をしへにて候由、仰られ候。（七七）

一、法敬坊、蓮如上人へ申され候。あそばされ候御名號、燒申候が、六體の佛になり申候、不思議なる事と、申され候へば、前々住上人、その時、仰られ候。それは不思議にてもなきなり。佛の佛に御なり候は、不思議にてもなく候、惡凡夫の彌陀をたのむ一念にて、佛になるこそ、不思議よと仰られ候なり。（七八）

一、朝夕は、如來聖人の御用にて候間、冥加の方を、ふかく存ずべきよし、折々前々住上人仰られ候由に候。（七九）

一、前々住上人、仰られ候。かむとはしるとも、呑としらすなと云ことがあるぞ、妻子を帶し、魚鳥を服し、罪障の身なりといひて、さのみ思のまゝには、あるまじき由、仰られ候。（八〇）

一、佛法には、無我と仰られ候。われと思ことは、いさゝかあるまじきことなり。われば、わろしとおもふ人なし。これ聖人の御罰なりと、御詞候。他力の御すゝめにて候。ゆめ〳〵われといふことは、あるまじく候。無我と云こと、前住上人も度々仰られ候。（八一）

一、日比しれるところを、善知識にあひてとへば、德分あるなり。しれるところをとへば、德分あるといへるが、殊勝のことばなりと、蓮如上人仰られ候。不知處をとはゞ、いかほど殊勝なること、あるべきと仰られ候。（八二）

一、聽聞を申も、大略、我ためとおもはず、やゝもすれば、法文の一をもきゝおぼえて、人にうりごゝろあるとの、仰ことにて候。（八三）

一、一心にたのみ奉る機は、如來のよくしろしめすなり。彌陀のたゞしろしめすやうに、心中をもつべし。冥加をおそろしく存ずべきことにて候との義に候。（八四）

一、前住上人仰られ候。前々住より御相續の義は、別義なきなり。たゞ彌陀たのむ一念の義よりほかは、別義なく候。これよりほか御存知なく候。いかやうの御誓言

もあるべき由、仰られ候。（八五）

一、同、仰られ候、凡夫往生、たゞたのむ一念にて、佛にならぬことあらば、いかなる御誓言をも、仰らるべき證據は、南無阿彌陀佛なり。十方の諸佛の證人にて候。（八六）

一、蓮如上人、仰られ候。物をいへ〳〵と仰られ候。物をいはぬ者は、おそろしきと仰られ候、信不信ともに、たゞ物をいへと仰られ候。物を申せば、心底もきこえ、又人にもなをさるゝなり。たゞ物を申せと、仰られ候。（八七）

一、蓮如上人、仰られ候。佛法は、つとめのふしはかせもしらで、よくすると思ふなり。つとめのふしわろきよしを仰られ、慶聞坊をいつもとりつめ、仰られつる由に候。それに付て、蓮如上人、仰られ候。一向にわろき人は、ちがひなどゝいふ事もなし。たゞわろきまでなり。わろしとも仰ごともなきなり。法義をも心にかけ、ちとこゝろえもある上のちがひが、ことのほかの逆なりと、仰られ候由に候。（八八）

一、人のこゝろえのとほり申されけるに、わがこゝろは、たゞかごに水を入候やうに、佛法の御座敷にては、ありがたくもたうとくも存候が、やがてもとの心中になされ候と、申され候。所に、前々住上人仰られ候。そのかごを水につけよ。我身をば法にひでゝをくべきよし、仰られ候。萬事信なきによりてわろきなり。善知識のわろきと仰らるゝは、信のなきことをくせごとゝ仰られ候事に候。（八九）

一、聖教を拜申すも、うか〳〵とおがみ申すは、その詮なし。蓮如上人は、たゞ聖教をば、くれ〳〵と仰られ候。又百遍これをみれば、義理をのづからうると申す事もあれば、こゝろをとゞむべきことなり。聖教は、句面のごとくこゝろうべし。その上にて、師傳口業はあるべきなり。私にして、會釋することしかるべからざる事なり。（九〇）

一、前々住上人仰られ候。他力信心、他力信心とみれば、あやまりなきよし、仰られ候。（九一）

一、われればかりと思ひ、獨覺心なること、あさましきことなり。信あらば佛の御慈悲をうけとり申す上は、われればかりと思ふことはあるまじく候。觸光柔輭の願候時は、心もやはらぐべきことなり。されば緣覺は獨覺のさとりなるが故に、佛にならざるなり。（九二）

一。一句一言も申す者は、われと思て物を申すなり。信のうへは、われはわろしと思ひ、又報謝と思ひ、ありがたさのあまりを、人にも申すことなるべし。（九三）

一。信もなくて、人に信をとられよ〳〵と申すは、我は物をもたずして、人に物をとらすべきといふ心なり。人、承引あるべからずと、前住上人、順誓申されしとて、仰られ候き。自信教人信と候時は、まづわが信心決心して人にも教て、佛恩になるとのことに候。自心の安心決定して教るは、即ち大悲傳普化の道理なる由、同く仰られ候。（九四）

一。蓮如上人、仰られ候。聖教よみの聖教よまずあり。聖教よまずの聖教よみあり一文字もしらねども、人に聖教をよませ、聽聞させて、信をとらするは、聖教よまずの聖教よみなり。聖教をばよめども、眞實によみはせず、法儀もなきは、聖教よみの聖教よまずなりと、仰られ候。

自信教人信の道理なりと、仰られ候事。（九五）

一。聖教よみの佛法を申たてたることはなく候。尼入道のたぐひの、たうとやありがたやと申され候をきゝては、人が信をとると、前々住上人仰られ候由に候。何もしらねども、佛の加備力の故に、尼入道などのよろこばるゝをきゝては、人も信をとるなり。聖教をよめども、名聞がさきにたちて、心には法なき故に、人の信用なきなり。（九六）

一。蓮如上人、仰られ候。當流には、總別世間機わろし。佛法のうへより、何事もあひはたらくべきことなるよし、仰られ候と云々（九七）

一。同仰られ候。世間にて、時宜しかるべきよき人なりといふとも、信なくば、心をくべきなり。便にもならず。たとひ、片目つぶれ。腰を引候やうなる者なりとも、信心あらん人をば、たのもしく思ふべきなりと、仰られ候由に候。（九八）

一。君を思ふは、われを思ふなり。善知識の仰に隨ひ、信をとれば、極樂へ參る者なり。（九九）

一。久遠劫より久き佛は、阿彌陀佛なり。かりに果後の方便によりて、誓願を儲たまふことなり。（一〇〇）

一。前々住上人仰られ候。彌陀をたのめる人は、南無阿彌陀佛に身をばまるめたる事なりと、仰られ候と云々。いよ〳〵冥加を存すべきの由に候。（一〇一）

一。丹後法眼、蓮應、衣裳と〻のへられ、前々住上人の御前に伺候さふらひし時、仰られ候。衣のえりを御たゝきありて、南無阿彌陀佛よと仰られ候。又前住上人は、御たゝみをたゝかれ、南無阿彌陀佛にもたれたるよし、仰られ候き、南無阿彌陀佛に身をばまるめたると、仰られ候と、符合申候。（一〇二）

一。前々住上人、仰られ候。佛法のうへには、毎事に付て、空おそろしき事と存候べく候。たゞよろづに付て油斷あるまじきことゝ存候への由、折々仰られしと云々。佛法には明日と申事あるまじく候。佛法の事は、いそげ〳〵と仰られ候なり。（一〇三）

一。同仰に、今日の日はあるまじきと思へと、仰られ候。何事もかきいそぎて、物を御沙汰候由にて候。なが〳〵したる事を御嫌の由に候。佛法のうへにては、明日のことを今日にするやうにいそぎたること賞翫候。（一〇四）

一。同仰に云、聖人の御影を申すは、大事のことなり。昔は御本尊よりほかは、御座なきことなり。信なくば、必御罰を蒙るべき由、仰られ候。（一〇五）

一。時節到來と云こと、用心をもして、そのうへに事の出來候を、時節到來とは云べし。無用心にて、事の出來候を、時節到來とはいはぬ事なり。聽聞を心かけてのうへの宿善無宿善とも云事なり。たゞ信心は、きゝにきはまることなる由、仰の由に候。（一〇六）

一。前々住上人、法敬に對して仰られ候。まきたてといふ物、知たるかと。法敬、御返事に、まきたてと申すは、一度たねをまきて、手をさゝぬ物に候と、申され候。仰に云、それぞまきたてがわろきなり。人になをされまじきと思ふ心なり。心中をば申し出して、人になをされ候はでは、心得のなをることあるべからず。まきたてには信をとることあるべからずと、仰られ候と云々。（一〇七）

一。何ともして、人になをされ候やうに、心中を持べし。わが心中をば、同行の中へうち出しをくべし。下々たる人のいふことをば、用ひずして、必ず腹立するなり。あさましきことなり。たゞ人になをさるゝやうに、心中を持べき儀に候。（一〇八）

一。人の前々住上人へ申され候。一念の處決定にて候。やゝもすれば、善知識の御ことばを、をろそかに存候由、申され候へば、仰られ候は、最も信のうへは崇仰の心あるべきなり。さりながら、凡夫の心にてはなきか。斯樣の心中のおこらん時は、勿體なき事と、おもひすつべしと仰られしと云々。（一〇九）

一。蓮如上人、兼縁に對せられ、仰られ候。たとひ、木の皮をきるいろめなりとも、なわびそ、たゝ彌陀をたのむ一念を、よろこぶべき由、仰られ候。（一一〇）

一。前々住上人、仰られ候。上下老若によらず、後生は、油斷にてしそんずべきの由、仰られ候。（一一一）

一。前々住上人、御口のうちを御煩候に、をりふし御目をふさがれ、あゝと仰られ候。さだめし御口中御煩と。皆々存候處に、やゝありて仰られ候。人の信のなきことを思召せば、身をきりさくやうにかなしきよと仰られ候由に候。（一一二）

一。同仰に。われは人の機をかゝみ、人にしたがひて、佛法を御聞せ候由、仰られ候。いかにも、人のすきたることなど、申させられ、うれしやと存候處に、又佛法の事を仰られ候。いよ〳〵御方便にて、人に法を御きかせ候つる由に候。（一一三）

一。前々住上人、仰られ候。人の佛法を信じて、われによろこばせんと思へり。それはわろし。信をとれば、自身の勝德なり。さりながら、信をとらば、恩にも御うけあるべきと仰られ候。又きゝたくもなき事なりとも、まことに信をとるべきならば、きこしめすべき由、仰られ候。（一一四）

一。同、仰に、まことに一人なりとも、信をとるべきならば、身を捨よ、それはすたらぬと仰られ候。（一一五）

一。あるとき、仰られ候。御門徒の、心得をなをすときこしめして、老の皺をのべ候と仰られ候。（一一六）

一。ある御門徒衆に御尋候。そなたの坊主、心得のなをりたゝを、うれしく存ずるかと、御尋候へば、申され候。寔に心得をなをされ、法義を心にかけられ候。一段ありがたくうれしく存候由、申され候。そのとき仰られ候。われはなをうれしく思ふよと仰られ候。（一一七）

一。おかしき事態をもさせられ、佛法に退屈仕候者の、心をもくつろげ、その氣をもうしなはして、又あたらしく法を仰られ候。誠に善巧方便ありがたき事なり。（一一八）

一。天王寺土塔會、前々住上人、御覽候て、仰られ候。あれほどの多き人ども、地獄へおつべしと、不便に思召候つる由、仰られ候。又その中に御門徒の人は、佛になるべしと仰られ候。これ又ありがたき仰にて候。（一一九）

一。前々住上人、御法談已後、仰られ候。四五人の御兄弟へ、仰られ候。四五人の衆、寄合談合せよ、必ず五人は五人ながら、意巧にきく物なり。能々談合すべきの由、仰られ候。（一二〇）

一。たとひなき事なりとも、人申候はゞ、當座に領承すべし。當座に詞を返せば、ふたゝびいはざるなり。人のいふ事をば、たゞふかく用心すべきなり。是に付て、ある人相たがひにあしき事を申すべしと契約し候。し處に、則ち一人のあしきさまなること、申しければ、我は左樣に存ぜざれども人の申す間、左樣に候と申す。されば此返答あしきとの事に候。さなきことなりとも、當座はさぞと申べき事なり。（一二一）

一。一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大なる事にてはなく候。一人なりとも、人の信を取が一宗の繁昌に候。然ば、專修正行の繁昌は、遺弟の念力より成ずとあそばされをかれ候。（一二二）

一。前々住上人、仰られ候。聽聞心に入て申さんと思ふ人はあり。信をとらんすると思ふ人なし。されば極樂は、たのしむと聞て、參らんと願ひのぞむ人は、佛にならず、彌陀をたのむ人は、佛になると仰られ候。（一二三）

一。御文は、如來の直說なりと存ずべきの由に候。形をみれば法然、詞を聞ば彌陀の直說といへり。（一二四）

一。蓮如上人、御病中に、慶聞に何ぞ物をよめと仰られ候時、御文をよみ申すべきかと申され候。さらばよみ申せと仰られ候。三通二度づゝ、六遍よませられて、仰られ候。わがつくりたる物なれども、殊勝なるよと仰られ候。（一二五）

一。順誓申されしと云々。常には、わが前にてはいはずして、かげに後言いふとて、腹立することなり。われはさやうには存ぜず候。わが前にて、申にくゝばかげにてなりとも、わがうしろ事を申されよ、聞て心中をなをすべきよし申され候。（一二六）

一。前々住上人、仰られ候。佛法のためと思召候へば、なにたる御辛勞をも、御辛勞とは思召れぬ由、仰られ候。御心まめにて何事も御沙汰候由なり。（一二七）

一。法にはあらめなるがわろし。世間には、微細なるといへども、佛法には、微細に心をもち、こまかに心をはこぶべきよし、仰られ候。（一二八）

一。とをきはちかき道理、ちかきは遠き道理あり。燈臺本くらしとて、佛法を不斷聽

聞申す身は、御用をあひみて、いつものことゝ思ひ、法義にをろそかなり。遠く候人は、佛法をきゝたく大切にもとむる心あるなり。佛法は大切にもとむるよりきく者なり。（一二九）

一。ひとつことを聞て、いつもめづらしく、初たる樣に、信のうへには有るべきなり。たゞ珍しき事を聽度思ふなり。一事を幾度聽聞申すとも、めづらしく、はじめたるやうにあるべきなり。（一三〇）

一。道宗は、たゞ一つ御詞を、いつも聽聞申か、初たるやうに難有由申され候。（一三一）

一。念佛申も、人の名聞げにおもはれんと思ひて、たしなむが、大儀なる由、或人申され候。つねの人の心中にかはり候事。（一三二）

一。同行同侶の目をはぢて、冥慮をおそれず。たゞ冥見をおそろしく存ずべきことなり。（一三三）

一。たとひ正義たりとも、しげからんことをば、停止すべき由候。まして世間の儀、停止候はぬことしかるべからず。彌增長すべきは、信心にて候由に候。

（一三四）

一。蓮如上人、仰られ候。佛法には、まいらせ心わろし。是をして、御心に叶はんと思ふ心なり。佛法のうへは、何事も報謝と存ずべきなりと。云々（一三五）

一。人の身には、眼耳鼻舌心意の六賊ありて、善心を奪ふ。これは諸行のことなり。念佛はしからず。佛智の心をうるゆへに、貪瞋煩惱中、能生清淨願往生心といへり。正信偈には、譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇といへり。（一三六）

一。一句一言を聽聞するとも、たゞ得手に法をきくなり。たゞよく聞き、心中のとはし、同行にあひ談合すべきことなりと。云々（一三七）

一。前々住上人、仰られ候。神にも馴ては、手ですべきことを、足でするぞと仰られたり。如來聖人善知識にも、なれ申ほど、御こゝろやすく思なり。馴申ほど彌渴仰の心をふかくはこぶべき事なる由、仰られ候。（一三八）

一。くちと身のはたらきとは、似するものなり。心ねが、よくなりがたきものなり、涯分、心の方を嗜み申すべきことなりと。云々（一三九）

一。衣裳等にいたるまで、わが物と思ひ、踏たゝくること、淺間敷事なり。悉く聖人の御用物にて候間、前々住上人は、めし物など、御足にあたり候へば、御いたゝき候由、うけたまはりおよび候。（一四〇）

一。王法は額にあてよ、佛法は内心に深く蓄へよとの仰に候。仁義と云事も端正あるべきことなるよしに候。（一四一）

一。蓮如上人、御若年の比、御迷惑のことにて候し。たゝ御代にて佛法を仰たてられんと思召候。御念力一つにて、御繁昌候。御辛勞放に候。（一四二）

一。御病中に、蓮如上人仰られ候。御代に、佛法を是非とも御再興あらんと、思召候御念力一つにて、かやうに今まで皆々心やすくあることは、此法師か、冥加に叶ふによりてのことなりと、御自證ありと。云々（一四三）

一。前々住上人は、昔はごふくめをめされ候。白小袖とて、御心やすく召し候御事も、御座なく候由に候。いろ〳〵御かなしかりける事ども、折々御物語候。今々の者は、左樣の事を承り候て、冥加を存ずべきの由、くれ〴〵仰られ候。（一四四）

一。よろづ御迷惑にて、油をめされ候はんにも、御用脚なく候間、やう〳〵京の黒木を、すこしづゝ御とり候て、聖教など御覽さふらふ由に候。又少々は、月の光にても、聖教をあそばされ候。御足をも、大概、水にて御洗候。又二三日も御膳まいり候はぬ御事も候由承りおよひ候。（一四五）

一。人をも甲斐〳〵しくめしつかはれ候はである上は、幼童の襁褓をも、御ひとり御洗候など、被仰候。（一四六）

一。存如上人、召仕はれ候小者を、御雇ひ候て、めしつかはれ候由に候。存如上人は、人を五人めしつかはれ候。蓮如上人、御隱居の時も、五人めしつかはれ候。當時は、御用とて心のまゝなること、そらおそろしく、身もいたくかなしく存ずべき事にて候。（一四七）

一。前々住上人仰られ候。昔は、佛前に伺候の人は、本は紙絹に輻をさし着候。今は白小袖にて、結句きかへを所持候。これその比は、禁裏にも御迷惑にて、質ををかれて、御用にさせられ候と、ひきごとに御沙汰候。（一四八）

一。又仰られ候。御貧く候て、京にて、古き綿を御とり候て、御一人ひろげ候事あり。又御衣はかたの破たるをめされ候。白き御小袖は、美濃絹のわろきをもとめ、

やう〳〵一つめされ候よし、仰られ候。當時は、かやうの事をもしり候はで、あるべきやうにみな〳〵存候ほどに、冥加につき申べし。一大事なり。（一四九）

一。同行善知識には、能々ちかづくべし。親近せざるは、雜修の失なりと、禮讃にあらはせり。惡き者に、ちかづけば、それには馴じと思へども、惡事より〳〵にあり。只佛法者には、馴ちかづくべきよし、仰られ候。俗典に云く、人の善惡は近習によると。又その人を知んとおもはゞ、その友をみよといへり。善人の敵とはなるとも、惡人を友とすることなかれといふ事あり。（一五〇）

一。きればいよ〳〵かたく、仰げばいよ〳〵たかしといふことあり。物をきりてみてかたきと知なり。本願を信じて、殊勝なるほどもしるなり。信心おこりぬれば、たうとくありがたくよろこびも增長するなり。（一五一）

一。凡夫の身にて、後生たすかることは、たゞ易きとばかり思へり。難中之難とあれば、輙おこしがたき信なれども、佛智より易得成就したまふ事なり。往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきにあらずといへり。前住上人仰に、後生一大事と存ずる人には、御同心あるべきよし、仰られ候と云云。（一五二）

一。佛說に、信謗あるべきよし、ときをきたまへり。信ずる者ばかりにて、謗する人なくば、ときをきたまふこと、いかゞと思ふべきに、はや謗ずるものあるうへは、信せんにをいては、必往生決定との仰に候。（一五三）

一。同行のまへにては、よろこぶものなと。これ名聞なり。信のうへは、一人居てよろこぶ法なり。（一五四）

一。佛法には、世間のひまを闕てきくべし。世間のひまをあけて法を聞べきやうに思ふ事、淺間敷ことなり。佛法には、明日と云事は、あるまじき由の仰に候。たとひ大千世界に、みてらん火をもすぎゆきて、佛の御名をきくひとは、ながく不退にかなふなりと、和讃にあそばされ候。（一五五）

一。法敬申され候と云云。人より合ひ、雜談ありしなかばに、ある人、不圖座敷を立れ候。上人いかにと仰ければ、一大事の急用ありとて、たゝれけり。その後、先日はいかに不圖御立候やと問ければ、申され候。佛法の物語、約束申たる間、あるもあられずして、まかりたち候由、申され候。法義には、かやうにぞ心をかけ候べき事なる由、申され候。（一五六）

一。佛法をあるじとし、世間を客人とせよといへり。佛法のうへより、世間のことは、時にしたがひ、相ひはたらくべき事なりと云云。（一五七）

一。前々住上人へ、南殿にて、存覺御作分の聖教ちと不審なる所の候を、いかゝとて、兼縁、前々住上人へ御目にかけられ候へば、仰られ候。名人のせられ候物をば、そのまゝにて置ことなり。これが名譽なりと仰られ候なり。（一五八）

一。前々住上人へ、ある人、申され候。開山の御時のこと、申され候。これは如何やうの子細にて候と申されければ、仰られ候。われもしらぬことなり。何事も〳〵、しらぬことをも、開山のめされ候やうに、御沙汰候と、仰られ候。（一五九）

一。總別、人にはをとるまじきと思ふ心あり。此心にて世間には物もしならふなり。佛法には無我にて候上は、人にまけて信をとるべきなり。理をみて情をおるこそ、佛の御慈悲なりと仰られ候。（一六〇）

一。一心とは、彌陀をたのめば、如來の佛心と、一つになしたまふが故に、一心といふなり。（一六一）

一。或人申され候と云云。われは井の水をのむも佛法の御用なれば、水の一口も、如來上人の御用と存候由、申され候云云。（一六二）

一。蓮如上人、御病中に仰られ候。御自身、何事も、思召立候ことの、成行ほどのことはあれども、ならずといふことなし。人の信なきことばかり、かなしく御なげきは、思召の由、仰られ候由に候。（一六三）

一。同仰に、何事をも思召まゝに御沙汰あり。聖人の御一流をも、御再興候て、本堂御影堂をもたてられ、御住持をも御相續ありて、大阪殿を御建立ありて、御隱居候。然れば、われは功成名遂て身退は天の道なりといふこと、その御身の上なるべきよし、仰られ候と。（一六四）

一。同御病中に、度々仰られ候と云云。慶聞に仰られ候。賊縛の比丘は王遊に草繫を脫し、乞食の沙門は、鵝珠を死後にあらはすと云戒文を、たび〳〵仰られ候由に候。御滅後に不思議をあらはさるべきの仰に候。（一六五）

一。敵の陣に、火をとぼすを、火にてなきとは思はず、いかなる人なりとも、御ことばのとをりを申し、御詞をよみ申さば、信仰しうけたまはるべきことなりと。（一六六）

一。蓮如上人、おり〳〵仰られ候。佛法の儀をば能々人にとへ。物をば人によくとひ申せのよし、仰られ候。誰にとひ申べき由、うかゝひ申ければ、佛法だにもあらば、上下をいはず、とふべし、佛法はしりさうもなきものがしるぞと仰られ候と云云。

（一六七）

一。蓮如上人、無紋の物をきることを、御きらひ候。殊勝さうにみゆるとの仰に候。又すみの黒き衣をき候を御きらひ候。墨のくろき衣をきて、御前へ參れば、仰られ候。衣絞たゝしき殊勝の御僧の、御出候と、仰られ候て、いやわれは殊勝にもなし、たゝ彌陀の本願殊勝なる由、仰られ候。（一六八）

一。大阪殿にて、紋のある御小袖をせられ、御座の上に掛られて、をかれ候由に候。

（一六九）

一。御膳まいり候ときには、御合掌ありて、如來聖人の御用にて衣食ふよと仰られ候。（一七〇）

一。人はあがり〳〵て、おちばをしらぬなり。たゝつゝしみて、不斷そらおそろしきことゝ、毎事に付て心をもつべきの由、仰られ候。（一七一）

一。往生は、一人々々〳〵のしのぎなり。一人々々〳〵に佛法を信じて、後生をたすかることなり。餘所ごとのやうに思ふことは、且はわが身をしらぬ事なりと、圓如仰候ひき。

（一七二）

一。大阪殿にて、或人、前々〳〵住上人に申され候。今朝、曉より老たる者にて候が、參られ候。神變なることなる由、申され候へば、やがて仰られ候。信だにあれば、辛勞とはおもはぬなり。信のうへは、佛恩報謝と存じ候へば、苦勞とは思はぬなりと、仰られしと云云。老者と申は田上の了宗なりと云云。（一七三）

一。南殿にて、々人より合ひ、心中に何かとあつかひ申所へ、前々〳〵住上人御出候て、仰られ候。何事のあつかひも思ひすてゝ、一心に彌陀をたのむばかりにて、往生は佛のかたより定ましますぞ。その支證は南無阿彌陀佛よ。此うへは、何事をかあつかふべきぞと仰られ候。若不審などを申にも、多事をたゝ御一言にて、はらりと不審はれ候ひしと云云。（一七四）

一。前々〳〵住上人、おどろかす、かいこそなけれ、村雀、耳なれぬれば、なるこにぞのる。此歌を御引ありて、折々仰られ候。たゝ人は、みな耳なれ雀なりと、仰られしと云云。

（一七五）

一。心中をあらためんとまでは思ふ人はあれども、信をとらんと思ふ人はなきなりと仰られ候。（一七六）

一。蓮如上人、仰られ候。方便をわろしといふ事は、あるまじきなり。方便を以て、眞實をあらはす廢立の義、能々しるべし。彌陀、釋迦、善知識の善巧方便によりて、眞實の信をばうることなる由、仰られ候と云云。（一七七）

一。御文は、これ凡夫往生の鏡なり。御文のうへに、法門あるべきやうに思ふ人あり。大なるあやまりなりと云云。（一七八）

一。信のうへは、佛恩の稱名、退轉あるまじきことなり。或は心より、たうとく、あり難く、存ずるをば、佛恩と思ひ、たゞ念佛の申され候をば、それほどに思はざることと、大なる誤なり。自念佛の申され候こそ、佛智の御もよほし、佛恩の稱名なれと、仰事に候。（一七九）

一。蓮如上人、仰られ候。信のうへは、たうとく思ひて申す念佛も、又ふと申す念佛も、佛恩に備なり。他宗には、親のため、又何のためなんどゝて、念佛をつかふなり。聖人の御一流には、彌陀をたのむが念佛なり。そのうへの稱名は、なにともあれ、佛恩になるものなりと仰られ候云云。（一八〇）

一。或人云、前々住上人の御時、南殿とやらんにて、人蜂を殺し候に、思ひよらず念佛申され候。その時、何と思ふて、念佛をば申たると、仰られ候へば、たゞかはいやと存じ、ふと申候と申されければ、仰られ候は、信のうへは、何ともあれ、念佛申は、報謝の義と存ずべし。みな佛恩になると仰られ候。（一八一）

一、南殿にて、前々住上人、のうれんを打あげられて、御出候とて、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と仰られ候て、法敬この心しりたるかと仰られ候。なにとも存せずと申され候へば、仰られ候、これは、われは御たすけ候御うれしやたうとやと申心よと仰られ候云云。（一八二）

一。蓮如上人へ、或人、安心のとほり申され候。西國の人安心の一通を申され候へば、仰られ候。申候ごとく心中に候はゞ、それが肝要と仰られ候。（一八三）

一。同仰られ候。當時ことばにては、安心のとほり、同やうに申され候ひし。然者信治定の人に紛れて往生をしそんずべきことを、かなしく思召候由、仰られ候。

（一八四）

一、同仰に云、佛法をば、さしよせていへ〳〵と仰られ候。法敬に對し、仰られ候。信心安心といへば、愚癡のものは、またもしらぬなり。信心安心などいへば、別の樣にも思ふなり。たゞ凡夫の佛になることをしふべし。後生たすけたまへと、彌陀をたのめと云べし。何たる愚癡の衆生なりとも、聞て信をとるべし。當流にはこれよりほかの法門はなきなりと、仰られ候。安心決定抄に云、淨土の法門は第十八の願を能々こゝろうるのほかにはなきなりといへり。然ば、御文には、一心一向に佛たすけたまへと申さん衆生をば、たとひ罪業は深重なりとも、かならず彌陀如來はすくひましますべし、これすなはち、第十八の念佛往生の誓願の意なりと云へり。（一八五）

一、信をとらぬによりてわろきぞ、たゞ信をとれと仰られ候。善知識のわろしと仰られけるは信のなきことを、わろきと仰らるゝなり。然者前々住上人の或人を言語道斷わろきと仰られ候ところに、その人申され候。何事も御意のごとくと存候と、申され候へば、仰られ候。ふつとわろきなり、信のなきはわろくはなきかと仰られ

候と云々。（一八六）

一、蓮如上人仰られ候。何たる事をきこしめしても御心にはゆめ〳〵不叶なり。一人なりとも、人の信をとりたることをきこしめしたきと、御ひとりごとに仰られ候。御一生は、人に信をとらせたく思召し候由、仰られ候と云々。（一八七）

一、聖人の御流は、たのむ一念の所肝要なり。故にたのむと云ことをば、代々あそばしをかれさふらへども、委く何とたのめと云ことを、しらざりき。然ば、前々住上人の御代に、御文を御作り候て、雜行をすてゝ後生をたすけたまへと、一心に彌陀をたのめと、あきらかにしらせられ候。然ば御再興の上人にてましますものなり。（一八八）

一、よきことをしたるが、わろきことあり。わろき事をしたるが、よき事あり。よき事をしても、われは法義に付て、よき事をしたると思ひ、われと云事あれば、わろきなり。あしき事をしても、心中をひるがへし、本願に歸するは、わろき事をしたるが、よき道理になる由、仰られ候。しかれば、蓮如上人は、まいらせ心が、わろきと仰らるゝと云々。（一八九）

一。前々住上人仰られ候。思ひよらぬ者が、分に過て、物を出し候はゞ、一子細あるべきと思ふべし。わがこゝろ、ならひに、人にものをいたせば、うれしく思ふほどに、何ぞ用を云べき時は、人がさやうにするなりと仰られ候。（一九〇）

一。行さきむかひばかりみて、足もとをみねば、踏かぶるべきなり。人の上ばかりみて、わがみのうへのことをたしなまずば、一大事たるべきと仰られ候。（一九一）

一。善知識の仰成とも成まじきなんど思ふは、大なるあさましきことなり。なにたる事なりとも、仰ならば、なるべきと存ずべし。此凡夫の身が、佛になるうへは、さてなるまじきと存ずることあるべきか。然れば、道宗、近江の湖を一人してうめよと仰候とも、畏りたると申べく候。仰にて候はゞ、ならぬことあるべきかと被ㇾ申候。（一九二）

一。いたりてかたきは、石なり。至てやわらかなるは、水なり。水よく石をうがつ。心源もし徹しなば、菩提の覺道、何事か成せざらんといへる古き詞あり。いかに不信なりとも、聽聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候間。信をうべきなり。只佛法は聽聞にきはまることなりと云々。（一九三）

一。前々住上人、仰られ候。信決定の人をみて、あのごとくならでは、と思へばなるぞと、仰られ候。あのごとくになりてこそと、思ひすつること、淺間數事なり。佛法には、身をすてゝ、のぞみ求る心より、信をばうることなりと云々。（一九四）

一。人のわろき事は、能々みゆるなり。わがみのわろき事は、おぼえざるものなり。わがみにしられてわろきことあらば、能々わろければこそ身にしられ候と思ひて、心中を改むべし。たゞ人の云事をば、よく信用すべし。わがわろき事は、おぼえざるものなる由、被ㇾ仰候。（一九五）

一。世間の物語ある座敷にては、結句、法義のことを云こともあり。さやうの段は、人なみたるべし。心には油斷あるべからず。あるひは講演か、又は佛法の讃嘆など云時、一向に物をいはざること、大なる違なり。佛法讃嘆とあらん時は、いかにも心中をのこさず、あひたがひに、信不信の儀、談合申べきことなりと云々。（一九六）

一。金森の善從に、或人申され候。此間さこそ徒然に御入候ひつるらんと申ければ、善從申され候。我身は、八十にあまるまで、徒然と云ことをしらず。その故は、彌陀の御恩の難有ほどを存じ、和讃聖教等を拜見申候へば、心面白も又たうときこと

充満するゆへに、徒然なることも更になく候と、申され候由に候。（一九七）

一。善從申され候とて、前住上人、仰られ候。ある人、善の宿所へ行候處に、履をも脱候はぬに、佛法のこと申かけられ候。又或人、申され候は、履をさへぬがれ候はぬに、いそぎかやうには何と一仰候ぞと人申ければ、善從申され候は、いづるいきは入るをまたぬ浮世なり。若履をぬがれぬまに、死去候はゞ、いかゞ候べきと申され候。たゞ佛法の事をば、さしいそぎ申べきの由、仰られ候。（一九八）

一。前々住上人、善の事を仰せられ候。末だ野村殿御坊、その沙汰もなきとき、神無森をとをり、國へ下向の時、與よりおりられ候て、野村殿の方をさして、此のゝとほりにて、佛法がひらけ申べしと申され候し。人々。是は年よりて、かやうのことを申され候など申ければ、終に御坊御建立にて、御繁昌候。不思議のこと〻仰せられ候き。又た善は法然の化身なりと、世上の人申つると同仰られ候き。かの往生は八月二十五日にて候。（一九九）

一。前々住上人、東山を御出候て、何方に御座候とも、人不存候しに、此善あなたこなた尋申されければ、有所にて、御目にかゝられ候。一段御迷惑の體にて候つる間、前々住上人にも、さだめて善、かなしまれ申べきと思召し候へば、善ほかと御目にかゝられ、あらありがたや、早佛法はひらけ申べきよし申され候。終に此詞符合候。善は不思議の人なりと、蓮如上人仰られ候し由、上人仰られ候き。（二〇〇）

一。前住上人、先年大永三、蓮如上人二十五年之三月始比、御夢御覧候。御堂上壇南の方に、前々住上人御座候て、紫の御小袖をめされ候。前住上人へ對しまいらせられ、仰られ候。佛法は讃嘆談合にきはまる、能々讃嘆すべき由、仰られ候。誠に夢想とも云べきことなりと、仰られ候き。然ば、その年ごとに、讃嘆を肝要と仰られ候。それに付て、仰られ候は、佛法は一人居て悦ぶ法なり。一人居てさへたうときに、まして二人よりあはゞ、いかほどありがたかるべき。佛法をばたゞより合々々談合申せの由、仰られ候なり。（二〇一）

一。心中を改め候はんと申人、何をかまづ改め候はんと申され候。萬づわろきことを改めてと、加樣に仰られ候。いろをたてゝ、きはを立て、申出て改むべき事なりと云々。なにゝてもあれ。人のなをさるゝをきゝて、われもなをるべきと思ふて、わがとがを申いださずば、なをらぬぞと仰られ候と云々。（二〇二）

一。佛法談合のとき、物を申さぬは、信のなきゆへなり。わが心にたくみ案じて、申すべきやうに思へり。よそなる物を、たづねいだすやうなり。心にうれしきことは、その儘なるものなり。寒なれば寒、熱なれど熱と、そのまゝ、心の通りをいふなり。佛法の座敷にて物を申さぬことは、不信の故なり。又油斷といふことも、信のうへのことなるべし。細々同行により合、讃嘆申さば、油斷はあるまじきの由に候。

（二〇三）

一。前々住上人、仰られ候。一心決定のうへ、彌陀のおんたすけありたりといふは、さとりのかたにしてわろし。たのむ所にてたすけたまひ候事は、歴然に候へども、御たすけあらうずと云て、然るべきの由、仰られ候云々。一念歸命の時、不退の位に住す、これ不退の密益なり、これ涅槃分なる由仰られ候と云々。（二〇四）

一。有人膽西上人の事となり攝取不捨のことはりをしりたきと、雲居寺の阿彌陀に祈誓ありければ、夢想に、阿彌陀の今の人の袖をとらへたまふに、にげゝれども、しかととらへて、はなしたまはず。攝取と云は、にぐる者をとらへて、をきたまふやうなることゝ、こゝにて思付たり。是を引言に仰られ候。（二〇五）

一。前々住上人、御病中に、兼譽、兼綠、御前に伺候して、ある時、尋申され候。冥加と云事は何としたることにて候と申せば、仰られ候。冥加に叶と云は、彌陀をたのむ事なるよし、仰られ候と云々。（二〇六）

一。人に、佛法の事を申て、よろこばれば、われは、その悦ぶ人よりも、なをたうとく思ふべきなり。佛智をつたへ申すによりて、かやうに存せられ候事と思ひて、佛智の御方を、有難く存せらるべしとの儀に候。（二〇七）

一。御文をよみて、人に聽聞させんとも、報謝と存ずべし。一句一言も、信の上より申せば、人の信用もあり、又た報謝ともなるなり。（二〇八）

一。蓮如上人、仰られ候。彌陀の光明は、たとへば、ぬれたる物をほすに、うへよりひて、下までひるごとくなる事なり。是は日の力なり。決定の心おこるはこれ則ち他力の御所作なり。罪障は、悉く彌陀の御けしあることなるよし、仰られ候と云々。

（二〇九）

一。信心治定の人は、誰によらず、まづみればすなはちたうとくなり候。是れその人のたうときにあらず。佛智をえらるゝがゆへなれば、いよ〳〵佛智のありがたきほ

どを存すべきことなりと云々。（二一〇）

一。蓮如上人、御病中の時、仰られ候。御自身何事も、思召のこさるることなし。思召ことの、ならぬことはなきなり。それにつきて、御往生あるとも、御身は思召のこさるゝ事なし。但御兄弟の中、そのほか誰にも、信のなきをかなしく思召候。世間には、よみちのさはりといふことあり。我にをいては、往生すとも、それなし。たゞ信のなき事、これを歎き思召候由、仰られ候き。（二一一）

一。蓮如上人、あるひは人に御酒をも下され、物をも下されて、かやうの事ども、ありがたく存候て、近づけさせられ候て、佛法を御きかせ候。されば、かやうの物を下され候事も、信をとらせらるべきためと思召せば、報謝と思召候由、仰られ候と云々。

（二一二）

一。同仰に云、心得たと思ふは、心得ぬなり。心得ぬと、思ふはこゝろえたるなり。彌陀の御たすけあるべきことの、たうとさよと思が、心得たるなり。少も心得たると思ふことは。あるまじきことなりと、仰られ候と云々。されば、口傳鈔に云、されば この機のうへにたもつところの、彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは、凡夫いかでか、往生の得分あるべきやといへり。（二一三）

一。加州菅生の願生、坊主の、聖教をよまれ候をきゝて、聖教は殊勝に候へども、信が御入なく候あひだ、たうとくも御入なきと申され候。此のことを前々住上人きこしめし、菅生蓮智をめしのぼせられ、御前にて、不斷聖教をもよませられ、法義のことをも仰きかせられて、願生に仰られ候。蓮智に聖教をもよみならはせ佛法の事をも仰きかせられ候よし、仰られ候て、國へ御下し候。その後は、聖教をよまれ候へば、今こそ殊勝に候へとて、ありがたがられ候由に候。（二一四）

一　蓮如上人、幼少なる者には、まづ物をよめと仰られ候。又その後は、いかによむとも、復せずば、詮あるべからざる由、仰られ候。ちと物にこゝろもつき候へば、いかに物をよみ、聲をよくよみしりたるとも、義理をわきまへてこそと仰られ候。その後は、いかに文釋をおぼえたりとも、信がなくば、いたづらことよと仰られ候。

（二一五）

一。心中のとほりを、或人、法敬坊に申され候。御詞の如くは、覺悟仕候へども、たゞ油斷不沙汰にて、あさましきことのみに候と、申され候。その時、法敬坊申され候。

それは御詞のごとくにてはなく候。勿體なき申され事に候。御詞には油斷不沙汰なせそとこそあそばされ候へと、申され候と云々。（二一六）

一。法敬坊に、或人不審申され候。これほど佛法に御心をもいれられ候法敬坊の尼公の不信なる、いかゞの義に候由人申候へば、法敬坊申され候、不審さることなれども、これほど朝夕御文をよみ候に、驚き申さぬ心中が、なにが法敬が申分にて、聞入候べきと申され候と。（二一七）

一。順誓申され候。佛法の物語申に、かげにて申候段は、なにたるわろき事をか申べきと存じ、脇より汗たり申候。前々住上人聞召所にて申時は、わろき事をばやがて御なをしあるべきと存候あひだ、心安く存候て、物をも申さるゝ由に候。（二一八）

一。信のうへには、さのみわろき事は有まじく候。或は、人の云候などゝて、あしき事などは、あるまじく候。今度生死の結句をきりて、安樂に生せんと思はん人、いかんとしてあしきさまなる事をすべきやと仰られ候。（二一九）

一。信をば得ずして、よろこび候はんと思ふこと、たとへば、糸にて物をぬふに、あとをそのまゝにてぬへば、ぬけ候やうに、悅候はんとも、信をえぬは、いたづらごとなり。よろこべ、たすけたまはんと、仰られ候ことにてもなく候。たのむ衆生を、たすけたまはんとの本願にて候。（二二〇）

一。前々住上人、仰られ候。不審と一向しらぬとは、各別なり。知ぬことをも不審と申す事、いはれなく候。物を分別して、あれはなにと、これはいかゝなることが、不審にて候。仔細もしらずして申す事を、不審と申まぎらかし候由、仰られ候。（二二一）

一。前々住上人、仰られ候き。御本寺御坊をば、聖人御存生の時のやうに、思召され候。御自身は御留守を當座御沙汰候。然ども、佛恩を御忘候事はなく候。御齋の御法談に仰られ候き。御齋を御受用候間にも、少も御わすれ候ことは、御入なきと仰られ候き。（二二二）

一。善如上人、綽如上人、兩御代の事、前住上人仰られ候こと、兩御代は、威儀を本に御沙汰候し由、仰られし。然ば、今に御影に御入候由、仰られ候。黃裝袈裟黃衣にて候。然ば、前々住上人の御時、あまた御流にそむき候本尊以下、御風呂のたびごとに、やかせられ候。此二幅の御影をも、やかせらるべきにて、御取り出し候ひつるが、

いかゝと思召候ひつるやらん、表紙にかきつけを、よしわろしとあそばされて、とりてをかせられ候。此事を、今御思案候へば、御代のうちさへ、かやうに御ちがひ候。ましていはんや、われら式の者は違計たるべき間、一大事と存、つゝしめよとの御事に候。今思召あはせられ候由、仰られ候なり。又よしわろしとあそばされ候こと、わろしとばかりあそばし候へば、先代の御事にて候へばと思召、かやうにあそばされ候事に候しと仰られ候。又前々住上人の御時、あまた昵近のかたゞ〳〵、ちがひ申事候。彌一大事の佛法のことをば、心をとゞめて細々人に問、心得申べきの由、仰られ候き。（二二三）

一。佛法者の、少のちがひを見ては、あのうへさへ、かやうに候と思ひ、我身をふかく嗜むべきことなり。然るを、あのうへさへ御ちがひ候、まして我等は、ちがひ候はではと思ふ心、大きなるあさましきことなりと云々。（二二四）

一。佛恩を嗜むと仰候事、世間の物を嗜むなどゝいふやうなることにてはなし。信のうへに、たうとく難ゝ有存じ、よろこび申す透間に、懈怠申す時、かゝる廣大の御恩をわすれ申すことのあさましさよと、佛智にたちかへりて、難有やたうとやと思へば、御もよほしにより、念佛を申すなり。嗜むとは、これなる由の儀に候。（二二五）

一。佛法に厭足なければ、法の不思議をきくといへり。前住上人、仰られ候。たとへば。世上にわがすきこのむことをば、しりてもゝ猶能しりたう思ふに、人にとひ、いくたびも數寄たる事をば、聞てもゝ能しりたく思ふ。佛法の事は、いくたび聞ても、あかぬ事なり。しりてもゝ存たき事なり。佛法の事は、いくたびもゝ人にとひきはめ申すべき事なる由、仰られ候。（二二六）

一。世間へつかふ事は、佛の物を徒らにすることよと、おそろしく思ふべし。さりながら、佛法の方へは、いかほど物を入ても、あかぬ道理なり。又報謝にもなるべしと云々。（二二七）

一。人の辛勞もせで、德をとる上品は、彌陀をたのみて、佛になるに、すぎたることなしと、仰られ候と云々。（二二八）

一。皆人毎に、よきことを云ひもし、働もすることあれば、眞俗ともに、それをわがよき者にはやなりて、その心にて、御恩といふことは、うちわすれて、わが心本になるによりて、冥加につきて、世間佛法ともに、惡き心が必ゝ出來するなり、一大

事なりと云々。（二二九）

一。堺にて、兼縁、前々住上人へ、御文を御申候。その時、仰られ候。年もより候に、むつかしきことを申候。まづはわろきことをいふよと仰られ候。後に仰られ候。佛法だに信ぜば、いかほどなりとも、あそばして然るべき由、仰られしと云々。（二三〇）

一。同堺の御坊にて、前々住上人、夜更て蠟燭をともさせ、名號をあそばされ候。その時、仰られ候、御老體にて、御手も振ひ、御目もかすみ候へども、明日越中へくだり候と申候ほどに、かやうにあそばされ候。一日夜の事にて候間、御辛勞をかへりみられず、あそばされ候と仰られ候。しかれば御門徒のために、御身をばすてられ候。人に辛勞をもさせ候はで、たゞ信をとらせたく思召候由、被仰候。（二三一）

一。重寶の珍物を調へ、經營をして、もてなせども、食せざれば、その詮なし。同行寄合讃嘆すれども、信をとる人なければ、珍物を食せざると同事なりと云々。（二三二）

一。物にあくことはあれども、佛に成ことゝ、彌陀の御恩を喜ぶとは、あきたる事はなし。燒ども失もせぬ重寶は、南无阿彌陀佛なり。然ば、彌陀の廣大の御慈悲、殊勝なり。信ある人をみるさへたうとし、能々の御慈悲なりと云々。（二三三）

一。信決定の人は、佛法の方へは、身をかろくもつべし。佛法の御恩をば、おもくうやまふべしと云々。（二三四）

一。蓮如上人、仰られ候。宿善めでたしと云はわろし。御一流には、宿善有難と申がよく候由、仰られ候。（二三五）

一。他宗には、法にあひたるを宿緣といふ。當流には、信をとることを宿善と云。信心をうること肝要なり。さればこの御をしへには、群機をもらさぬゆへに、彌陀の敎をば、弘敎とも云也。（二三六）

一。法門をば申には、當流の心は、信心の一儀を申立られたる肝要なりと云々。（二三七）

一。前々住上人、仰られ候。佛法者には、法の威力にてなるなり。威力でなくば、なるべからずと、仰られ候。されば佛法をば學匠物しりは云ひたてず。たゞ一文不知の身も、信ある人は、佛智を加へらるゝ故に、佛力にて候間、人か信をとるなり。此故に、聖敎よみとて、しかも我はと思はん人の、佛法を云ひたることなしと仰られ候事に候。たゞなにしらねども、信心定得の人は、佛よりいはせらるゝ間、人が信を

とるとの仰に候云々。（二三八）

一。彌陀をたのめば、南無阿彌陀佛の主になるなり。南無阿彌陀佛の主に成るといふは、信心をうることなりと云々。又當流の眞實の寶と云は、南無阿彌陀佛、これ一念の信心なりと云々。（二三九）

一。一流眞宗の内にて、法をそしり、わろさまにいふ人あり。是を思ふに、他門他宗のことは、是非なし。一宗の中に、かやうの人もあるにわれら、宿善ありて、この法を信ずる身の、たうとさよと思ふべしと云々。（二四〇）

一。前々住上人には、何たるものをも、あはれみかはゆく思召候。大罪人とて、なを人を殺候こと、一段御悲候。存命もあらば、心中をなをすべしと、仰られ候て、御勘氣候ても、心中をだにもなをり候へば、やがて御宥免候と云々。（二四一）

一。安藝蓮宗、國をくつがへし、くせごとに付て、御門徒をはなされ候。前々住上人御病中に、御寺内へ參り、御詫言申候へども、とりづき候人なく候し。その折節、前々住上人、ふと仰られ候。安藝をなをさうと思よと、仰られ候。御兄弟以下、御申には、一度佛法にあだをなし申人にて候へば、いかゝと御申候へば、仰られ候。それぞとよ、淺間敷事をいふぞとよ、心中だになをらば、なにたるもの成とも、御もらしなきことに候と、仰られ候て、御赦免候ひき。その時、御前へ參り、御目にかゝられ候ときき、感涙墨にうかみ候と云々。而して御中陰の中に、蓮宗も寺内にてすぎられ候。（二四二）

一。奥州の、御一流のことを、申まぎらかし候人をきこしめして、前々住上人奥州の淨祐を御覽候て、以のほか、御腹立候て、さて〳〵開山聖人の御流を申みだすこと の、あさましさよ、にくさよと、仰られ候て、御齒をくひしめられて、さて切きざみてもあくかよ〳〵と仰られ候と云々。佛法を申みだす者をば、一段あさましきぞと仰られ候と云々。（二四三）

一。思案の頂上と申べきは、彌陀如來の、五切思惟の本願にすぎたることはなし此御思案の道理に同心せば、佛になるべし。同心申とて、別になし。機法一體の道理なりと云々。（二四四）

一。蓮如上人、仰られ候。御身、一生涯、御沙汰候事、みな佛法にて御方便調法候て、人に信を御とらせあるべき御ことはりにて候由、仰られ候云々。（二四五）

一。同御病中に、仰られ候。今わが云ことは、金言なり。かまへて〳〵、よく意得上と、仰られ候。又御詠歌の事、三十一字につゞくることにてこそあれ、是は法門にてあるぞと仰られ候と云々。（二四六）

一。愚者三人に、智者一人とて、何事も談合すれば面白ことあるぞと、前々住上人、前住上人へ御申候。是又佛法の方には、いよ〳〵肝要の御金言なりと云々。（二四七）

一。蓮如上人、順誓に對し、仰られ候、法敬と我とは兄弟よと仰られ候。法敬、申されに生るゝ者は兄、後に生るゝ者は弟よ。法敬とは兄弟よと仰られ候。信をえつれば、さきうれば、信心一致のうへは、四海みな兄弟といへり。（二四八）

一。南殿山水の御緣の牀の上にて。蓮如上人仰られ候。物の思ひたるより大にちがふと云は、極樂へまいりてのことなるべし。こゝにてありがたやたうとやと思ふは、物の數にてもなきなり。かの土へ生れての歡喜は、ことのはも有べからずと仰られしと。（二四九）

一。人はそらごと申さじと嗜むを、隨分とこそ思へ、心に僞あらじと嗜人はさのみ多くはなき者なり。又よき事はならぬまでも、世間佛法ともに、心にかけ嗜たき事なり云々。（二五〇）

一。前々住上人、仰られ候。安心決定鈔のこと、四十餘年が間、御覽候へども、御覽じあかぬと仰られ候。又金をほり出すやうなる聖教なりと仰られ候。（二五一）

一。大坂殿にて各へ對せられ、仰られ候。此間、申しゝことは、安心決定鈔のかたはしを、仰られ候由に候。然ば當流の義は、安心決定鈔の儀、吳々肝要なりと仰られ候と云々。（二五二）

一。法敬申され候。たうとむ人より、たうとがる人ぞたうとかりけると。前々住上人仰られ候。面白ことをいふよ。たうとむ體、殊勝ぶりする人は、たうとくもなし。たゞ有難やと、たうとがる人こそ、たうとけれ。面白ことを云よ。もとものことを申されと仰事に候と云々。（二五三）

一。文龜三正月十五日の夜、兼緣、夢云、前々住上人、兼緣へ御問ありて、仰られ候やう、いたづらにある事、あさましく思召候へば、稽古かたゞ〳〵せめて一卷の經をも日に一度、皆皆寄合てよみ申せと、仰られけりと云々。餘に人のむなしく月日

を送候ことを、悲しく思召候故の義に候。（二五四）

一。同夢云、同年の極月、二十八日の夜、前々住上人、御袈裟衣にて、襖障子をあけられ、御出候間、御法談聽聞申べき心にて候處に、ついたち障子のやうなる物に、御文の御詞御入候をよみ申を御覽じて、それは何ぞと御尋候間、御文に候由、申上候へば、それこそ肝要、信仰してきけと仰られけりと云々。（二五五）

一。同夢云、翌年極月二十九日夜、前々住上人、仰られ候やうは、家をば能作られて、信心をよくとり、念佛申べき由、かたく仰られ候ひけりと云々。（二五六）

一。同夢云、近年大永三正月一日の夜の夢云、野村殿南殿にて、前々住上人仰云、佛法のこと、色々仰られ候て後、田舍には雜行雜修あるをかたく申つくべしと仰られ候しと云々。（二五七）

一。同夢云、大永六正月五日夜、夢に前々住上人仰られ候。一大事にて候。今の時分がよき時にて候。こゝをとりはづしては、一大事と仰られ候。畏たりと御うけ御申候へば、たゞその畏たりと云にてはなり候まじく候。たゞ一大事にて候由仰られ候しと云々。次夜夢云、蓮誓仰候。吉崎、前々住上人に、當流の肝要の事を習申候。一流の依用なき聖教やなんどを廣くみて、御流をひがさまにとりなし候こと候。幸に肝要を拔候聖教候。是が一流の祕極なりと、吉崎にて、前々住上人に、習ひ申候と、蓮誓仰られ候しと云々。私云、夢等をしるすこと、前々住上人、世を去たまへば、今はその一言をも、大切に存候へば、かやうに夢に入て仰せ候ことの金言なること、まことの仰とも存ずるまゝ、これをしるす者なり。誠にこれは夢想とも申べき事ともにて候。總別夢は妄想なり。さりながら、權者のうへには、瑞夢とてある事なり。猶以てかやうの金言のことをは、しるすべしと云々。（二五八）

一。佛恩をたふとく候などと申は、聞にくゝ候、聊爾なり。佛恩を有難く存ずと申せば、莫大聞よく候由仰られ候と云々。御文かと申も、聊爾なり。御文を聽聞申て御文有難と申て、よき由に候。佛法の方をばいかほども尊敬申べき事と云々。（二五九）

一。佛法の讃嘆のとき、同行をかたゞくと申は平外なり。御方々と申てよき由仰ごとゝ云々。（二六〇）

一。前々住上人、仰られ候。家をつくり候とも、つぶりだにぬれずば、何ともかともつくるべし。萬事過分なることを御きらひ候。衣裳等にいたるまでもよきものき

んと思は、あさましき事なり、冥加を存じ、たゞ佛法を心にかけよと仰られ候云々。

（二六一）

一。同仰られ候。いかようの人にて候とも、佛法の家に奉公申候はゞ、昨日までは他宗にて候とも、今日は、はや佛法の御用とこゝろえべきと仰られ候。

（二六二）

一。同仰云、雨もふり、又炎天の時分は、つとめながら〳〵しく仕候はで、はやく仕て、人をたゝせ候がよく候由、仰られ候。これも御慈悲にて、人々を御いたはり候。大慈大悲の御あはれみに候。常々の仰には、御身は人に御したがひ候て、佛法を御すゝめ候と仰られ候。御門徒の身にて、御意のごとくならざること、中中あさましき事ども、中々申もことをろかに候との義に候。

（二六三）

一。將軍家義尙よりの義にて、加州一國の一揆、御門徒を放さるべきとの義にて、加州居住候御兄弟衆をもめしあげられ候。そのとき前々住上人仰られ候。加州の衆を門徒放べきと仰出され候こと、御身をきらるゝよりもかなしく思召候。何事をもしらざる尼入道の類のことまで思召ば、何とも御迷惑此事に極る由仰られ候。御門徒をやぶらるゝと申ことは、一段、善知識の御うへにてもかなしく思召候事に候。

（三六四）

一。蓮如上人、仰られ候。御門徒衆の、はじめ物をまいらせ候を、他宗に出し候義あしく候。一度も二度も受用せしめ候ひて、出し候て、然るべき之由、仰られ候。かくのごとくの子細は、存じもよらぬ事にて候。彌佛法の御用、御恩ををろそかに存ずべきことにてはなく候。慈き入候との事に候。

（二六五）

一。法敬坊、大坂殿へ下られ候ところに、前々住上人、仰られ候。御往生候とも、十年はいくべしと仰られ候ところに、なにかと申されけれども、おしかへしいくべしと仰られ候處に、御往生ありて、一年存命候處に、法敬に或人仰られ候、前々住上人仰られ候は、あひ申たるよ、その故は、一年も存命候は、命を前々住上人より御あたへ候事にて候と仰候へば、誠にさにて御入候とて、手をあはせ、ありがたき由を、申され候。それより後、前々住上人、仰られ候ごとく、十年存命候。誠に冥加に叶はれ候。不思議なる人にて候。

（二六六）

一。毎事無用なることを仕候義、冥加なき由條々、いつも仰られ候由に候。

（二六七）

一。蓮如上人、物をきこしめし候にも、如來聖人の御恩を御忘なしと仰られ候。一と口きこしめしても、思召出され候由、仰られ候と云々。（二六八）

一。御膳を御覧じても、人のくはぬ飯を、くうことよと、思召候由、仰られ候。物をすぐにきこしめすことなし。たゞ御恩のたうときことをのみ思召候と仰られ候と云々。（二六九）

一。享緣二年十二月十八日の夜、兼緣、夢に、蓮如上人、御文をあそばし下され候。その御詞に、梅干のことをいへば、みな人の口、一同にすし。一味の安心はかやうにかはるまじきなり。同一念佛無別道故の心にて候ひつるやうに、おぼえ候と云々。（二七〇）

一。佛法をすかざるがゆへに、嗜み候はずと、空善申され候へば、蓮如上人、仰られ候。それは、このまぬは、きらふにてなきかと仰られ候と云々。（二七一）

一。不法の人は、佛法を違例にすると、仰られ候。佛法の御讃嘆あれば、あら、きづまりや、とくはてよかしと思ふは、違例にするにてはなきかと、仰られ候と云々。（二七二）

一。前住上人、御病中、正月二十四日に仰られ候。前々住の、早々われにこひと左の御手にて御まねき候。あらありがたやと、くりかへし〳〵仰られ候て、御念佛御申候ほどに、各々、御心たがひ候てかやうにも仰候と存候へば、その義にてはなくして、御まどろみ候御夢に御覧せられ候由、仰られ候處にて、みな〳〵安堵候ひき。これ亦あらたなる御事なりと云々。（二七三）

一。同二十五日、兼譽兼緣に對せられ、仰られ候。前々住上人、御世を讓あそばされて以來のことども、種々仰られ候。御一身の御安心のことほり、仰られ候。一念に彌陀をたのみ申て、往生は一定と思召され候。それに付て、前住上人の御恩にて、今日までわれと思ふ心をもち候はぬが、うれしく候と仰られ候。誠にありがたくも、又は驚入申候。我人かやうに心得申てこそ、他力の信念決定申たるにてはあるべく候。彌一大事の御ことに候。（二七四）

一。嘆德の文に、親鸞聖人と申せば、その恐ある故に、祖師聖人とよみ候。又開山聖人とよみ申も、おそれを存する子細にて御入候と云々。（二七五）

一。但聖人と直に申せば、聊爾なり。此聖人と申も、聊爾歟。開山とは略しては申

へき歟との事に候。たゝ開山聖人と申してよく候と云々。（二七六）

一。嘆徳の文に、以て弘誓に託すと申すことを、以てを扱てはよまず候と云々。（二七七）

一。蓮如上人、堺の御坊に、御座の時、兼譽、御參候。御堂において、卓の上に、御文をおかせられて、一人二人乃至五人十人、參られ候人々に對して、よませられ候。その夜、蓮如上人、御物語の時、仰られ候。此間面白き事を思出て候。常に御文を一人なりとも來らん人にもよませてきかせば、有縁の人は信をとるべし。此間面白き事を思案し出たると、くれ〳〵仰られ候。さて御文肝要の御事と彌しられ候との事に候。（二七八）

一。今生の事を心に入るほど、佛法を心に入たき事にて候と、人申候へば、世間に對樣して申事は、大樣なり。たゝ佛法をふかくよろこぶべしと云々。又云、一日〳〵に、佛法はたしなみて候べし。一期とおもへば、大儀なりと、人申され候。又云、大儀なると思ふは不足なり。人として、命はいかほどもながく候ても、あかず、よろこぶべき事なりと云々。（二七九）

一。坊主は、人をさへも勸化せられ候に、我身を勸化せられぬは、あさましきことなりと云々。（二八〇）

一。道宗、前々住上人へ、御文申され候へば、仰られ候。文はとりおとし候事も候はどに、たゝ心に信をだにもとり候へば、おとし候はぬよし、仰られ候し。又あくる年あそばされて、下され候。（二八一）

一。法敬坊、申され候。佛法をかたるに、志の人を前におきて語候へば、力がありて申よき由申され候。（二八二）

一。信もなくて、大事の聖教を所持の人は、おさなき者に、つるぎをもたせ候樣に思召候。その故は、劍は重寶なれども、おさなき者もち候へば、手を切り怪我をするなり。持て能候人は、重寶になるなりと云々。（二八三）

一。前々住上人、仰られ候。たゝいまなりとも、我しねといはゞ、しぬる者は有べく候。信をとる者はあるまじきと仰られ候と云々。（二八四）

一。前々住上人、大坂殿にて、各々に對せられて、仰られ候。一念に凡夫の往生をとゞくることは、秘事秘傳にてはなきかと仰られ候と云々。（二八五）

一。御普請御造作の時、法敬、申され候。なにも不思議に、御詰衆等も御上手に御座候由、申され候へば、前々住上人、仰られ候。われは猶不思議なる事を知る。凡夫の佛に成候ことをしりたると仰られ候と。（二八六）

一。蓮如上人、善從に御かけ字をあそばされて、下され候。その後善に御尋候は、已前書つかはし候物をば、なにとしたると仰られ候。善申され候。表補繪仕り候て、箱に入れ置申候由、申され候。その時、仰られ候。それはわけもなきことをしたるよ、不斷かけおきて、そのごとく心ねをなせよと云ことにてこそあれと仰られしと。

（二八七）

一。同、仰に云、これの内に居て聽聞申す身は、とりはづしたらば佛にならふよと仰られ候と云々。有難仰に候。（二八八）

一。同、仰云、坊主衆等に對せられ、仰られ候。坊主と云者は、大罪人なりと仰られ候。その時、みな〳〵迷惑申され候。さて仰られ候。罪がふかければこそ、阿彌陀如來は御たすけあれと仰られ候と云々。（二八九）

一。毎日〳〵に御文の御金言を聽聞させられ候ことは、寶を御賜り候ことに候と云々。（二九〇）

一。開山聖人の御代、高田の二代顯智上洛の時、申され候。今度は、既に御目にかゝるまじきと存候處に不思議に御目にかゝり候と、申され候へば、それはいかにと仰られ候。舟路に難風にあひ、迷惑仕候由申され候。聖人仰られ候。それならば舟にはのらるまじき者をと、仰られ候。その後、御詞の末にて候とて一期舟にのられず候。又茸に醉申され、御目に遲くかゝられ候し時も、かくのごとく仰られしとて、一期受用なく候しと云々。かやうに仰を、信じ、ちがへ申すまじきと存せられ候事、誠にありがたき殊勝の覺悟との義に候。（二九一）

一。身あたゝかなれば、ねぶりさざし候。あさましきことなり。その覺悟にて、身をもすゞしくもち、眠をさますべきなり。身隨意なれば、佛法世法ともに、をこたり、無沙汰油斷あり。此義一大事なりと云々。（二九二）

一。信をえたらば、同行に、あらく物も申まじきなり。心和ぐべきなり。觸光柔輭の願あり。又信なければ、我になりて、詞もあらく、諍ひも必ず出來するなり。あさましゝ、能々こゝろうべしと云々。（二九三）

一、前々住上人、北國のさる御門徒の事を仰られ候。何として久く上洛なきぞと仰られ候。御前の人申され候。さる御方の御折檻候と、申され候。その時御機嫌以外惡く候て、仰られ候。開山聖人の御門徒をさやうにいふ者はあるべからず。御身一人、聊爾には思召さぬものを、なにたるものがいふべきぞと、とくとくのぼれといへと仰られ候と云々。（二九四）

一、前々住上人仰られ候。御門徒衆をあしく申事、ゆめ〳〵あるまじきなり。開山は御同行御同朋と御かしづき候に、聊爾に存ずるはくせごとの由、仰られ候。（二九五）

一、開山聖人の一大事の御客人と申すは、御門徒衆のことなりと仰られしと云々。（二九六）

一、御門徒衆、上洛候へば、前々住上人、仰られ候。寒天には、御酒等のかんをよくさせられて、路次のさむさをも忘られ候樣にと、仰られ候。又炎天の時は、酒などひやせと仰られ候。御詞を和られ候。又御門徒の上洛候を、遲く申入候事、くせごと〳〵仰られ候。御門徒衆をまたせ、おそく對面すること、くせごとの由仰られ候と云々。（二九七）

一、萬事に付て、よき事を思ひ付るは、御恩なり。惡事だに、思ひ付たるは御恩なり。捨るも、取るも、何れも〳〵御恩なりと云々。（二九八）

一、前々住上人は、御門徒の進上の物をば、御衣の下にて、御おがみ候。又佛物と思召候へば、御自身のめし物までも、御足にあたり候へば、御いたゞき候。御門徒の進上の物、則ち聖人よりの御あたへと、思召候と仰られ候しと云々。（二九九）

一、佛法には、萬事かなしきにも、かなはぬにつけても、何事に付ても、後生のたすかるべきことを思へよ。よろこび多きは佛恩なりと。（三〇〇）

一、佛法者になれ近付て、損は一つもなし。何たるおかしきこと、狂言にも、是非とも心底には佛法あるべしと思ふほどに、わがかたに德多なりと云々。（三〇一）

一、蓮如上人、大權化の再誕といふこと、その證多し。前にこれをしるせり。御詠歌に、かたみには、六字の御名をのこしをく、なからん世にはたれもちろよと候。彌陀の化身としられ候事、歴然たり云々。（三〇二）

一、蓮如上人、細々、御兄弟衆等に、御足を御みせ候。御わらぢの緒、くひ入きらり

と御入候。かやうに京田舍、御自身は御辛勞候て、佛法を仰せをかれ候由、仰られ候しと云々。（三〇三）

一。同、仰に云、惡人のまねをすべきより、信心決定の人の、まねをせよ仰らと、れ候云々。（三〇四）

一。蓮如上人、御病中、大坂殿より御上洛の時、明應八年二月十八日、さんはの淨賢處にて前住上人へ對し御申なされ候。御一流の肝要をば、御文に委くあそばしとゞめられ候間、今は申まぎらかす者もあるまじく候。此分をよく〳〵御心得ありて、御門徒中へも、仰つけられ候へと、御遺言の由に候。然ば前住上人の御安心も、御文のごとく、又諸國の御門徒も御文のごとく信をえられよとの支證のために、御判をなされ候事と云々。（三〇五）

一。存覺は、大勢至の化身なりと云々。然に、六要抄には、あるひは三心の字訓、そのほか勘得せずとあそばし、聖人の宏才仰べしと候。權化にて候へども、聖人の御作分を、かくのごとくあそばし候。誠に聖意はかりがたきむねをあらはし、自力をすて、他力を仰く御本意にも叶ひ申候物をや。かやうのことか明證にて御入候と云々。

一。註を御あらはし候事、御自身の智解を御あらはし候はんがためにてはなく候。御ことばを褒美のため仰崇のためにて候と云々。（三〇七）

一。存覺、御辭世の御詠に云、今ははや、一夜の夢となりにけり、ゆきゝあまたのかりのやど〳〵。此言を、蓮如上人、仰られ候と云々。さては釋迦の化身なり、往來娑婆の心なりと云々。我身にかけて、こゝろえば、六道輪廻めぐり〳〵て、今臨終の夕さとりをひらくべしといふ心なりと云々。（三〇八）

一。陽氣陰氣とてあり。されば、陽氣をうくる花ははやくひらくなり。陰氣とて日陰の花は、おそくさくなり。かやうに宿善も遲速あり。されば己今當の往生あり。彌陀の光明にあひて、はやくひらく人もあり、遲くひらくる人もあり。兎に角に、信不信ともに佛法を心に入て、聽聞申べきなりと云々。已今當の事、前々住上人仰られ候と云々。きのふあらはす人もあり、けふあらはす人もあり、あすあらはす人もありと、仰られしと云々。（三〇九）

一。蓮如上人、御寐下を御とほり候て、紙切のおちて候ひつるを、御覽せられ、佛法

領の物を、あだにするかやと、仰られ、兩の御手にて、御いたゞき候と云々。總じて、かみのきれなんどのやうなる物をも、佛物と思召御用ひ候へば、あだに御沙汰なく候しの由、前住上人御物語候ひき。（三一〇）

一。蓮如上人、近年仰られ候ことに候。御病中に仰られ候事、何ごとも金言なり。心をとめてきくべしと仰られ候と云々。（三一一）

一。御病中に、慶聞をめして、仰られ候。御身には、不思議なることあるを、氣をとりなをして仰らるべきと、仰られ候と云々。（三一二）

一。蓮如上人、仰られ候。世間佛法ともに、人はかろ〳〵としたるがよきと仰られ候。默したるものを、御きらひ候。物を申さぬがわろきと仰られ候。又微音に物を申を、わろしと仰られ候と云々。（三一三）

一。同　仰に云く、佛法と世體とは、たしなみによると、對句に仰られ候。又法門と庭の松とは、いふにあがると、これも對句に仰られ候と云々。（三一四）

一。兼緣、堺にて、蓮如上人御存生の時、背摺布を買得ありければ、蓮如上人、仰られ候。かやうの物は、我方にもあるものを、無用のかひごとよと仰られ候。兼緣、自物にてとり申たると答申候處に、仰られ候。それは我物かと仰られ候。ことゞく佛物、如來聖人の御用にもるゝことはあるまじく候。（三一五）

一。蓮如上人、兼緣へ物を下され候を、冥加なきと御固辭さふらひければ、仰られ候。つかはされ候物をば、たゞ取て信をよくとれ。信なくば冥加なきとて、佛の物を受ぬやうなれども、それは曲もなきことなり。我するとおもふかとよ。みな御用なり。何事か御用にもるゝことや候べきと、仰られ候と云々。（三一六）

右合三百十六箇條也

實如御判

蓮如上人御一代記聞書終

天正十三年四月十九日書寫之者也

安心決定鈔 本

淨土眞宗の行者は、まづ本願のおこりを存知すべきなり。弘誓は四十八なれども、第十八の願を本意とす。餘の四十七は、この願を信ぜしめんがためなり。この願を禮讃に釋したまふに、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺といへり。この文のこゝろは、十方衆生願行成就して往生せば、われも佛にならん。衆生往生せずば、われ正覺をとらじとなり。かるがゆへに、佛の正覺は、われらが往生すると、せざるとによるべきなり。しかるに十方衆生いまだ往生せざるさきに、正覺を成ずることは、こゝろえがたきことなり。しかれども、佛は衆生にかはりて願と行とを圓滿して、われらが往生をすでにしたゝめたまふなり。十方衆生の願行圓滿して、往生成就せしとき、機法一體の南無阿彌陀佛の正覺を、成じたまひしなり。かるがゆへに、佛の正覺のほかには、凡夫の往生はなきなり。十方衆生の往生の成就せしとき佛も正覺をなるゆへに、佛の正覺なりしと、われらが往生

の成就せしとは同時なり、佛のかたよりは往生を成ぜしかども、衆生がこのことはうをしること不同なれば、すでに往生するひともあり、いま往生するひともあり、當に往生すべきひともあり。機によりて三世は不同なれども、彌陀のかはりて成就せし正覺の一念のほかは、さらに機より、いさゝかもそふることはなきなり。たとへば、日いづれば、刹那に十方のやみことゞくはれ、月いづれば、法界の水同時にかげをうつすがごとし。月はいでゝかげを水にやどす。日はいでゝやみのはれぬことあるべからず。かるがゆへに日はいでたるかいでざるかをおもふべし。やみはれざるかはれたるかをうたがふべからず。佛は正覺なりたまへるか、いまだなりたまはざるかを分別すべし。凡夫の往生をうべきか、うべからざるかをうたがふべからず。衆生往生せずば佛にならじと、ちかひたまひし法藏比丘の、十劫にすでに成佛したまへり。佛體よりはすでに成じたまひたりける往生を、つたなく今日までしらずして、むなしく流轉しけるなり。かるがゆへに般舟讃には、おほきにすべからく慚愧すべし、釋迦如來は、まことにこれ慈悲の父母なりといへり。慚愧の二字をば、天にはぢ、人にはづとも釋し、自にはぢ、他にはづとも釋せり。なにごとをお

ほきにはづべしといふぞといふに、彌陀は兆載永劫のあひだ、無善の凡夫にかはりて、願行をはげまし、釋尊は五百塵點劫のむかしより、八千返まで世にいでて、かゝる不思議の誓願をわれらにしらせんとしたまふを、いまゝできかざることをはづべし。機より成ずる大小乘の行ならば、法はたへなれども機がおよばねはちからなしといふこともありぬべし。いまの他方の願行は、行は佛體にはげみて、功を無善のわれらにゆづりて、誘法闡提の機、法滅百歳の機までも成せずといふことなき功德なり。このことはりを慇懃につげたまふことを、信せずしらざることを、おほきにはづべしといふなり。三千大千世界に、芥子ばかりも、釋尊の身命をすてたまはぬところはなし。みなこれ他力を信せざるわれらに、信心をおこさしめんと、かはりて難行苦行して、緣をむすび、刧をかさねたまひしなり。この廣大の御こゝろざしをしらざることを、おほきにはぢはづべしといふなり。このこゝろをあらはさんとて、種々の方便をもて、われらが無上の信心を發起すと釋せり。無上の信心といふは、他力の三信なり。つきに種々の方便をとく敎文、ひとつにあらずといふは、諸經隨機の得益なり。凡夫は左右なく他力の信心を獲得することかたし。しかるに自力の成じがたきことをきくとき、他力の易行も信せられ、聖道の難行をきくに、淨土の修しやすきことも信せらるゝなり。おほよそ佛のかたよりは、なにのわづらひもなく成就したまへる往生を、われら煩惱にくるはされて、ひさしく流轉して、不思議の佛智を信受せず。かるがゆへに三世の衆生の歸命の念も、正覺の一念にかへり、十方の有情の稱念の心も、正覺の一念にかへる。さらに機において、一稱一念もとどまることなし。名體不二の弘願の行なるがゆへに、名號すなはち正覺の全體なり。正覺の體なるがゆへに、十方衆生の往生の體なり。往生の體なるがゆへに、われらが願行ことゝく具足せずといふことなし。かるがゆへに玄義にいはく、いまこの觀經の下品下生の、十聲の稱佛には、すなはち十願ありて十行具足せり。いかんが具足せる。南無といふはすなはちこれ歸命、またこれ發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふはすなはちこれその行なり。この義をもてのゆへに、かならず往生をうといへり。下品下生の失念の稱念に、願行具足することは、さらに機の願行にあらずとしるべし。法藏菩薩の五刧兆載の願行の凡夫の願行を成ずるゆへなり。阿彌陀佛の凡夫の願行を成せしいはれを領解するを、三心ともいひ、三信

ともとき、信心ともいふなり。阿彌陀佛は凡夫の願行を、名に成せしゆへを、口業にあらはすを南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに領解も機にはといまらず。領解すれば佛願の體にかへる。名號も機にはといまらず。となふれば、やがて弘願にかへる。かるがゆへに淨土の法門は、第十八の願をよく〳〵こゝろうるほかにはなきなり。如無量壽經四十八願中、唯明專念彌陀名號得生とも釋し、又此經定散文中、唯標專念彌陀名號得生とも釋して、三經ともに、たゞこの本願をあらはすなり。第十八の願をこゝろうるといふは、名號をこゝろうるなり。名號をこゝろうるといふは、阿彌陀佛の衆生にかはりて、願行を成就して、凡夫の往生、機にさきだちて成就せしきざみ、十方衆生の往生を、正覺の體とせしことを、領解するなり。かるがゆへに、念佛の行者、名號をきかば、あははやわが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずは、正覺とらじとちかひたまひし、法藏菩薩の正覺の果名なるがゆへにとおもふべし。また彌陀佛の形像をおがみたてまつらば、あははやわが往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずば、正覺とらじとちかひたまひし法藏菩薩の成正覺の御すがたなるゆへにとおもふべし。また極樂といふ名をきかば、あはわ

が往生すべきところを、成就したまひにけり。衆生往生せずば正覺とらじとちかひたまひし、法藏比丘の、成就したまへる極樂よとおもふべし。機をいへば、佛法と世俗との二種の善根なき、唯知作惡の機に、佛體より、恒沙塵數の功德を、成就するゆへに、われらがごとくなる、愚痴惡見の衆生のための、樂のきはまりなるがゆへに、極樂といふなり。本願を信じ、名號をとなふるも、よそなる佛の功德とおもふて、名號に功をいれなば、などか往生をとげざらんなんどおもはんは、かなしかるべきことなり。ひしとわれらが往生成就せしすがたを、南無阿彌陀佛とはいひけるといふ、信心おこりぬれば、佛體すなはちわれらが往生の行なるがゆへに、一聲のところに往生を決定するなり。阿彌陀佛といふ名號をきかば、やがてわが往生とこゝろえ、わが往生はすなはち佛の正覺なりとこゝろうべし。彌陀佛は正覺成したまへるか、いまだ成じたまはざるかをばうたがふとも、わが往生の成するか成せざるかをば、うたがふべからず。一衆生のうへにも往生せぬことあらば、ゆめ〳〵佛は正覺なりたまふべからず。こゝをこゝろうるを、第十八の願をおもひわくとはいふなり。まことに往生せんとおもはゝ、衆生こそ願をもおこし、行をもはげむべきに、

願行は菩薩のところにはげみて、感果はわれらがところに成ず。世間、出世の因果のことはりに超異せり。和尚はこれを、別異の弘願とほめたまへり。衆生にかはりて願行を成ずること、常沒の衆生をさきとして、善人におよぶまで、一衆生のうへにもおよばざるところあらば、大悲の願満足すべからず。面々衆生の機ごとに願行成就せしとき、佛は正覺を成し、凡夫は往生せしなり。かゝる不思議の名號もしきこえざるところあらば、正覺とらじとちかひたまへり。われらすでに阿彌陀といふ名號をきく。しるべし、われらが往生すでに成せりといふことを、きくといふは、たゞおほやうに名號をきくにあらず。本願他力の不思議をきゝて、うたがはざるをきくとはいふなり。御名をきくも本願より成じてきく。一向に他力なり。たとひ凡夫の往生成じたまひたりとも、その願成就したまへるみなをきかずば、いかでかその願成せりとしるべき。かるがゆへに名號をきゝても、形像を拜しても、わが往生を成じたまへる御名ときゝ、われらをわたさずは、佛にならじとちかひたまひし、法藏の誓願むなしからずして正覺成じたまへる御すがたとおもはざらんは、きくともきかざるがごとし、みるともみざるがごとし。平等覺經にのたまはく、淨土の法門をとくをきゝて、歡喜踊躍し、身の毛いよだつといふは、そゞろによろこぶにあらず。わが出離の行をはげまんとすれば、道心もなく、智慧もなし、智目行足かけたる身なれば、たゞ三惡の火坑にしづむべき身なるを、願も行も佛體より成じて、機法一體の正覺成じたまひけることの、うれしさよとおもふとき、歡喜のあまり、おどりあがるほどにうれしきなり。大經に、爾時聞一念とも、聞名歡喜讚ともいふは、このこゝろなり。よそにさしのけてはなくして、やがてわが往生すでに成じたる名號、わが往生したる御すがたとみるを、名號をきくとも、形像をみるともいふなり。このことはりをこゝろうるを、本願を信知すとはいふなり。念佛三昧において信心決定せんひとは、身も南無阿彌陀佛、こゝろも南無阿彌陀佛なりとおもふべきなり。ひとの身をば、地水火風の四大よりあひて成ず。小乘には極微の所成といへり。身を極微にくだきてみるとも、報佛の功德のそまぬところはあるべからず、されば、機法一體の身も南無阿彌陀佛なり。こゝろには、煩惱隨煩惱等具足せり。刹那々々に生滅す。こゝろを刹那にちはりてみるとも、彌陀の願行の遍せぬところなければ、機法一體にして、こゝろも南無阿彌陀

佛なり。彌陀大悲のむねのうちに、かの常沒の衆生みち〳〵たるゆへに、機法一體にして南無阿彌陀佛なり。われらが迷倒のこゝろのそこには、法界身の佛の功德みち〳〵たまへるゆへに、また機法一體にして南無阿彌陀佛なり。淨土の依正二報もまたしかなり。依報は寶樹の葉ひとつも、極惡のわれらがためならぬことなければ、機法一體にして南無阿彌陀佛なり。正法は眉間の白毫相より、千輻輪のあなうらにいたるまで、常沒の衆生の願行成就せる御かたちなるゆへに、機法一體にして南無阿彌陀佛なり。われらが色心二法、三業四威儀、すべて報佛の功德のいたらぬところなければ、南無の機と、阿彌陀佛の、片時もはなるゝことなければ、念々みな南無阿彌陀佛なり。さればいづるいきいるいきも、佛の功德をはなるゝ時分なければ、みな南無阿彌陀佛の體なり。縛曰羅胎地といひしひとは、常氷觀をなしゝかば、こゝろにひかれて身もひとつの池となりき。その法にそみぬれば、色心正法それになりかへることなり。念佛三昧の領解ひらけなば、身もこゝろも南無阿彌陀佛になりかへりて、その領解ことばにあらはるゝとき、南無阿彌陀佛とまふすが、うるはしき弘願の念佛にてあるなり。念佛といふはかならずしもくちに南無阿彌陀佛ととなふるのみにあらず。阿彌陀佛の功德、われらが南無の機において、十劫正覺の刹那より成じいりたまひけるものをといふ信心のおこるを、念佛といふなり。さてこの領解をことばにあらはせば、南無阿彌陀佛といふにてあるなり。この佛の心は、大慈悲を本とするゆへに、愚鈍の衆生をわたしたまふを、さきとするゆへに、名體不二の正覺をとなへましますゆへに、佛體も名におもむき、名に體の功德を具足するゆへに、なにとはかゞしくしらねども、平信のひともとなふれば往生するなり。されども下根の凡夫なるゆへに、そぞろにひら信じもかなふべからず。そのことはりをきゝひらくとき、信心はおこるなり。念佛をまふすとも、往生せぬを、名義に相應せざるゆへにとこそ、曇鸞も釋したまへ。名義に相應すといふは、阿彌陀佛の功德力にて、われらは往生すべしとおもふてとなふるなり。領解の信心を、ことばにあらはすゆへに、南無阿彌陀佛の六字をよくこゝろうるを、三心といふなり。かるがゆへに、佛の功德ひしとわが身に成じたりとおもふて、くちに南無阿彌陀佛ととなふるが、三心具足の念佛にてあるなり。自力のひとの念佛は、佛をばさしのけて西方にをき、わが身をばしら〳〵とある凡夫にて、とき〳〵こゝろに佛の他力をお

もひ、名號をとなふるゆへに、佛と衆生とうと〳〵しくして、いさゝか道心おこりたるときは、往生もちかくおぼえ、念佛もものうく道心もさめたるときは、往生もきはめて不定なり。凡夫のこゝろとしては、道心をおこすこともまれなれば、つねには往生不定の身なり。もしや〳〵とまてとも、往生は臨終までおもひさだむることなきがゆへに、くちにときどき名號をとなふれども、たのみがたき往生なり。たとへば、ときゞひとに見參みやつかひするにたり。そのゆへは、いかにしてか佛の御こゝろにかなはんずるとおもひ、佛に追從して、往生の御恩をも、かふむらんずるやうにおもふほどに、機の安心と、佛の大悲とが、はなれ〳〵にて、つねに佛にうとき身なり。このくらゐにては、まことにきはめて往生不定なり。念佛三昧といふは、報佛彌陀の大悲の願行は、もとよりまよひの衆生の、心想のうちにいりたまへり。しらずして、佛體より、機法一體の南無阿彌陀佛の正覺に、成じたまふことなりと信知するなり。願行みな、佛體より成ずることなるがゆへに、おがむ手、となふるくち、信ずるこゝろ、みな他力なりといふなり。かるがゆへに、機法一體の念佛三昧をあらはして、第八の觀には、諸佛如來、是法界身、入一切衆生心想中ととく。これを釋するに、法界といふは、所化の境、すなはち衆生界なりといへり。定善の衆生ともいはず、道心の衆生ともとかず、法界の衆生を所化とす。法界といふは、所化の境、衆生界なりと釋するこれなり。まさしくは、こゝろいたるがゆへに、身もいたるといへり。彌陀の身心の功德、法界衆生の身のうち、こゝろのそこにいりみつゆへに、入一切衆生心想中ととくなり。こゝを信ずるを、念佛衆生といふなり。また眞身觀には、念佛衆生の三業と、彌陀如來の三業と、あひはなれずと釋せり。佛の正覺は、衆生の往生より成じ、衆生の往生は、佛の正覺より成ずるゆへに、衆生の三業と、佛の三業と、またく一體なり。佛の正覺のほかに、衆生の往生もなく、願も行もみな佛體より成じたまへりとしりきくを、念佛の衆生といひ、この信心のことばにあらはるゝを、南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに、念佛の行者になりぬれば、いかに佛をはなれんとおもふとも、微塵のへだてもなきことなり。佛のかたより、機法一體の南無阿彌陀佛の正覺を、成じたまひたりけるゆへに、なにとはかゞしからぬ、下々品の失念のくらゐの稱名も、往生するは、となふるときはじめて往生するにはあらず、極惡の機のために、もとより成じたまへる往生を、となへあらはは

すなり。また大經の、三寶滅盡の衆生の、三寶の名字をだにも、はかゞしくきかぬほどの機が、一念となへて往生するも、となふるときはじめて往生の成ずるにあらず、佛體より成せし願行の薫修か、一聲稱佛のところにあらはれて、往生の一大事を成ずるなり。かくこゝろうれば、われらは、今日今時往生すとも、わがこゝろのかしこくて、念佛をもまふし、他力をも信ずるこゝろの功にあらず。勇猛專精にはげみたまひし佛の功德、十劫正覺の刹那に、われらにおいて成じたまひたりけるが、あらはれもてゆくなり。覺體の功德は、同時に十方衆生のうへに成せしかども、昨日あらはすひともあり、今日あらはすひともあり。已後當の三世の往生は、不同なれども、弘願正因のあらはれもてゆくゆへに、佛の願行のほかには、別に機に、信心ひとつも、行ひとつも、くはふることはなきなり。念佛といふは、このことはりを念じ、行といふは、このうれしさを禮拜恭敬するゆへに、佛の正覺と、衆生の行とが一體にしてはなれぬなり。したしといふもなをおろかなり。ちかしといふもなをとをし、一體のうちにおいて、能念所念を、體のうちに論ずるなりとしるべし。

安心決定鈔本　終

安心決定鈔末

往生論に、如來淨華衆、正覺華化生といへり。他力の大信心をえたるひとを、淨華の衆とはいふなり。これは、おなじく正覺のはなより生ずるなり。正覺華といふは、衆生の往生を、かけものにして、もし生ぜずば、正覺をとらじと、ちかひたまひし法藏菩薩の、十方衆生の願行成就せしとき、機法一體の正覺、成じたまへる、慈悲の御こゝろのあらはれたまへる心蓮華を、正覺華とはいふなり。これを第七の觀には除苦惱法ととき。下々品には、五逆の衆生を來迎する蓮華ととくなり。佛心を蓮華とたとふることは、凡夫の煩惱の泥濁に、そまざるさとりなるゆへなり。なにとして、佛心の蓮華よりは生ずるぞといふに、曇鸞この文を、同一に念佛して、別の道なきがゆへにと、釋したまへり。とをく通ずるに、四海みな兄弟なり。善惡機ことに、九品くらゐかはれども、ともに他方の願行をたのみ、おなじく正覺の體に歸することは、かはらざるがゆへに、同一念佛して別の道なきがゆへにといへり。またさきに往生するひとも、他力の願行に歸して往生し、のちに往生するひとも、

正覺の一念に歸して往生す。心蓮華のうちにいたるゆへに、四海みな兄弟なりといふなり。佛身をみるものは、佛心をみたてまつる。佛心といふは、大慈悲これなり。佛心はわれらを愍念したまふこと、骨髓にとほりてそみつきたまへり。たとへば、火の炭におこりつきたるがごとし。はなたんとするとも、はなるべからず。攝取の心光われらをてらして、身より髓にとほる。心は三毒煩惱の心までも、佛の功德のそみつかぬところはなし。機法もとより一體なるところを、南無阿彌陀佛といふなり。この信心おこりぬるうへは、口業にはたとひ ときく〳〵念佛すとも、常念佛の衆生にてあるべきなり。三緣のなかに、口につねに、身につねにと釋する、このこゝろなり。佛の三業の功德を信ずるゆへに、衆生の三業、如來の佛智と一體にして、佛の長時修の功德、衆生の身口意にあらはるゝところなり。また唐朝に、傅大士とて、ゆゝしく大乘をもさとり、外典にも達して、たふときひとおはしき。そのことばにいはく、あさな〳〵佛とともにおき、ゆふな〳〵佛をいだきてふすといへり。これは聖道の通法門の、眞如の理佛をさして佛といふといへども、修得のかたよりおもへば、すこしもたがふまじきなり。攝取の心光に照護せられたてまつらば、行者もまたかくのごとし。あさな〳〵報佛の功德をもちながらおき、ゆふな〳〵彌陀の佛智とともにふす。うとからん佛の功德は、機にとをければいかゝはせん。眞如法性の理はちかけれども、さとりなき機にはちからおよばず。わがちからも、さとりもいらぬ、他力の願行を、ひさしく身にたもちながら、よしなき自力の執心にほだされて、むなしく流轉の故郷にかへらんこと、かへすがへすもかなしかるべきことなり。釋尊もいかばかりか、往來娑婆八千返の甲斐なきことをあはれみ、彌陀もいかばかりか、難化能化のしるしなきことを、かなしみたまふらん。もし一人なりとも、かゝる不思議の願行を信ずることあらば、まことに佛恩を報ずるなるべし。かるがゆへに、安樂集には、すでに他力の乘ずべきみちあり。つたなく自力にかゝはりて、いたづらに火宅にあらんことを、おもはざれといへり。このことまことなるかな。自力のひがおもひをあらためて、他力を信ずるところを、ゆめ〳〵まよひをひるがへして、本家にかへれともいひ、歸去來、魔郷にはとゞまるべからずとも釋するなり。また法事讃に、極樂無爲涅槃界、隨緣雜善恐難生、故使如來選要法、敎念彌陀專復專といへり。この文のこゝろは、極樂は、無爲無漏のさかひなれば、有爲有漏の雜善にて

は、おそらくはむまれがたし。無爲無漏の念佛三昧に歸してぞ、無爲常住の報土に
は生ずべきといふなり。まづ隨緣の雜善といふは、自力の行をさすなり。眞實に佛
法につきて、領解もあり、信心もおこることはなくして、わがしたしきものゝ律僧
にてあれば、戒は世にたふときことなりといひ、あるひは今生のいのりのために、
眞言をせさすれば、結緣もむなしからず、眞言たふとしなんどいふ體に、便宜にひか
れ、緣にしたがひて、修する善なるがゆへに、隨緣の雜善ときらはるゝなり。このく
らゐならば、たとひ念佛の行なりとも、自力の念佛は、隨緣の雜善にひとしかるべ
き歟。うちまかせて、ひとのおもへる念佛は、こゝろには、淨土の依正をも觀念し、
くちには、名號をもとなふるときばかり、念佛はあり、念せず、となへざるときは、
念佛もなしとおもへり。このくらゐの念佛ならば、無爲常住の念佛とはいひがたし。
となふるときはいでき、となへざるときはうせば、まことに無常轉變の念佛なり。
無爲とは、なすことなしとかけり。小乘には三無爲といへり。そのなかに、虛空無爲
といふは、虛空はうすることもなく、はじめていでくることもなし。天然なること
はりなり。大乘には、眞如法性等の、常住不變の理を、無爲と談ずるなり。序題門に、
法身常住比若虛空と釋せらるゝも、かのくにの常住の益をあらはすなり。かるがゆ
へに、極樂を無爲常住の國といふは、凡夫のなすによりて、うせもし、いできもする
ことのなきなり。念佛三昧もまたかくのごとし。衆生の念ずればとて、はじめてい
でき、わするればとて、うする法にあらず。よく〳〵、このことはりをこゝろうべき
なり。おほよそ、念佛といふは、佛を念ずとなり。佛を念ずといふは、佛の大願業力
をもて衆生の生死のきづなをきりて、不退の報土に生ずべきいはれを、成就したま
へる功德を念佛して、歸命の心本願に乘じぬれば、衆生の三業、佛體にもたれて、佛
果の正覺にのぼる。かるがゆへに、いまいふところの念佛三昧といふは、われらが
稱禮念すれども、自の行にあらず、たゞこれ、阿彌陀佛の行を行ずるなりとこゝろ
うべし。大願といふは、五劫思惟の本願業力といふは、兆載永劫の行業、久至十劫
正覺ののちの、佛果の萬德なり。この願行の功德は、ひとへに末來惡世の無智の
われらがために、かはりてはげみおこなひたまひて、十方衆生のうへごとに、生死
のきづなきれはてゝ、不退の報土に願行圓滿せしとき、機法一體の正覺を成じた
まひき。この正覺の體を念ずるを、念佛三昧といふ。ゆへに、さらに機の三業にはと

いむべからず。うちまかせては、機よりしてこそ、生死のきづなをきるべき行をもはげみ、報土にいるべき願行をもいとなむべきに、修因感果の道理にこえたる、別異の弘願なるゆへに、佛の大願業力をもて、凡夫の往生は、したゝめ成じたまひけることの、かたじけなさよと歸命すれば、衆生の三業は、能業となりて、うへにのせられ、彌陀の願力は、所業となりて、われらが報佛報土へ生ずべきのりものとなりたまふなり。かるがゆへに、歸命の心、本願に乘じぬれば、三業みな佛體にもたるといふなり。佛の願行は、さらに他のことにあらず、一向に、われらが往生の願行の體なるがゆへに、佛果の正覺のほかに、往生の行を論せざるなり。このいはれをきゝながら、佛の正覺をば、おほやけものなるやうにて、さておいて、いかゞして道心をもおこし、行をもいさぎよくして、往生せんずるとおもはんは、かなしかるべき執心なり。佛の正覺すなはち、衆生の往生を成せる體なれば、佛體すなはち往生の願なり、行なり。この行は、衆生の念不念によるべき行にあらず。かるがゆへに、佛果の正覺のほかに、往生の行を論せずといふなり。この正覺を、心に領解するを三心とも、信心ともいふ。この機法一體の正覺は、名體不二なるゆへに、これをくちにとなふるを、南無阿彌陀佛といふ。かるがゆへに、心に信ずるも正覺の一念にかへり、くちにとなふるも正覺の一念にかへる。たとひ千聲となふるとも、正覺の一念をばいづべからず。またものぐさく懈怠ならんときは、となへず念せずして夜をあかし日をくらすとも、他力の信心本願にのりぬなば、佛體すなはち長時の行なれば、さらにたゆむことなく間斷なき行體なるゆへに、名號すなはち無爲常住なりとこゝろうるなり。阿彌陀佛すなはちこれその行といへるは、このこゝろなり。まだいまいふところの念佛三昧は、われらが稱禮念すれども、自の行にはあらず。たゞこれ、阿彌陀佛の行を行するなりといふは、歸命の心本願にのりて、三業みな佛體のうへに乘じぬれば、身も佛をはなれたる身にあらず、こゝろも佛をはなれたるこゝろにあらず。くちに念ずるも、機法一體の正覺のかたじけなさを稱し、禮するも他力の恩德の身にあまるうれしさを禮するゆへに、われらは稱すれども、念ずれども、機の功をつのるにあらず、たゞこれ、阿彌陀佛の凡夫の行を成せしところを、行ずるなりといふなり。佛體無爲無漏なり。依正無爲無漏なり。されば、名體不二のゆへに、名號もまた無爲無漏なり。かるがゆへに念佛三昧になりかへりて、もはら

にして、またもはらなれといふなり。専の字二重なり。まづ雑行をすてゝ、正行をとる。これ一重の専なり。そのうへに、助業をさしおきて正定業になりかへる。また一重の専なり。またはじめの専は、一行なり。のちの専は、一心なり。一行一心なるを、専復専といふなり。この正定業の體は、機の三業のくらゐの念佛にあらず。時節の久近をとはず。行住坐臥をえらばず。攝取不捨の佛體、すなはち凡夫往生の正定業なるゆへに、名號も名體不二のゆへに、正定業なり。この機法一體の南無阿彌陀佛になりかへるを、念佛三昧といふ。かるがゆへに、機の念不念によらず、佛の無礙智より、機法一體に成ずるゆへに、名號すはなち無爲無漏なり。このこゝろをあらはして、極樂無爲といふなり。念佛三昧といふは、機の念を本とするにあらず。佛の大悲の衆生を攝取したまへることを念ずるなり。佛の功德ももとより衆生のところに、機法一體に成せるゆへに、歸命の心のおこるといふも、はじめて歸するにあらず。機法一體に成せし功德が、衆生の意業にうかびいづるなり。南無阿彌陀佛と稱するも、稱して佛體にちかづくにあらず。機法一體の正覺の功德、衆生の口業にあらはるゝなり。信ずれば佛體にかへり、稱すれば佛體にかへるなり。

一、自力他力日輪の事。

自力にて往生せんとおもふは、闇夜に、わがまなこのちからにて、ものをみんとおもはんがごとし。さらにかなふべからず。日輪のひかりを、わがまなこにうけとりて、所縁の境をてらしみる、これしかしながら、日輪のちからなり。たゞし、日のてらす因ありとも、生盲のものはみるべからず。またまなこひらきたる縁ありとも、闇夜にはみるべからず。日とまなこと、因縁和合して、ものをみるがごとし。歸命の一念に、本願の功德をうけとりて、往生の大事をとぐべきものなり。歸命の心はまなこのごとし。攝取のひかりは日のごとし。南無はすなはち歸命、これまなこなり。阿彌陀佛はすなはち他力弘願の法體、これ日輪なり。よて本願の功德をうけとることは、宿善の機、南無と歸命して、阿彌陀佛ととなふる六字のうちに、萬行萬善恒沙の功德、たゞ一聲に成就するなり。かるがゆへに。ほかに、功德善根をもとむべからず。

一、四種往生の事。

四種の往生といふは、一には正念往生。阿彌陀經に、心不轉倒即得往生ととく

これなり。二には狂亂往生。觀經の下品にときてのたまはく、十惡破戒五逆、はじめは臨終狂亂して、手に虛空をにぎり、身よりしろきあせをながし、地獄の猛火現せしかども、善知識にあふて、もしは一聲、もしは一念、もしは十聲にて往生す。三には無記往生。これは群疑論にみへたり。このひと、いまだ無記ならざりしとき、攝取の光明にてらされ、歸命の信心おこりたりしかども、生死の身をうけしより、しかるべき業因にて、無記になりたれども、往生は、他力の佛智にひかれてうたがひなし。たとへば、睡眠したれども、月のひかりはてらすがごとし。無記心のなかにも、攝取のひかりたえざれば、ひかりのちからにて、無記の心ながら往生するなり。因果の理をしらざるものは、なにしに佛の御ちからにて、すこしきほどの無記にもなしたまふぞと難じ、また無記ならんほどにては、よも往生せじなんどおもふは、それはくはしく聖教をしらず、因果の道理にまどひ、佛智の不思議をうたがふゆへなり。四には意念往生。これは法華經にみへたり。ころにいだしてとなへずとも、こゝろに念じて往生するなり。この四種の往生は、黑谷の上人の御料簡なり。よのつねには、くはしくこのことをしらずして、臨終に念佛まふさず、また無記ならんは、往生せずといひ、名號をとなへたらば、往生とおもふは、さることもあらんずれども、それはなをおほやうなり。五百の長者の子は、臨終の佛名をとなへたりしかども、往生せざりしやうに、臨終にころにいだすとも、歸命の信心おこらざらんものは、人天に生ずべしと、守護國界經にみへたり。されば、たゞさきの四人ながら、歸命の心おこりたらば、みな往生しけるにてあるべし。

一。天親菩薩の往生論に、歸命盡十方無碍光如來といへり。ふかき法も、あさきたとへにて、こゝろえらるべし。たとへば、日は觀音なり。その觀音のひかりをば、みどり子よりまなこにえたれとも、いとけなきときはしらず。すこしこざかしくなりて、自力にてわが目のひかりにてこそあれとおもひたらんに、よく日輪のこゝろをしりたらんひと、おのが目のひかりならば、よるこそものをみるべけれ、すみやかに、もとの日光に歸すべしといはんを信じて、日天のひかりに歸しつるものならば、わがまなこのひかり、やがて觀音のひかりなるがごとし。歸命の義もまたかくのごとし。しらざるときのいのちも、阿彌陀の御いのちなりけれども、いとけなきときはしらず、すこしこざかしく、自力になりて、わがいのちとおもひたらんおり、善知識

もとの阿彌陀のいのちへ歸せよとおしふるをきゝて、歸命無量壽覺しつれば、わがいのち無量壽なりと信ずるなり。かくのごとく歸命するを、正念をうとは釋するなり。すでに、歸命して正念をえたらんものは、たとひかせおもくして、この歸命ののち無記になるとも、往生すべし。すでに群疑論に、無記の心ながら往生すといふは、攝取の光明にてらされぬれば、その無記の心はやみて、慶喜心にて往生すといへり。また觀經の下三品は、いまだ歸命せざりしときは、地獄の相現して狂亂せしかども、知識にすゝめられて歸命せしかば、往生しき。また平生に歸命しつるひとは、いきながら攝取の益にあつかるゆへに、臨終にも心轉倒せずして、往生す。これを正念往生となづくるなり。また歸命の信心おこりぬるうへは、たとひこころにいださずしてをはるとも、なを往生すべしと、法鼓經にみへたり。これを意念往生といふなり。されば、とにもかくにも、他力不思議の信心決定しぬれば、往生うたがふべからざるものなり。

一。觀佛三昧經にのたまはく、長者あり、一人のむすめあり。最後の處分に閻浮檀金をあたふ。穢物につゝみて泥中にうづみておく。國王、群臣をつかはしてうばひとらんとす。この泥をばふみゆけども、しらずしてかへる。そのゝち、この女人とりいだしてあきなふに、さきよりもなを富貴になる。これはこれたとへなり。國王といふは、わが身の心王にたとふ。たからといふは、諸善にたとふ。群臣といふは、六賊にたとふ。かの六賊に、諸善をうばひとられて、たつ方もなきをば、出離の緣なきにたとふ。泥中よりこがねをとりいだして、富貴自在になるといふは、念佛三昧によりて、信心決定しぬれば、須臾に安樂の往生をうるにたとふ。穢物につゝみて、泥中にをくといふは、五濁の凡夫穢惡の女人を、正機とするにたとふるなり。

一。たきゞに火をつけつれば、はなるゝことなし。たきゞは行者の心にたとふ。火は彌陀の攝取不捨の光明にたとふるなり。心光に照護せられたてまつりぬれば、わが心をはなれて佛心もなく、佛心をはなれてわが心もなきものなり。これを南無阿彌陀佛とはなづけたり。

安心決定鈔　末終

七祖聖教抜粋

一。佛法に無量の門あり。世間の道に難あり易あり、陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し。菩薩の道も亦是の如し。或は勤行精進のものあり。或は信方便の易行を以て、疾く阿惟越致地に至る者あり。乃至若し人疾く不退轉地に至らんと欲はゞ、まさに恭敬心を以て、執持して名號を稱すべし。（易行品二丁）

一。人、能くこの佛の無量力功德を念ずれは、即時に必定に入る。是故に我常に念じたてまつる。乃至若人、善根を種えて、疑へば則ち華ひらかず。信心清淨なれば、華開きて則ち佛を見たてまつる。（同上九丁）

一。彼の八道の船に乘じて、能く難度海を度す。自ら度し亦彼を度せむ。我、自在人を禮したてまつる。（同上、十丁）

一。天人の恭敬する所の阿彌陀兩足尊、彼の微妙なる安樂國に在して、無量の佛子衆に圍繞せらるゝを稽首し奉る。乃至面善くして圓に淨きこと滿月の如く、威光は猶し千日月のごとく、聲は天鼓倶翅羅の如し。故に我、彌陀佛を頂禮したてまつる。乃至我、彼の尊の功德事を說く。衆善無邊にして海水の如し。獲る所の善根清淨なる者、衆生に廻施して彼の國に生せん。願くば諸の衆生とゝもに、安樂國に往生せむ。（十二禮）

一。世尊、我一心に、盡十方の無碍光如來に歸命したてまつり、安樂國に生せんと願ず。乃至正覺阿彌陀法王の善く住持する所たり。如來淨華衆、正覺の華より化生す。佛法味を愛樂し、禪三昧を食となす。永く身心の惱を離れ、樂を受くると間なし。乃至衆生の願樂ふ所、一切よく滿足す、乃至佛の本願力を觀たてまつり、遇ふて空しく過ぐる者なし。能く速に功德の大寶海を滿足せしむ。（淨土論）

一。易行道とは、謂く、但信佛の因緣を以て淨土に生せんと願ずれば、佛の願力に乘じて、便ちかの淸淨の土に往生することを得しむ。佛力住持して則ち大乘正定之聚に入る。正定は即ち是れ阿毘跋致也。譬へば水路の乘船は則ち樂しきが如し。（論註上初丁）

一。夫れ菩薩の佛に歸するは、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸し、勤靜己にあら

す、出沒必ず由あるが如し。恩を知り德に報ず、理宜しく先づ啓すべし。（同上三丁）

一。衆生、心に佛を想ふ時に當りて、佛身相好、衆生の心中に顯現するなり。譬へば水清ければ則ち色像水に現ずるが如し。水と像と一ならず、異ならず。故に佛相好身即ち是れ心想と言ふなり。乃至是心是佛とは、心の外に佛ましまさずとなり。譬へば火、木より出で、火、木を離るゝことを得ざるなり。木を離るゝことを得ざるを以ての故に、則ち能く木を燒く。木、火の爲めに燒かれて、木、即ち火となるが如きなり。（同上廿二丁）

一。之を內に得れば、物外に安し。虛に往きて、實にして歸る。是に於てか息む。（同上廿三丁）

一。彼の罪を造る人は、自ら虛妄顚倒の見に依止して生ず。此十念は、善知識の方便安慰して、實相の法を聞かしむるによりて生ず。一は實、一は虛なり。豈に相比ぶることを得むや。譬へば千歲の闇室に光若し暫く至れば、即便ち明朗なるが如し。闇、豈に室にあること千歲にして去らじと言ふことを得むや。是を在心と名く。（同上卌一丁）

一。云何んが廻向し給へる。一切苦惱の有情を捨てずして心常に作願すらく、廻向を首として大悲心を成就することを得給へるが故にとのたまへり。廻向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相とは、己が功德を以て一切衆生に廻施したまひて、作願して共に、彼の阿彌陀如來の安樂淨土に往生せしめ給ふなり。還相とは、彼土に生じ已て、奢摩他毘娑舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を敎化して、共に佛道に向はしめ給ふなり。若は往、若は還、皆な衆生を拔いて生死の海を渡らせんが爲にし給へり。（論註下五丁）

一。彼の安樂國土は、是れ阿彌陀如來の正覺の淨華の化生する所に非ざることなし。同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに、夫れ四海の內みな兄弟たるなり。（同上十二丁）

一。譬へば淨摩尼珠の如し。之を濁水に置けば、即ち淸淨となる。若し人、無量生死の罪濁ありと雖も、彼の阿彌陀如來の至極無生淸淨寶珠の名號を聞きて、之を濁心に投ずれば、念々の中、罪滅して心淨く、即ち往生することを得。乃至又氷上に火を燃すに、火猛ければ則ち氷解け、解くれば則ち火滅するが如し。彼の下品の人、法性無性を知らずと雖も、但佛名を稱する力を以て、往生の意をなし、彼土に生ぜんと

願ず。彼土は是れ無生界なり。見より生ずるの火は自然に滅す。（同上十六丁）

一。言ふ所の不虚作住持とは、本法藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力とに依る。願以つて力を成ず。力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力願あひ符ふて畢竟して差はず。故に成就といふ。（同上十九丁）

一。智慧と方便と相縁じて而して動じ、相縁じて而して靜なり。動、靜を失はざるは、智慧の功なり。靜、動を廢せざるは、方便の力なり。（同上廿八丁）

一。然るに覈に其本を求むれば、阿彌陀如來を增上縁とするなり。他利と利他と談ずるに左右あり。若し佛より言はゞ、宜しく利他といふべし。衆生より言はゞ、他利といふべし。今將に佛力を談ぜんとす。是故に利他を以て之をいふなり。當に知るべしこの意なり凡そ是れ彼の淨土に生ると、及び彼菩薩人天の起す所の諸行、皆な阿彌陀如來の本願力に縁るが故に。何を以て之をいふ。若し佛力に非ずんば、四十八願便ち是れ徒設とならむ。（同上卅二丁）

一。安樂國土の諸聲聞、皆の光一尋にして流星の如し。菩薩の光輪四千里。秋の滿月の紫金に映ずるがごとし。佛の法藏を集めて衆生の爲めにす。故に我大心海を頂禮したてまつる。（讃阿彌陀佛偈五丁）

一。本師龍樹摩訶薩、形像を誕じて始めて頽網を理む。邪扇を關閉して正轍を開く。是れ閻浮提の一切眼なり。尊悟を伏承し、歡喜地にして阿彌陀に歸して安樂に生せしむ。乃至我無始より三界に循りて、虚妄輪の爲めに廻轉せらる。一念一時に造る所の業足、六道に繫がれ三塗に滯る。唯願くば慈光、我を護念して、我をして菩提心を失はざらしめ給へ。我、佛慧功德音を諮ず。願くば十方諸の有縁に聞かしめて、安樂に往生を得んと欲はん者、普く意の如くにして障礙なからしめむ。（同上十五丁）

一。知を以て佛を取るを、佛を知ると曰はず。不知を以て佛を取るも、佛を知るに非ず。非知、非不知を以て佛を取るも、亦佛を知るに非ず。非々知、非々不知を以て佛を取るも、亦佛を知るにあらず。佛智はこの四句を離れたり。（略論七丁）

一。凡夫の心は野馬のごとく、識は猿猴よりも劇し。六塵を馳騁して暫も停息まず。宜しく信心を至して、預て自ら尅念して、性を成じ、善根堅固ならしむべし。乃至樹の西に傾くに、必ず倒るゝには曲れるに隨ふが如し。若し刀風一ぴ至らしめば、百苦身に湊まる。若し習ひ前より在らずんば、懷念何ぞ辨ずべけんや。乃至此命斷ずる時

は即ち是れ安樂に生ずる時なり。一び正定聚に入れば、更に何の憂ふる所あらんや。（同上十一丁）

一。若し教、時機に赴けば、修し易く悟り易し。機と教と時に乖けば、修し難く入り難し。是故に正法念經に曰く。行者一心に道を求めん時、當に時と方便を觀察すべし。若し時を得ざれば方便なし。是を名けて失となす。利とは名けず。何とならば、もし濕木を攢りて以て火を求めんに、火うべからず。時に非ざるが故に。若し乾きたる薪を折りて以て水を覓めんに、水得べからず。智なきが故なり。（安樂集上初丁）

一。唯淨土の一門ありて、情を以て悕ひて趣入すべし。若し衆典を披き尋ねんと欲はゞ、勸むる處彌多し。遂に以て眞言を採り集めて、助けて往益を修せしむ。何となれば前に生るゝ者は後を導き、後に去しものは前を訪ひ、連綴無窮にして願くば休止せざらしめんと欲す。無邊の生死海を盡さんが爲めの故なり。（同上三丁）

一。譬へば人有りて、空曠の迥なる處に於て、怨賊、刀を拔き勇を奮ひて直ちに來りて、殺さんと欲するに値遇ひ、此人、徑に走りて視るに一河を度すべし。未だ河に到らざるに即ち此念を作さく、我河岸に至らば、衣を脫ぎて渡るとせんや、衣を著けて浮むとせんや。若し衣を脫ぎて渡らんには、唯暇なきを恐る。若し衣を著けて浮かばんには、復首領全くし難きを畏る。爾時、但一心に河を渡る方便を作すありて、餘の心想間雜することなきが如し。行者亦爾り。阿彌陀佛を念ずる時に、亦彼人の渡るを念ふて、念々相次ぎ、餘の心想間雜することなきが如くせよ。（同上廿七丁）

一。大集月藏經に云はく。我末法の時の中、億々の衆生行を起し道を修むるに、未だ一人の得る者あらずと。當今は末法にして、現に是れ五濁惡世なり。唯淨土の一門ありて、通入すべき路なり。乃至若し起惡造罪を論ずれば、何ぞ暴風駃雨に異ならんや。是を以て諸佛の大慈、勸めて淨土に歸せしむ。縱使一形に惡を造れども、但能く意を繫けて、專精に常に能く念佛すれば、一切の諸鄣自然に消除し、定めて往生することを得。（同上三十六丁）

一。道俗時衆等、各無上心を發せども、生死甚だ厭ひ難し。佛法また欣ひ難し。共に金剛の志を發して、横に四流を超斷せよ。（玄義分初丁）

一。諸佛の大慈は苦ある者に於てす。心偏に常沒の衆生を愍念み給ふ。是を以て勸めて淨土に歸せしむ。亦水に溺るゝ人は、須く急に偏に救ふべきが如し。岸上の

者は何ぞ濟ふことを用ひんや。（同上十丁）

一。一一の願に言はく。若し我佛を得んに、十方の衆生、我名號を稱して、我國に生れむと願せむ。下十念に至るまで、若し生れずば正覺を取らじと。今既に成佛したまへり。即ち是れ酬因の身なり。（同上十八丁）

一。夫人（韋提）眞心徹到して、苦の娑婆を厭ひ、樂の無爲を欣ひて、永く常樂に歸することを明す。但し無爲の境、輕爾として即ち階ふべからず。苦惱の娑婆、輙然として離るゝことを得るに由なし。金剛の志を發すに非ざるよりんば、永く生死の元を絶んや。若し親り慈尊に從はずんば、何ぞ能く斯の長き歎きを免れんや。

（序分義廿四丁）

一。然るに悲心無盡なれば、智も亦無窮なり。悲智ならべ行じて、即ち廣く甘露を開く。玆に因て法潤ひ、普く群生を攝し給ふなり。諸餘の經典勸むる處彌多し。衆聖心を齊しくして、皆な同じく指讃したまふ。（同上廿六丁）

一。この五濁五苦八苦等は、六道に通じて受けて、未だなき者有らざるなり。常に之に逼め惱ますさる。若し此苦を受けざる者は、凡數の攝にあらざるなり。（同上廿五丁）

一。西方寂靜無爲の樂には、畢竟逍遙として有無を離れたり。大悲心に薫じて法界に遊ぶ。身を分ちて物を利すること、等しくして殊ることなし。或は神通を現じて而して法を說き。或は相好を現じて無餘に入る。變現の莊嚴意に隨ひて出づ。群生見るもの罪みな除こる。又讃じて云はく。歸去來、魔鄉には停るべからず。曠劫より來た六道に流轉して、盡くみな遥たり。到る處餘の樂なし、唯愁歎の聲を聞く。此生平を畢へて後、彼の涅槃の城に入らむ。（定善義七丁）

一。一には親緣を明す。衆生、行を起して口に常に佛を稱すれば、佛即ち之を聞きたまふ。身に常に佛を敬禮すれば、佛即ち之を見たまふ。心に常に佛を念ずれば、佛即ち之を知りたまふ。衆生、佛を憶念すれば、佛また衆生を憶念したまふ。彼と此との三業相捨離せず。故に親緣と名くるなり。二に近緣を明す。衆生、佛を見んと願へば、佛即ち念に應じて現に目前に在すが故に近緣と名くる也。三に增上緣を明す。衆生稱念すれば、即ち多劫の罪を除かる。命終らんとする時、佛聖衆と自ら來りて迎接したまふ。諸邪業繫能く碍へるもの無し。故に增上緣と名くるなり。（同上廿五丁）

一。一には至誠心。至は眞なり。誠は實なり。一切衆生の身口意の業の修むる所の解

行、必ず眞實心の中に作したまへるを須ゐんことを明さんと欲ふ。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、內に虛假を懷けばなり。貪瞋邪僞、奸詐百端にして惡性侵め難し。事蛇蝎に同じ。三業を起すと雖も、名けて雜毒の善となす。亦虛假の行と名く。眞實の行と名けざるなり。若し此の如きの安心起行を作さば、縱使身心を苦勵して日夜十二時、急に走め急に作して、頭燃を炙ふが如くすれども、衆て雜毒の善と名く。此の雜毒の行を廻して、彼の佛の淨土に生ずるを求めむと欲するは、此れ必ず不可なり。何を以ての故に。正しく彼の阿彌陀佛の因中に、菩薩の行を行ぜし時、乃至一念一刹那も、三業の修する所、皆な是れ眞實心の中に作し給ひしに由りてなり。凡そ施し給ふ所、趣求をなす亦みな眞實なり。乃至不善の三業は、必ず眞實心の中に捨てたまへるを須ゐよ。又若し善の三業を起さば、必ず眞實心の中に作し給ひしを須ゐよ。內外明闇を簡ばず、皆な眞實を須ゐるが故に至誠心と名く。

二には深心。深心と言ふは即ち是れ深く信ずるの心なり。亦二種あり。一には決定して深く、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に沒し常に流轉して、出離の緣あることなしと信ず。二には決定して深く、彼の阿彌陀佛、四十八願をもつて衆生を攝受したまふ、疑ひなく虛りなく彼の願力に乘じて、定めて往生することを得と信ず。（散義義二丁以下）

一。仰ぎ願くは一切の行者等、一心に唯佛語を信じて身命を顧みず、決定して行によりて、佛の捨てしめたまふ者は即ち捨て、佛の行ぜしめたまふ者は即ち行じ、佛の去かしめたまふ處は即ち去く。是を佛敎に隨順すと名く。是を眞の佛弟子と名し。（同上四丁）

一。一心に專ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるをば、是を正定の業と名く。彼の佛願に順ずるが故に。若し禮誦等に依らば、即ち名けて助業となす。此の正助二行を除きて、己外の自餘の諸善を悉く雜行と名く。（同上八丁）

一。又廻向發願して願生ずる者は、必ず決定眞實心の中に廻向したまへる願を須ゐて、得生の想を作せ。此の心深く作すこと金剛の若くなるに由りて、一切の異見、異學、別解、別行の人等の動亂破壞する所とならず。唯是れ決定して一心に捉り、正直に進みて、彼の人の語を聞くことを得ず。即ち進退の心ありて、怯弱を生じ廻願